
黒竜の娘と国王陛下

鈴月鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒竜の娘と国王陛下

【Nコード】

N5441V

【作者名】

鈴月鈴

【あらすじ】

転生しました。私だつて驚きました。だつて、天国すつ飛ばしましたもん。でも、ちょっとまった。私、女ですよ。なのに、転生先が竜つて嫌がらせですか？普通それって男の子じゃないですかー！？

***毎週土曜日更新

プロローグ

頬を誰かにつつかれる。

それに、私はうつすらと目を開けた。

【我が姫。もう朝だ】

それは銀色の龍。

いや、漢字としては竜か？

西洋風のドラゴンと言えはいいのかな。

銀色の鱗に金色の瞳。

翼までも銀色で、その巨体は成人男性の3倍と言ったところだろうか。

【はあい。父様、おはようございます】

かくゆう私も、竜な訳だ。

父様とは違って黒色の鱗。

目の色は一緒なんだけどね。

私は病弱な子供だから、他の竜よりも小さい。

成人女性（これは日本の女性ね）の頭一個分くらい大きいだけ。

たぶん、170ある位だとは思う。

この世界の女の人とそう変わらない背丈。

まあ、竜ですが。

【姫、姫。今日も私の姫は可愛いな】

父様は私のことを姫と呼ぶ。

私に名前はない。

だから、姫と呼ばれる。

私は前世では風という名前だった。
高校生の時に事故で死んで、転生した。
生まれ変わって竜になっていたことには驚いたけど、今は何にも
感じない。

確かに前世は優しい世界だった。
友達がいて、姉妹がいて、家族がいて。
でも、あちらの世界で私は死んだ。
そして、生まれ変わったのだ。
未練が無いと言えは嘘になる。
でも、私には父様がいるから。
母様は人間に殺されたらしいけど、私には父様がいる。
逆に、父様には私しかない。
他のつがいを見つけることもせず、私を育ててくれた。
父様。
父様。
父様が死ぬ時まで、私は側にいるから。
だから、大丈夫。

基本食事は生肉。

だけど人間だった私にはちょっとね。
だから父様は魔力で肉を焼いてくれる。
野菜も食べたいところだけど、どれが食べて良い物かなんてわか
んない。

竜には基本的に魔力がある。

この世界の人間もまばらではあるが、魔力を持つ人間がいる。
魔力のおかげで竜は数日間飲まず食わずでも生きていけるんだ。

だけど、私には魔力がない。

軀は弱いし、毎日食べないと死に絶えてしまう。

魔力が無いから狩りの仕方分からない。

父様が今はそばにいるから良い。

でも、父様も心配している。

私一人になった時、私は死ぬしかないのだろう。

【姫、留守は頼んだよ】

【いつてらっしゃい。父様】

今日も狩りに父様は出発する。

私は洞窟の中でお昼寝して待つのだ。

魔力の練習もめげずに行っているが、一向に魔力の気配はしない。

私は溜息を吐いた。

【なんでかなあ……】

此処に人間が来ることはない。

山の頂上近くの洞窟。

たまに旅人は通るかな。

でも手慣れた旅人はよく分かっている。

竜の半径50メートル以内に近づかなければ、竜は攻撃しないことを。

人間もちろん食べれるよ。

でも、竜は基本争いは好まない。

確かに人間の何倍も強いかも知れないけど、だからこそ、哀しみがあることを生まれながらに知っている。

それは本能。

食べる為に必要な量しか狩りはしない。

人も殺さない。

だって、可哀想だから。

種族が竜だけになってしまえば、生きていけない。
それをよく知っているから。

人間よりも遙かに頭の良い生き物だと生まれ変わって思った。

【暇、暇、ひまあああ】

洞窟の入り口でごろごろしていると、近くで気配がした。
ぴくりと私は動きを止める。

獣の気配でない。

気配を殺して、二足歩行……人間か。

私はうなり声を上げる。

近寄るのなら飛んで逃げよう。

心の中でそつと呟きながら。

【それ以上近寄るな！】

私の怒号に、気配は立ち止まる。

木の下。

いたのはやはり、人間だった。

長い黒髪を一つに纏め、その瞳は蒼い。

背は高く、均等のとれた筋肉をしていた。

年は二十代半ばか。

男は腰に剣を差していた。

「ここにいるのは、お前だけか」

男は聞いてくる。

私は答える必要は無いとでも言いたげに唸った。

【人の子よ。近寄るな】

思念で私が伝えると、男は目を細めた。
剣を抜く気配はない。

悪意は感じられない。

しかし、油断は出来なかった。

黒髪は珍しい。

たまに会う人間達は全て金か銀の髪。

この世界の人間は髪の色素が薄いのは知っている。

目の前の男は髪が真っ黒だ。

まるで、私の鱗の様に。

「魔力がまったく無いな。本当に竜か？」

【五月蠅い】

私はかちんときて、男を睨み付ける。

男は気にした風もなく、肩を竦めた。

「この近くで竜狩りが行われてる。逃げるなら逃げろ」

ぶわりと私の周りに風が吹いた。

体が震える。

この男は今、なんと言った？

竜狩り。

竜を、狩るだって？

なら、なら。

父様は？

父様は、外に……。

【うあああつ】

私は羽を広げ、空へ舞い上がる。
嫌な予感。

的中する気がした。

父様の魔力を辿り、今までで一番早く空を翔る。

激しい父様の魔力の消耗を感じた。

同時に燃え上がる煙。

そして、咆吼。

【姫、姫っ。逃げろおおお！】

私が近くにいることを察した父様の咆吼。
血の匂い。

父様の、父様の……。

私は速度を上げ、父様の上に舞い降りる。

焼けた鱗。

流れ出る血。

そして、息絶え絶えの父様。

魔力の消耗も半端ではない。

父様の周りには人間。

沢山の、人間。

私は目を見開き、羽で風を起こした。

【人間、人間。許さぬぞ！】

私の咆吼は高く。

人間達は後退した。

新しい竜の出現に戸惑っている様でもあった。

【姫、逃げろ】

【父様は黙ってて】

どうせ父様がいなければ私は死ぬのだ。
父様を早く手当てしなければ。
早く、此処から抜け出さなければ。
人間だった時と同じ年月を生きてきた。
ずっと育ててくれたのに。
ここで、殺させはしない。

「取り囲め！」

リーダー格らしき男が叫ぶ。
同時に人間達は隊列を組み始めた。
私達を取り囲む様な陣形。
逃げるのは空しかない。
だが、逃げれるのか？

【人間。何故、今更我等を攻撃する】

私は唸る様に問う。
すると、男が応えた。

「竜は禍の種。強すぎる者はいずれ驚異になる」

【愚かな。人間が仕掛けてこぬなら、我等とて何もせぬのに！】

本当に、愚かだ。
人間と同じように。
竜にも親を、恋人を、姉妹を慈しむ心があるのに。
彼等にとっては、獣と同じ。
否。

それ以上の恐怖なのだ。

【姫。何を言おうとも無駄だ。姫だけでも……】

父様の言葉を遮る様に、人間は仕掛けてきた。
空気を読めよ。

私は魔力が使えない。

だから物理攻撃になる。

風を羽で起こし、人間を吹き飛ばす。

それを父様が援護してくれるのが分かった。

しかし、父様は既に闘える状態ではない。

上がる悲鳴。

父様、父様！

父様の心臓に刺さる剣。

それは堅い竜の鱗をも貫くセチアの剣。

私は父様の上に乗る人間を翼ではたき落とした。

【父様、父様、父様！】

私は狂った様に叫ぶ。

父様は眼をうつすらと開け、私を守る様に抱きかかえた。
大丈夫。

そう言っているみたいに。

【姫。生きなさい。私の可愛い……】

ムスメ。

その言葉を最後に、父様は動かなくなる。

私は咆吼をあげた。

響き渡り、森に浸透してゆく。

同時に躰は銀の光に包まれる。
熱い。

躰に異変。

躰が銀の光を帯びた。

知ってる。

この、禁術。

父様が絶対にしてはならないと私に言った禁術。
躰は小さくなり、人間の形を成してゆく。

「あ、とう……さま……」

声が、竜の使う古語ではない。
喉から。

人間の声帯から出る声。

私は白い腕を伸ばして、父様を抱き締める。

逝かないで。置いてかないで。

そう言っても、もう、父様は応えてくれない。

人間達が驚きながら私を見ていた。

私は気に留めず、父様を呼び続ける。

父様。父様。

何度も、呼んで。

人間の一人が父様に近づこうとした。

私はそこでうなり声を上げる。

「父様に近づくな！」

守る様に、私は立ちはだかる。

許せない。

許すはずもない。

竜だったから服を着ていない。

だけど、長い髪が身を隠していた。

「消える。消える人間！」

狂った様に叫んだ。

人間達はどうすれば分からないといった風に、男を見る。そこに、新たに気配が加わった。

「引け。ドルカ」

それは、洞窟の前であつた男だ。
ドルカと呼ばれたリーダー格の男は、顔を顰めた。

「ですが、殿下」

「引けと言ったが」

再度男の言葉に、ドルカは剣を降ろす様に指示を出す。
男は私を見た。

「お前は、あの洞窟にいた竜だな？」

「そうよ。人間、よくも父様を！」

今にも飛びかからん勢いで私は叫ぶ。

しかし、父様の側を離れようとはしない。

父様の羽を強く握りしめた。

それはもう、父様であつて、父様じゃない。

父様の魂はもう、ここにはない。

生きる意味も、もう、ない。

父様がいたから。

独りぼっちの父様が私を求めてくれたから。

私は、生きてきた。

私の生きることが、父様の生きる理由になるから。でも、何もかも、意味が無くなった。

私は力なく父様から離れ、男に近づいた。

ドル力が剣を抜こうとするのを男が止める。

私は男の前で立ち止まった。

「殺して。竜を、殺しに来たのでしょうか？」

生きる意味はない。

なら、殺して。

父様が全てだった。

全てが無くなって空っぽな私。

殺して。

男を見上げれば、男は眼を細めた。

「お前はもう、竜ではないだろう」

「竜よ。それにどうせこのままでも死ぬわ。なら、早く殺して」

その言葉に男は私に近づいた。

それで良い。

哀しみを溢れた胸を貫いて。

私が殺したいと願う前に。

「気に入った」

その言葉と同時に視界が暗転する。

手刀を入れられたのだと気付いたのは、気絶する直前だった。

プロローグ（後書き）

始めてしまいました。
続きます……かね？

誓約の名の下に

ふわふわ。ふかふか。

この感覚はいつ以来だろう。

もしかして、元の世界に戻ったのかな。

起きたら病院でした的なオチかな。

それがいいな。

父様。

ごめんね。

ちゃんと弔ってあげなくて。

起きれば高い天井が見えた。

起きあがり、周囲を見れば見たこともない調度品。

どうやら、病院ではないらしい。

死後の世界？

天国かな？

そう思っていると、メイドさんみたいな人間が入ってきた。

藍色のお着せで、金色の髪を綺麗に纏めている。

その人間を見て、死後の世界でも元の世界でも無いことを悟る。

「それ以上近づくな。人間」

私は素早く身を起こし、女を威嚇する。

女は躰が震えていた。

私が恐いのだろう。

なのに逃げることはなく、私に一礼した。

「私は、貴女様の世話を任されたリアと申します」

「世話なんていらない。何。愛玩動物にでもするつもり？」

私のうなり声にリアはびっくりと躰を揺らした。
こいつは知らない。

直感的にそう分かった。

そうだ。

ただの侍女が知るはずもない。

多分、殿下とか言われていたあの男。

あの男が私を連れて帰ったのだろう。

私は自分の躰を見た。

人間らしい肉体。

見た目はこちら基準だと15、16歳と言ったところか。

でも肉体的には成人してる。

年齢的にも人間で言えば成人している筈だしね。

私は窓の近くにある花瓶を見つけた。

走り寄って花瓶を割る。

私の奇行にリアは驚いていたけど気にしない。

愛玩動物にされるくらいなら。

父様がこの世界にいないなら。

私は、死を選ぶ。

破片を手に取り首に突き刺す。

リアの悲鳴が上がった。

死のう。

待ってて。父様。

すぐに側に行くから。

「この、馬鹿が」

男の声。

破片は私の喉を傷つけることは無かった。

私の腕をつかみ、押さえつける男。

それは、殿下と呼ばれた男だった。
尋常じゃない力でひねりあげられ、私は破片を落とす。
それでも死にたくて藻？いた。

「殺せ。人間に飼われるくらいなら、死んだ方がマシだ！」

半狂乱になって叫ぶが、男の力が弱まることはない。
そうだ。

舌を噛めばいい。

ショック死で死ぬるかも知れない。

そう勘付いた私を先回りするように男は私の口に手を入れる。

「いいか。俺は殺す気はないし、死なせる気もない」

男は低い声で、そう告げた。

そのまま片手でリアが持ってきた縄で縛られる。

口には猿轡を嵌められた。

「リア。この部屋の片づけを。それから、合図があるまで入ってくるなよ」

私を荷物の様に担ぎ上げ、男はそう言って続き部屋に私を連れて行った。

男は乱暴に私を寝台の上に投げた。

ふんわりとした感触が私を包む。

私は男をにらみつけた。

「お前は俺の嫁としてつれてきた」

正気を疑った。

私は人間じゃない。

竜を、妻にしようとするのか。
いや。

恐らくは妾とするつもりなのだろう。
あまりにも滑稽で笑えてくる。

「気高き銀竜ガルフィオナの娘。俺の妃に相応しいだろう?」

何故、父様の真名を知っているのか。

それに、男の言葉は私を、父様を侮辱しているように聞こえた。
ふざけるな。

陵辱されるくらいなら、刃を突き立てるつもりだ。
誰にも触られたくない。

ただ一人、父様を除いて。

唸り声を上げ始めた私を見て、男は肩をすくめた。

「恨みたいなら恨め。他の誰でもなく、この俺を。俺はこの国の王
ラジス。お前の父親を殺す命令を下したのは俺だ」

私は目を見開いた。

男の地位も然り。

この男が、ラジスが父様の仇なのだ。

ラジスは私の猿轡をはずした。

私の顎を掴み、顔を覗き込んでくる。

「憎めば良い。唯一俺を殺すことを、お前に許す」

そういつて、私の唇に同じそれを重ねた。

始めは甘く、軽く。

次第に深く、激しく。

まるで息を吸い取られるかのように。

舌を噛み切ってやろうかと思いましたが、結局は出来なかった。
何も考えられず、とろんとした眼をラジスに向ける。

【我の名はラジス。契約の名の下に汝に名を授ける】

それは古語。

竜が使う言葉ではあるが、今の場合は竜と人の間で交わされる誓約だ。

その方法で誓うと、拒むことは出来ない。

人間が竜を服従させる為に使われる方法だと父様に教わった。

「いや……！」

抵抗するが、敵う訳がない。

私が暴れれば暴れるほど、ラジスの拘束する力は強くなる。

【汝の名はナギ。我だけの竜となるべきもの。死すべき時は、我の許したその時のみ】

また交わされる口づけ。

同時に心臓が驚掴みされた気がした。

其処に刻印が生まれる。

交わされる誓約。

それが完了すると同時に私は脱力した。

「これでこの城でお前を襲う者はいない」

「許さない。許さないぞ人間！」

「ラジスだ。ナギ」

「知るか。お前などむう」

また交わされる。

言葉はラジスの口の中に消えてゆく。

私は誓約をしてしまったから、ラジスの許可無しには死ねない。

一つの方法を抜いて、だが。

また、ラジスを傷つけることも出来ない。

口づけの間に縄もほどかれる。

「せいぜい俺の妃として楽しませろ」

ラジスは艶やかにそう笑ってみせた。

相反する心（前書き）

病んだ思考の残酷描写があります。

苦手な方はブラウザバックお願いします。

相反する心

憎い。

殺したのがラジスではなくても、そういう命令を出したラジスが嫌い。

竜を殺す人間が。

だけど、私だって元は人間。

人間の気持ちも分かる。

得体の知れない、強大な竜。

その力は武器などなくても強い。

いつ襲われるか分からない恐怖。

私が人間だったら……。

そう考えると、人間全てを憎むなんて出来ない。

憎しみが憎しみを生むことは、前世で嫌と言っただと学んだから。

理解出来ても、気持ちが追い付かない。

やるせない気持ちが、私の中にあるのだ。

そして何より、むかつく。

今のこの状況が。

「もう、は・な・れ・ろ！」

「いいえ！ 今日こそドレスを着て頂きますっ」

兵士から奪った制服を着て逃げる私と、ドレスを持って追いかけてくるリア。

くそ。

あの女の体力は無限か！？

一昨日から目の前に差し出されるドレス。

あれを私に着ると？

裸族じゃないから服は着るよ。

でもね、あんなもん着てみ。
羞恥で死ねる！

「馬鹿リアのくそぼけ〜！」

「ナギ様っ。女性がそんな品の無い言葉を使っではいけません」
「私は竜だもん。良いんだよ！」

こんな調子で逃げ回る。

禁忌で人間になった私。

禁忌。

それは父様の命と引き換えに私を人間にする。

必要なのは術者の思いだけ。

人間はとつくの昔に封印した。

でも、あの時。

父様が禁忌を犯さなければ、私は殺されていた。

それで良かったのに。

なんで、生かされた。

いや、分かってる。

父様の思いなんて。

「ナギ様！」

リアを振り切る為に速度を上げた。

仮にも竜の娘。

体力や瞬発力は人間の比ではない。

ま、普通の竜にしたら劣るだろうけど。

木々に飛び乗る。

前世を思えば猿か！ってツッコミ入れそうになる。

心の中ではちゃっかり入ってるけど。

見る間にリアは見えなくなった。

良し、今日も勝ったぜ。

私は鼻を鳴らしながら木から二階へ飛び移った。

飛ぶことも、咆吼をあげることもない。

ちよっと万能すぎる人間になった。

そう思う。

膝まである長い真つ黒な髪。

前世より肌が白いのはずっと洞窟の中にいたからだろうか。

顔の造形は前世とあまり変わらない。

瞳は竜の時と同じ金。

翼も尻尾もない。

声は思念していた時と同じ声。

人間でも竜でもない。

私は、何？

「ナギ、またか」

溜息を吐く様な声。

瞬時に私の脳内で警告が鳴り響く。

振り返れば奴がいた。

憎くて、殺したくて堪らない男。

この国の王、ラジス。

「黙れ、人間」

「ラジスだ。ナギ」

「お前なんて人間で十分だ」

すぐさま木に飛び乗ろうとしたが、残念なことにラジスの方が早かった。

腰を攫われ、抱き込められる。

私は不快感に爪を立てた。

しかし、ラジスを傷つけることは出来ない。
幾ら爪を立てても、噛みついてても、私からの攻撃は通用しないの
だ。

それが腹立たしい。

ラジスは再度溜息を吐いた。

溜息すんな！

私は腕を突っぱねるが、離れることはラジスが許さない。
腕力も通常よりは強いはずだが、ラジスの前では少女同然になっ
てしまう。

それもこれも、誓約のせいに他ならない。
あれさえ無ければすぐにでもこの男を殺せるのに。

「離せ、人間！」

私がそう叫ぶと、ラジスはあっさりと私を解放した。
解放するならとっとと解放しろ。

そう怒鳴ろうとしてラジスを見た時、私は固まった。
眼が、恐い。

冷たく剣を首筋に当てられている様な気分だ。

ラジスの眼光はそれほど鋭く、私はおののいてしまう。
ここで突つかかれたらどんなに良いだろう。
そこまでの勇氣は私にはなかった。

「忘れるな。お前は、俺の竜だ」

ラジスはもう私の事を妃とは思っていない。
そうだ。

こいつからしてみれば呈の良い玩具。
分かり切っていることだ。

だから、この言葉にショックを受けることもない。

憎くて堪らない男。

人間は憎みきれない。

リアは何日も拒絶する私に懸命に歩み寄ろうと努力してくれている。

だから、人間を完全に嫌いにはなれないと思う。

でも、こいつだけは許さない。

父様の仇。

こいつを楽しませるものか。

私は、竜に戻ってみせる。

父様と過ごしたあの場所で、死ぬまで、あの場所で。

「私は私だけのもの。お前の物になった覚えはない」

「ナギ様、見つけました」

背後から迫る気配。

気付かなかった私の負け。

慌てて振り返ろうとして、がっちりホールドされた。

「本日こそ、逃がしません」

さつき振り切ったはずなのに！

暴れるが、リア腹心の侍女達に取り押さえられる。

私の性格をよく知った攻撃だ。

女には基本的に手を出しはしない。

だって、私も女だし。

痛い嫌いだし。

だから抵抗する物の取り押さえられてしまう。

怖い。

リアさん笑顔が怖いですよ！

「陛下、御協力感謝します」

「二、三日すれば行動パターンは読めるものだな」

「お前等グルかあああああああつ」

何か、国王つて執務があるもんじゃないの？

私の行動パターンつて、逃げている時は今日初めて会いましたが？

変態。

変態国王。

いや、そんなの生温い。

変態国宝ストーカー犯罪淫乱人間！

よし、これだ。

「丸聞こえだ馬鹿が」

ラジスにデコピンされた。

痛い！

あのね、人間のデコピンって言うほど痛くないもんだと思ってた。少女漫画とかにあるデコピンって甘い空気の時とか、言うほど痛くなかったりすぐ主人公言い返したりとかしてるよね。

でもね、世界違うだけで腕力や握力が違いすぎるんだ。

多分生活の基盤が違うからだと思うけど、デコピン。

たかがデコピン、されどデコピン。

下手したらこいつデコピンで相手をノックアウト出来そうだよ。

むしろそれで戦場制覇出来るくらいかもしれないよ！？

「今日はお前の負けだ。リアの言うことを大人しく聞くんだな」

「うるさいうるさいうるさいうるさい！ お前なんて大っ嫌いだ人間っ」

「それは光栄だな。ガキのくせに」

「あ” あん？」

ガン垂れるなんてどこの子供だ私は。
そんな理性は無い。

無くて良いし、そんなの。

とりあえずこいつをけちよんけちよんにすることを考えなければ！

「はいはい。行きますよナギ様」

リアが私を窺める。

不意にラジスと何かアイコンタクトを取っている気がしたのは気のせいか。

部屋に私を連れて行く。

他の侍女も退出させ、ぶう垂れる私を優しく抱き留めた。

「ナギ様。陛下が憎いのは分かります。ですが、今は陛下の庇護下にあるのですよ」

そんなもの、諭されなくても分かっている。

私は死ぬ道以外は残されていなかった。

それに、あいつは無理矢理我を押し入れて私を生かした。

要求されたのは「楽しませる」事。

それは肉体関係か。

分らない。

ラジスは隠すのが上手い。

何故、父様を殺さなければならなかったのか。

何故、父様の真名を知っているのか。

そして、何故、前世と同じ私の名をナギにしたのか。

聞き出さなければならぬ。

今放り出されたら生きていけないのは目に見えている。

だから此処にいるしかない。

感謝はしない。

今でも死にたいと思う。

でも、あいつは何もかもを知っていて隠している。

そうにしか見えない。

許しはしない。

殺したいと思う。

全ては、真実を手に入れなければ分らないことばかりだ。

「ナギ様。人間全てを、嫌いにならないで下さいね」

優しい感触。

それはどこか懐かしい。

そう、前世の母さんみたい。

リアに心を許すつもりはない。

この女も、人間には違いなのだから。

軟らかい肉。

ひ弱な人間。

私がリアを抱き締め、力を入れればすぐに死に至るだろう。

その肉をひきだし、首をラジスの前に差し出すか。

いや、駄目だ。

人間の私が言う。

殺してはいけない。

幾ら憎くても、リアは何も知らない。

駄目。

私の中の竜が咆吼をあげている。

それを理性で押さえた。

でも、ラジスと同じ人間。

あいつと同じなのだ。

心中は相反する思考がせめぎ合う。

何とも言わない私の頭を、リアはひたすら撫でていた。

「さて、着替えましょうか」

落ち着いたところで、リアがそう言った。
その一言で、シリアスぶちこわし。
待て。ちょっと待て。

なんで着替える。

今日はもう諦めたんじゃないかったのか。
私はドレスとか無理なんだって。
持って迫るな。

なんで部屋の鍵が閉まってるの!?

お、押しても引いても開かないっ。

ちょ、おいっ。

外で誰か押さえてるだろ！

今誰だ。

女の声で女らしくない踏ん張る声だしたの。

「ふんがっ」って誰？

ああ、現実逃避。うふふ。

「観念して下さい」

後ろにはドレスを持ったりア。

語尾にハートマーク付いてそうだな、おい。
それはそうと、ちょっとま……。

相反する心（後書き）

拙いですが、読んで頂きありがとうございます！

失ったぬくもり

「お前は確か……」

そう声をかけられて私は振り向いた。
瞬間に肌が泡立つ。

体格の良い男。

スキンヘッドで右斜め上に入れ墨。

蒼い瞳。

この男を、知っている。

「ドルカ……」

ラジスがそう呼んでいたのを思い出す。

父様をその手で殺した男。

ラジスの命令とはいえ、私の静止を聞かなかった。

「あの方の、娘か」

堪えきれなくなった様に、ドルカは呟く。

私は唸り声を上げた。

目を吊り上げ、手に力をこめる。

「殺す。殺す。殺す！」

咆哮を上げた。

そのままドルカに襲い掛かる。

ドルカは動かなかった。

まるで私に傷つけられるのが当然だと言いたげに。

私はそれに気づかない。
気づかない振りをした。

だって、悪いのはこいつら人間だもの。
だから、憎い。

跳躍し、爪を振り下ろす瞬間、巨大な気配を感じた。
私とドルカの間に銀の鱗で覆われた尻尾が入る。

爪は尻尾に阻まれ、ドルカには届かず、それどころか尻尾に吹き飛ばされた。

綺麗に吹き飛ばされ、地面に叩き付けられる。
背中を打ち、私は倒れた。

「バジィやめろ！」

ドルカの制止の声が飛んだ。

背中への痛みに耐えながら、私はバジィと呼ばれたそれを見る。
そして、眼を見開いた。

銀の鱗。

頭には白銀の長髪を揺らし、金色の瞳。

その巨体はドルカの1/5倍。

私と同じ種族。

恐らく力を圧縮することで身を小さくしているのだろう。
その瞳は鋭く私を睨み付けていた。

【その身を弁える。弱き禁忌の娘】

その声の重圧は圧倒的で、同じ種族でなければすぐみ上がっていただろう。

私はバジィをにらみ返す。

「そいつは父様を殺した。許すもんか。許せるか！」

【気持ちには分かる。だが、今やお前は誓約を果たした元竜であり人むやみに人を殺すことは許されない】

「バジイ。それくらいにしておけ」

【主は黙っておれ】

バジイはドル力を黙らせると、私に歩み寄る。

歩む事に揺れている気がする地面。

実際は重圧のせいでそう感じるだけだ。

バジイは私の前に来ると、その額を私の額に当てる。

それは言ってみればヤンキーが額を擦り合せて因縁を付けている様に見えなくもない。

この場合、私とバジイという明らかに勝敗は分かっているし、なんとも間抜けな見た目だが。

私はこの行為を知っている。

竜同士では珍しくない行為だからだ。

父様も、私に諭したり言い聞かせる時にはよくこうしていた。

これは年長者が若い竜をしかる時にする行為だ。

【気高き銀竜ガルフィオナの娘。真実は見たものだけにあらず。よく覚えておけ】

「……つでも」

【まだ若い。ガルフィオナから受け取った命を無駄にするでない】

バジイの言いたいことは容易に理解出来た。

命と引き換えに禁忌を起こす。

それがどのような状況だったか。

竜の中でどのような意味を持つのか。

人間の親にも似た感情から生まれた竜達の意識。

人間達に分からずとも、バジイは私が理解出来ると思ってそう言った。

禁忌を起こすほどの強い思い。

それが、【愛情】だと人間は知らないだろう。

強ければ強いほど、その成功確率が高い。

今ではごく少数しか使えない禁術。

親が子を思うが故に出来ること。

【――それに、人間達にはまだ禁忌の本来の意味を知られぬ方が身の為だ】

バジイがドルカに聞こえない様に、思念で伝えてきた。

本当の意味。

なにそれ。

私が首を傾げると、バジイは眼を細めて笑った。

【もう良いぞ】

そう言って私を解放する。

すっかり気概を削がれた私は、ドルカにそれ以上食って掛かることはない。

というか、バジイは恐らく父様と同じくらい生きていると思う。

その考え方や物腰がどことなく似ているのだ。

もつとも、父様は髪の毛なんて無かったし。

もしかして、父様は人型だとスキンヘッドだったりするのかな。

イメージとしてはスキンヘッドに180センチ。

筋肉質で髪は銀色。

見た目は30代後半。

ダンディなイメージがわき起こるが、一度頭の隅に追いやる。

駄目だ。

これ以上やるとなんだか本当にそのイメージになりそうで怖い。

【主、久々の同胞だ。少々遊んでくる】

「……夕飯までには戻れ。殿下には伝えておく」

了承と言わんばかりにバジイは頷いた。

私の首元を掴んで振り上げ、その背に乗せる。

どうやら、何処かに連れて行くらしい。

私がしっかりバジイの首にしがみつくと、バジイは空高く舞い上がった。

久し振りの大空。

良く晴れた空は、私の心を軽くする。

自分の翼で飛んでいる訳ではないのが、ちょっと悔しいけど。

首都が見えた。

あつと言つ間に遠ざかり、街道の上を駆け抜ける。

人々が空を見上げているのが分かった。

竜って珍しいもんね。

そこで私はバジイに質問した。

「バジイ……さんって、ドルカと誓約してる？ それに、父様の事

――」

【バジイで良い。昔人間に狩られる所を助けてもらつてな。誓約はしてないが、忠誠を誓っている。それにガルフィオナは我等竜の間では有名だ。数多の戦を駆けめぐり、先々代の陛下と誓約を交わし、最強と謳われていた程にな】

バジイって意外に忠義心に厚いつて、そうじゃなくて。

父様、それぐらいに強かつたんだ。

それに、先々代……ラジスのひいじいちゃんってことだよな。

そんな人と誓約を交わしていたなんて。

だから、ラジスも父様の真名を知っていたのかな？

森を通り抜け、一度山を越える。

気流に乗って更に進み、更に沼地を越え、街を越えて次の山々が見えてくる。

そこは良く見知った山。

私と父様の住んでいた山だった。

私は驚いてバジイを見るが、素知らぬ顔でまた私の首根っこを掴んだ。

【うむ。ここで良いか】

「は？」

そして、何を思ったのか――私を振り落とした。
いや、あのねバジイ。

竜の力って人間の何倍もある訳で。

そんな力で振り落とされてみい？

普通に落ちるよりも落下速度が速い訳で。

「私に死ねと!？」

「ぎゃあああああああああつ」

読者の皆様に。

女らしくない悲鳴だなと思った人。

しょうがない。

人間誰だって命の危険を感じたら女とか男とか悲鳴の種類考えている時間なんてある訳無い。

え、元から私女らしくないって？

ふふっ。そんな馬鹿な。

現実逃避をしている間にも私は落ちている訳で。
私の悲鳴は続く。

「バジィのアホおおおボケええええええ！ 呪ってやるうううう
うううう！！」

此処で人語を喋っている余裕がある私。

もちろん余裕なんて本当は無いよ？

でも、叫ばずにはいられない。

どう考えたって無傷で落ちる方法なんて思いつかない。

魔力さえあればクッションに出来るけど。

そんなの無理。

だって、魔力ないもん！

ぼっかり空いた場所に落ちる。

それだけは理解して、私は頭を守る様に身を丸めた。

死んだら絶対、ぜえつたいに、呪ってやる。

そう考えながら、衝撃を待った。

.....。

.....。

.....。

うん、待ったよ？

でも、いつまでも考えていた衝撃は来なかった。

それどころか、空気抵抗も感じない。

痛みを感じないまま死んじやつたかな。

そう思って恐る恐る目を開けると、私は浮いていた。

【うゝむ。命の危機で魔力が使える様になるかと思っただんが】
「使えるまえに死ぬわ！」

バジィが首を傾げる。

うつつ可愛い。

けど、可愛いからって許したら駄目だから！
きつちり叱らせて頂きます。

「バジイ。私は魔力が無いの。人間の普通よりは体が丈夫になった
とは思うけど、私は人間と何も変わらないんだよ」

【いや——そうか。そうだな。すまなかった】

首を下げてごめんなさいのポーズ可愛い。

犬みたいな耳を伏せているとことか！

私は撫で回したい気持ちになりながら許すことにした。
勿論顔に出してないよ？

私は変態じゃないからね。

「バジイ。父様に会いたい……」

私がそう言うと、バジイは歩き出す。

どうやら分かるみたい。

生きている時ははつきり感じられた父様の魔力。

微塵も感じない今、父様が死んだことを理解する。

もう、あの暖かいぬくもりは、永遠に失ってしまった。

しばらく歩いていると、バジイがピタリと止まる。

私を見て、柔らかに言った。

【此処だ】

私が顔を上げた瞬間、風が駆け抜けた。
髪が遊ばれ、花弁が舞う。

「とう、さま……」

残像を見た気がした。

雄々しく、暖かい眼差し。

その傍らに立つ雌竜は誰だろう。

優しい笑みで、父様の隣に寄り添っている。

それが母様だと気付いたのは何故か。

しかし、それも幻だ。

そこにあるのは、彫刻だった。

【ガルフィオナとリゼリアティス。お前の両親だ】

涙が零れ落ちた。

私はこの世界でたった独りぼっち。

天涯孤独と言えは良いのか。

今更、今更本当に理解した。

置いていかないで。

独りにしないで。

愛してる。

大好きだから。

父様、母様。

私を、連れて行って。

失ったぬくもり（後書き）

コメディ……。

次回はリア視点です。

ご意見、ご感想頂いて、また沢山の方に読んで頂いて励みになります。

ありがとうございました！（b^ー^）

願いは遙か果てに

—そうか。じゃあ、お前はリアだな。

いや、ちよつと待て下さい。

リは分かるんですが、何故にリア？

私の名前をそんな風に略す人なんていませんよ。

—別にいいだろう。

いやいやいやいや！

待てやちよつと。

貴方の愛称だつて頭の文字からちゃんと取ってるでしょう。

なのになに……。

目覚めるとそこはナギ様の部屋の隣。

侍女の為にある部屋。

時刻は夜明けまであと一時間。

私は上半身を起こす。

頬に流れ落ちた雫を、そつとなぞつた。

「……涙、か」

自嘲するでも無しに、そつと呟く。

あの方はもういない。

分かっている。

私はあの方の名を呼ぶ資格などありはしない。

宰相であるゼラルフォの養女となり、あの方に会うことも出来なくなつた。

あの方の忘れ形見であるナギ様。

二度と会うことはないと思つていた。

最後に会つたのは、ナギ様が二歳の時だったか。

ナギ様は私のことなど覚えてはいないだろう。

だけど、今のナギ様を見て分かるのは、あの方が愛情を沢山かけたこと。

沢山の愛情の中で、ナギ様が育つたこと。

それは、何よりもの救いだ。

準備を終えて、ナギ様の起床時間になる。

私はナギ様の部屋にノックして入室した。

さてと。

今日はなんのお召し物を着て頂こうかしら。

だって、あの方によく似た童顔はまさか二十歳だとは思えないわ。

膝当たりまである黒髪の長髪。

竜を表す金の瞳は、星の様に綺麗で。

白い肌に色づく頬。

世の男性が見ればきつと惚れるに違いない。

そんな自慢の姫なのに。

な・の・に！

ナギ様ときたらズボンを履くわ、男のような姿で動き回るわ、木をつたつて逃げるわ。

あの方は一体どんな教育をされたんですか！？

あれほどナギ様が人間になった時にとちくちく言い続けていたのに。

あの方ときたら……こほん。

小言はこれくらいにして、ナギ様を起こしますか。

「ナギ様。朝でございます」
「うゝにゅ」

か、可愛い！！
なにこの小動物。

二十歳なのに瞼ごしごしして、まだ覚醒してさえない瞳を私に
向けて。

これは私に襲って欲しいと言うことでしょうか。
そうですね。

それしかないですよね！
げふんげふん。

ナギ様のことになると暴走しがちの脳内を少々抑えなければ。

「ナギ様。朝でございます」

「あと十分」

「ナギ様？」

可愛い。

可愛いけど、此处で甘やかしたら駄目なんだ。
寝てて良いですよ。

むしろ添い寝させて頂いてよろしいでしょうか。
いいえ！

ナギ様にそんなこと言えるはずありません。

「りああ？」

はっ。

いけない。

ナギ様のあまりの可愛さに意識が飛んでしまいました。

「今日のお召し物は……」

はい。

逃げないで下さい。

今日もナギ様と私の室内追いかけっこが始まる。

まあ、朝はわりとすんなりと着替えて下さるので楽なのですが、
本当は朝から湯浴みして、着替えて頂いて（もちろんドレス）、
化粧をして……とやることなど山の様にありますが、余りにもナギ
様にそういう観念がないと申しますか。

いやがられるので、お化粧も必要最低限。

問題は朝食後。

ナギ様は同じ身長 of 兵士を見かけてじっと見ていることがたまに
ある。

危険。危険信号発令！

逃げて下さい、其処の兵士！

尽かさずナギ様は走り出す。

私は追いかけますが、幾分ナギ様は足が速いので、すぐに見えな
くなってしまった。

一応、私もそこそ速いほうではあるのですが。

次に見た時には兵士の服装なので、とりあえずは兵士の冥福を祈
ろうと思う。

私はいつもナギ様の側にいる訳ではない。

ある程度の自由を与える様にラジス陛下に頼んだから。

一介の侍女がこんなことを直訴出来る訳がない。

私が「私」であることを喜ぶのは十数年ぶりかと思う。

かといってナギ様には誓約が付いている。

それは陛下が誓約と言う束縛。

そのままナギ様が陛下に恋して下ればいいのに。

いや、今の状態では無理ですね。

むしろ、陛下だって罪悪感でいっぱいでしょうし。

二人をくつつけて、それを傍目から見るのだ。

最近増えてきたナギ様ファンの方々も、それを望んでいる。

ふふ、その為にも色々しておかないと。

黒いなんて言わないで下さいよ。

それでもナギ様が私を拒絶しない様になるまで時間がかかったのですから。

夕方帰ってこられたナギ様の目は、真っ赤に充血していた。

「ナギ様、いかがされましたか」

すぐさまナギ様の眼に氷水を当てる。

ナギ様は何も言わなかった。

ナギ様の頭に付いていた花弁。

それは、あの方の墓を作った場所に咲く珍しい花で。

ああ、そうか。

ナギ様。

不甲斐ない私を、どうか許して。

ナギ様は夕食を摂られず、寝台に入られる。

ナギ様がこちらに来られてすぐ、私はお会いした。

その声を聞いて感動に胸を振るわせ、心の儚さに二度と手放すものかと誓った。

そう、もう二度と……。

始めは私を警戒し、ことある事に自害されようとした。

それを私は止めることなく見つめる。

だって、誓約で縛られた竜は、自害することなんてできないもの。あの方もそう。

死のうとして、誓約で括り付けられて……でも、最終的には当時の王と盟友になった。

ラジスの判断は間違っではない。

もし、ラジスが誓約をしなかったら、私が他の人間にそうさせていただろう。

決して死なせはしない。

あの方のもとへ行くことは、許さない。

あの方の望みだから。

唯一、生き残らせて見守ることしか、私には償う事など出来ないから。

ナギ様は強烈なスピードで自信で傷つけた軀を治した。

本人の意思とは関係なく。

それが誓約。

痛みはあつても、自害することは出来ない。

それを理解すると、周囲に当たり始めた。

始めは私以外にも侍女は4、5人ほど選抜させていたが、ナギ様の暴れようから避難させ、今は私一人に全て任されている。

ナギ様は私を拒絶し、触れようとすれば引つ掻き、攻撃してきた。そんな状態が続いて、ある日ナギ様は気が付いた様にテラスへ駆け出された。

不意に予感が突き抜ける。

ナギ様は自害の内容に「飛び降り」と言うものを含めていなかった。

飛び降りて、当たり所が悪ければどうなる。

死にはしない。死なせはしない。

でも、痛みはあるのだ。

死ぬ様な痛みを、これ以上受けて欲しくなかった。

だから止めた。

口論になって、私の腕の中で暴れて――そして、突き飛ばされた。その先が部屋なら良かった。

でも、落ちたのはテラスから。
ナギ様の悲鳴。誰かを呼ぶ声。

大丈夫ですよ。「私」は、これくらいでは死にません。
陛下がやけに焦った様子で来た。

幸い打撲と全治一週間の怪我。

ナギ様は泣いて、私に何度も謝った。

私がお世話出来ない間、私の部屋に嫌いなはずの陛下と共に毎日
会いに来て下さった。

何度も謝り、もう馬鹿な真似はしないと約束して頂いた。
それからだ。

ナギ様は私を拒絶せず、女性には特に優しくなられた。
侍女に関しては一人だけで良いと私のみをお付けになった。
ちよつと優越感。

ドレスも挑戦して頂こうと、最近奮闘してる。

ナギ様は逃げるけど、私に捕まった後はちゃんと着替えて下さる
から、単純に追いかけて楽しむ部分があるんだろう。
最近陛下もそれに加わり、目くじらを立ててはいたが。

「リア」

ナギ様が私を呼ぶ。

私は返事をしてナギ様の側に近づいた。

「父様、もういないの。何処にも、いないの。私、独り……」

私がいいます。

そう言いたかった。

でも、ある程度の忠告や言い返しは出来ても、それだけは言っ
てはいけない。

その言葉を言う資格は、私にはない。

「ナギ様。泣いて良いですよ。うんと泣いて、それから考えましょう。貴女が眠るまで、お側にいますから」

人間を嫌いにならないで。

私は彼女にそう言った。

それはあまりに身勝手で。

でも、本当は人間が悪い訳ではない。

全てあの方の願い通り。

友の、師の――愛しいあの方の願いを、叶えただけに過ぎない。

仕方のないことだった。

それをナギ様は知らなくて良い。

あの方はナギ様を愛していたからこそその選択をしたのだから。

あまりに時期が重なりすぎただけのこと。

陛下も、騎士団長も気に病みすぎている。

全ては竜の、身勝手な願いなのに。

「リアは、温かいね……」

呟く様に、ナギ様は言った。

その言葉に、胸が温かくなる。

ナギ様が寝息を立てられたのは、日付が変わる一時間ほど前だった。

私はそつと部屋から退出する。

そのまま自分の部屋に向かうことも出来たが、私はある場所へと向かう。

ある部屋の前につくと、私はノックした。

中から聞こえる声に、部屋の主はまだ起きていることを知る。

入室すると、部屋の主は書類から視線をあげた。

「どうした」

「そろそろお休み下さいませ。ナギ様が来られてから、根を詰めすぎかと思えます」

私が忠告すると、主——ラジス陛下は肩を竦めた。

書類を置き、背もたれに深くもたれる。

その顔にはいつになく疲れが見えていた。

「ナギ、か……」

「ナギ様に罪悪感をもつのは当然かと思いますが、貴方はあの方の願いを叶えただけ。本来なら、あの後ナギ様を手元に置いて庇護することなんて有り得ないと思っていました」

陛下の瞳が、細められた。

鈍い光。

陛下が私にすら、本心を隠す様になったのは何時だったろうか。

「リア。勘違いするな。お前には悪いが、あれはただの暇潰しだ」

陛下は私を見てきた。

聡い、いつも真実を見抜いてきた瞳。

賢王と呼ばれるほどの才能をもつが、私から見ればまだまだ子供。背伸びして、独りで戦う。

真の孤独を一生背負う。

例え、憎まれたとしても。

それが、【王】の定め。

今もそう。

ナギ様がいつか真実を知り、己を責めることが無い様に。

陛下は、憎まれ役をするのだ。

「憎みたいなら勝手にしろ。自殺出来んかわりに、あれには俺を殺す資格がある」

「陛下……」

「まあ、まだ15歳にもなりきっていない年では理解出来んだろうがな」

……。

……は？

私は目が点になる。

ちよつと待て。

「陛下、ナギ様を何歳だと？」

「15歳だろう。それかもっと下か」

此奴は、何を言っている？

いや、確かにナギ様は幼い姿をしている。

童顔なのは遺伝なのかも知れないが、彼女はこれ以上成長することはない。

いいじゃない童顔。

ビバ！ 可愛い！！

……つて、そうじゃなくて。

「ナギ様は20歳ですよ」

「え、15歳じゃなかったのか」

「確かに、それでも通用致しますが、貴方ナギ様を18年前に見たことがあるでしょう！？」

あ、陛下に思わず貴方って言っちゃった。

でも、陛下は気にしていない様。

そうだったかなと、記憶を探っているようだ。

もつとも、そんな前のことなど、覚えている方が人間的にはおかしいと思うが。

「あれが、20歳……あれが……」

「陛下。ナギ様の前では言わないで下さいよ」

ぶつぶつ呟く陛下を睨み付ける。

不意に、私は気配を感じて目を細める。

目の前ではまだラジスが呟いていた。

いや、そんなに驚くことなのか。

本当にナギ様の前で言わないことを切に祈ろう。

私は丁寧に腰を折った。

「――陛下。『鼠』が入った様ですので、これで失礼します」

私の言葉に、陛下は眉を寄せる。

最近『鼠』が多い。

恐らくはナギ様の偵察か。

騎士団も気配を察するには長けてはいるが、「私」には及ばないだろう。

ああ、やはりナギ様の部屋を目指している様だ。

さつさと始末しよう。

「リア。騎士団に」

「いいえ。「私」が出た方が速いです。それに、ナギ様の安眠を妨害する訳には参りませんから」

につこりと微笑む。

どこにいたとしても、奴等はあの方の忘れ形見であるナギ様を捜しただろう。

此処にいることに、陛下へ感謝を。
だって、一番守りやすい場所だから。

「なら、一人だけ残して後は消せ」

「御意に」

私は陛下を通り過ぎ、テラスの手すりに手をかけた。
ナギ様。

私はたかが飛び降りたくらいで本当なら怪我一つしないんですよ。
そのまま飛び降り、ナギ様の部屋へと向かう。
城の中へ侵入した気配はない。

恐らくは陛下が騎士団を誘導したか。
なら、此处で潰すだけ。

暗闇。

それでも、灯に照らされ私の姿が映る。
纏めていた髪を下ろせば、銀の長髪が揺れた。
そして、私の瞳はある種特有の金へとかわる。

「来なさい。ちゃんと、殺してあげる」

私は元竜。

ナギ様と同じく竜から人になった者。

願いは遙か果てに（後書き）

お気に入り件数400、または1000Pt突破しました。
ありがとうございます。

コメデイ目指して頑張ります！

小さな願い

ほかほか。

ぬくぬく。

竜って鱗があるから思ったよりも堅いんだけど、私にとっては慣れ親しんだ感覚。

今では高級羽毛布団よりも、竜と寝ているのが気持ちいい。

そこは城の一角の大きな木の下。

バジイが昼寝をしている所へ私が乗っかって寝た。

【ガルフィオナの娘。いい加減に除ける】
「ヤダ」

バジイは嫌そうな顔をするものの、決して私を振り落とそうとかはしないんだよね。

そこが良いやつって言う証拠なんだけど。

調子に乗ってバジイの肌具合を手で確かめ、頬を寄せる。

これは父様にも良くしていたじゃれ合いだ。

こうしていれば父様や度々訪れる父様の友人達は遊んでくれる。

そんな私の様子を、バジイが呆れた様に溜息を吐いた。

【まったく。あのガルフィオナも、とことん甘やかしたと見える】
「うん。そうだね」

甘やかされている自覚はあった。

依存しているのも。

でも、竜からしてみれば、私は赤子同然で。

竜の寿命は大体600〜800年くらいで、父様は確か670歳だったかな。

中には1000年生きる古竜と呼ばれる竜もいるらしいけど、成人と認められるのが100歳を過ぎてから。

だから、私は竜から見れば小学生くらいに見えるのだろうとは思う。

もつとも、禁忌を犯した竜は寿命が極端に狭まる。

禁忌を本来使っても身に異常が見られないのは100歳から。

それまでに使ってしまったえば、100年も生きられない。

それくらいは父様達に教えて貰っていた。

私からしてみれば、本当に人間と同じくらいしか生きられないのだ。

「そつえば、バジイって何歳？ 成人はとづくにしてるよね。 600歳くらい？」

【違う。4年上だ】

細か！！

むしろそれ600歳で良いでしょうつ。

お前は雌か。

竜なんだから自分の曖昧でも十分通用するよ。

気にするのなんてむしろ人間の雌いや女だけだよ！？

【今、失礼な事を考えてないか】

「い、いや。メッソウモゴザイマセン」

鋭すぎるでしょう。

片言ですが、気にしないで下さいませ？

【そつえば、リゼリアティスは329歳くらいだったな】

細かいよ。

むしろそれ、330歳で良いよね。

しかも年の差夫婦。

340歳差つてでかすぎでしょ！

母様つて、父様の半分しか生きてないよ。

人間に置き換えると、30歳と15歳みたいな。

元日本人の一般人としては余りにもそれは犯罪でしょ！

まだ7歳差とかだったら許せるけど、15歳はどう見ても犯罪だ。
母様年上好きか。

「……父様、ロリコンだったのね」

【ろりこん、とはなんだ？】

「知ラナイ方ガ身ノ為デス」

新事実発覚したところで、私は一息吐く。

だらしなくバジイにもたれかかる。

バジイに多少窘められたが気にしない。

だって今日もズボンだし。

親切なお兄さんが貸してくれたんだもん。

決して身包み剥いでドレスを押しつけた訳じゃないし。

今日はお兄さんの宿舎の部屋まで木伝いに侵入して、快く貸して貰った。

顔が引きつっていたのはご愛敬つて事で！

「そう言えば、何でバジイは父様と母様のこと詳しいの？」

【我は奴の……人間風に言えば好敵手だな。良く喧嘩や縄張り争いをしてた】

バジイつて、あの森の近くに住んでたのか。

生物学上、縄張り争いは仕方ない。

親兄弟でさえ、一度側を離れることを誓えば、関係ないのだから。

竜は一度の妊娠に一匹しか生まれない。
だからこそ、個体数が少ないのもある。
オマケに子供が出来にくい。

まあ、多すぎたら縄張り争いが激しくて大変な事になりそうだし
ね。

【リゼリアティスとはまだ大戦があった頃、人間に捕らえられてい
るところを奴が助けた。今から200年ほど前か。あの頃は我も奴
も若造だった】

「母様って人間に捕まってたの!？」

【ああ。当時の国王は竜を役役することを考えてばかりいた屑だっ
た。リゼリアティスは竜態だったから誓約出来る様な隙は与えてい
なかった様だが】

【誓約】。

私は胸を押さえ、刻印のある場所へと触れた。

それは絶対服従の証。

人間が竜を従える術。

「殺したい。そいつ」

【もう死んでいる。それに、そのおかげで二人は出会った】

浮かぶのはあの父様のお墓。

父様をよく知っている人が作ったかの様で、完璧に写し取ってい
た。

隣にいる母様。

会いたかったな。

一度でも良い。

その姿を、声を。

瞳に焼き付けたかった。

しかし、そんな私の傷感も、意図も簡単に消え去る。
次の、バジイの言葉で。

【しかし奴の執着っぷりは凄かったぞ。リゼリアティスに一目惚れした後、結界で閉じこめて首を縦に振らずまで出さないような――】

ピキ。

私はその場で動けないように固まった。
待て。

誰の話？

【つがいになることを了承させた後も蜜月とか言っただけで、その間は何があろうと誰も結界内に入れなかったしな。いやはや、我等が子が出来にくいとは言え】

「バジイやめてええ!!」

私は顔を真っ赤にさせながら、バジイを止めた。

バジイがやれやれと首を振っていたのを止めて、私を見ってくる。

その大きな瞳に、真っ赤な顔の私が映っていた。

当たり前でしょ。

私の父様像が。

私の凛々しくて、格好良く、過保護で、優しい父様が。

ただのロリコンで変態だなんて、認めたくない!!

そんな私をどう捉えたのかは分からないが、バジイは大きく頷いた。

【うむ。初心なことよ。少々時期が早かったな】

ドウィウ意味デス力。

そんな父様像が壊れる様な話は聞きたくありません！

母様、父様の何処が良かったんですか。
まさか、無理矢理とかはありませんよね。
私の父様が母様にまさかそんな……。

「バジイ様。ナギ様をからかうものではありませんよ」

溜息混じりのそんな声が聞こえた。

振り向けばこの世界の人間によく現れる金色の髪をしたリアがいた。

リアは私の側まで近づき、私の頭を撫でた。

「ナギ様。始めは何であれ、リゼリアティス様はきっとガルフィオナ様を愛しておられたはずです。その結晶が、貴女様のはずです」

真剣な瞳で、そう告げられた。

そんなリアを見て、私は納得する。

そうだよね。

子供は、愛の結晶って言うし。

私も、二人に愛されて生まれてきた。

だから、あんなにも父様は私を無条件で愛してくれたのだから。

「そうだね。うん。きっとそうだよね！」

「はい」

「って、何でリアは人間なのにそんなこと分かるの？ ああつ、しかも古語聞き取ってるし」

リアは正真正銘人間の筈だ。

人間の匂い（これ言ったら獣臭いけど）しかしないし、むしろシヤンプーの匂いだし。

それに柔らかいし、足だって私より遅いし、可愛いし細いしそれ

に胸だつて……。

【いや、貴女は……】

「バジ様。私はリアですが、何かございますか？ それにナギ様。私は以前ガルフィオナ様とお会いしたことがあります。古語が話せるのは頑張つて覚えたからですよ」

古語は竜に聞くのが勉強の近道だ。

確かに、父様に会ったことがあるなら古語を教えて貰うことも可能だろう。

むしろ、教えて貰えるほど頻繁に会っていたのだろうか。

それって私の生まれる前の話だね？

ちよつと待て。

リアって何歳だ。

「秘密です」

「人の心勝手に読まんで下さい！！」

【口に出てたぞ】

うおお！

誰かこの余計な口を塞いで下さい。

「大丈夫です。ナギ様は十分可愛らしいです。寝顔なんて最高ですね。20歳とは思えないくらいあどけなくて若く見えて、それに朝起きた時なんて目をごしごししてネコみたいに！ ああ、ちなみに可愛いですが、目を擦ると細菌が目の中に入る場合がございますので、擦るなら頬をお願いします」

ちよつとリアさん？

「それに一日中お側にいれて私は幸せでございます。お風呂に入らせて頂く時も顔には似合わず成熟しきっているそのお体を魅せて洗わせて頂いて光栄ですし」

たんまたんまりアさん。

聞こえてます？

きーこーえーてーまーすーかー？

「侍女仲間には羨ましがられますし、ナギ様最高です！」

グッジョブじゃねえよ。

リアさんが壊れた。

誰か、誰か！

Help me！！

こんなキャラだとは思わなかったよ。

むしろキャラが壊れたよ。

私の中の理想の女性だったリアが壊れたよ。

誰が責任を取ってくれる。

「こほん。まあ、ナギ様自慢はこれくらいにさせて頂いて。ナギ様。ドレスはちゃんと着ましようね？」

戻ったは良いけど、それはないよ！

今日も私の絶叫が響き渡る。

頼みますので、ドレスは許して下さい。

小さな願い（後書き）

やっと此処まで辿り着いた……。

唐突にシリ阿斯入ったりもございますが、これからも宜しくお願い
します。

ちなみに、サブタイトルですが、意味はドレスのことです。
本当に着るのが嫌なんでしょうねナギ……。

ご愛読、ありがとうございます！！

暖かい手

暖かい。

寝てる時、いつも感じる体温。

いつもそう。

眠くて起きられないけど。

瞼も開けられないくらいだけど。

誰かが私の頬をなでる。

暖かくて、気持ちよくて。

父様だと思った。

でも、確かめるのが怖い。

その人が父様じゃなかったら……

「つて言う感じなの」

「はぁ、そうですか」

金じゃなくて、茶色の短髪に蒼い瞳の青年。

年は16歳くらいかな。

まだまだ成長期つてところで、兵役二年目らしい。

肩と腕に厚い皮当てを付けている。

これは彼が伝令係だからだ。

伝令に使うのは鷹。

足に手紙の入った筒を括り付け、相手に届けさせるんだって。

しかも、彼は人間なのに動物と話せると言う特殊スキルを持っている。

良いよね。

動物と話せるって。

もちろん私も種類的には動物なので、動物と話せる。

話してるのは古語ではないけど、違う言葉でも理解してくれるのだ。

それは私達竜が、古語を使えない人間に対して使うテレパシーみたいな能力に似ている。

要約すれば、私達竜はほとんどの生物と会話が出来ること。

人間ができるのは本当に珍しい。

ちなみに彼の名はアース。

英語で地球って言う時と同じ発音だった。

なんか規模がでかそう！

「ですが、ナギ様のお父上なら、竜ではないのですか」

「そうなんだよ。それがなんでか……」

「ごつごつした大きな手。

でも、温かくて、優しいぬくもり。

父様以外にそのぬくもりを与えてくれる人など知らない。

「まあ、夢かも知れないけど」

「そうですね」

いや、そこで即座に否定されるのも何かむかつく。

むかついたので、ちよつと私はアースに近づく。

「ナギ様？」

につこり微笑みながら、アースの腕を持って袖をまくり上げた。

これでも、結構自信はあるのだ。

自分の、歯の堅さには。

「いつてええええええええ！」

上がるアースの悲鳴。

そんな物知ったことか。

私がどんなに父様であることを渴望しているかも知らない癖に。涙声で懇願してくるアース。

私は一応来賓？みたいなものだから多少の遠慮があるのだろう。そもそも、本気を出したらすぐに殺せるし。それに、一応此処では位は高いみたいだし。

大丈夫！

骨は碎けて無いから！！

アースの悲鳴を聞きつけ、部屋の中に割り込んできた兵士達。あ、見つかった。

呆然とする兵士達を余所に、私は顎の力を緩めた。

アースの所にいるのって、アースとアースの同室くらいしか知らないんだよね。

リアを呼ばれる前に私は窓辺による。

「アース、暫く反省でもしてなよ！」

そう高らかに言いながら、私は窓から木に飛び移った。

服はもちろんアースのもの。

私の服は持ってきたリュックに入れている。

後で皺になるので早めに部屋に戻ってベッドの上に広げてから、もう一度散策に行こう。

私はこれからのことを考えている内に上機嫌になり、早速部屋に戻ってすぐさま飛び出した。

最近ハマっていること。

それすなわち城の中の散策！

だって、私高校の時に美術学校に行っていた訳でもないし、こういうお城って初めて。

さすがに兵士達の所に行くのは嫌だけど、王宮の中を気配を消して散策。

たかが人間相手。

勝とうと思えばきつと勝てる。

この数日間でとりあえず私の部屋がある塔は制覇。

ふん、見張りなんて簡単だね。

これなら、私以外でも城の中に簡単に入られそう。

……なんか心配になってきたぞ。

「此処が、左翼棟……ね」

ふふん。

最近考え始めていたことを、実戦する良い機会だ。

私は左翼棟へと向かった。

この王宮は五つの棟から成り立っている。

一階がダンスホールらしき場所、二階が謁見室、三階が執務室って言う棟が中央棟。

左にある左翼棟が一番上がお偉いさんとかの執務室とかで、一番下の階に食堂があったりする。

その反対側も左翼棟とよく似たような感じ。

そして中央棟の後ろにあるのが、銀棟と金棟。

銀棟は来賓とかが宿泊したりするえーと、客間みたいな棟。

金棟は王族の為の棟って言うたら、わかりやすいかな。

って、いう情報は全部アースに教えて貰っただけだね。

私は基本金棟から移動しない。

私のことを悪く思っている奴がいらないとは限らないからか、この前会った宰相（リアの義父とは…… or z）には警護の人員などの采配で金棟にいるのが好ましかったらしい。

常の風習からか、反対は多かったらしいが、ラジスが権力でねじ込ませた。

なにやってんだ、あいつ。

私なんて呈の良い玩具でしか無い癖に。

時々リアを手伝って私を捕まえる時以外、奴に会うことはない。

もつとも、嫌いだからそれで良いのだが。

父様が死んで、暫くして。

奴の目を思い出す。

何である時、私は気付かなかったんだろう。

あの時、言葉や態度とは裏腹に、その目だけは歪んでいたのに。

それだけが心を乱す。

なんで、その目だけは違う？

誰かに許しを請う様な視線を、私に向けた？

殺したのは、お前の癖に。

私も忘れれば良いんだ。

奴は仇。

殺したい相手。

いや、いつかは殺す。

だから、そんな一瞬のことなど、忘れてしまえばいい。

竜は、細かいことには基本頓着はしない。

バジィは例外だが、本来人を食べようが何をしようが本能のまま動く。

そうだ。忘れよう。

それが、一番楽になれる。

「うる、さい」

思わず、そう呟いていた。

頭の中で感情が流れ込む。

自分では抑えられない感情。

それは憎悪か、愛情か、恋慕か、知らない。

だが、良くないことだけは直感的に理解出来た。

一息吐いて、私は左翼棟に潜り込んだ。

あ、もちろん木を伝ってね。

真っ正面からだと入れてもらえない（むしろリアカラジスと呼ばれて連れ戻される）だろうし。

もっとも、例え私をよく思わず、刺客を送ってきたところで、そう簡単に私が死ぬ訳がない。

魔力が無くても、竜の姿になれなくても、普通の人間よりも強い。握力、筋力、脚力。

見た目は前世とほとんど代わり映えしないのに、何故其処まで強いのか。

謎である。

あ、元竜だからか。納得。

「りゅ、竜姫様!？」

あ、見つかった。

書類を運んでいるらしき軍人達。

書類で両手がふさがっているのが二人と、茶色がベースだけど金
が混じっている長髪の美女。

背が高い。それにボンキュッボンだ!!

いや、一度は憧れるよね。

騎士かな、この雌……いやいや、女。

女で騎士。格好良い。

さりげなく、美女は薄笑いをしながら、挨拶してくる。

いよっす!

おや、周囲の温度が変わったのは気のせいかな?

「竜姫様、何故、左翼棟に?」

おお。一個ずつ区切って言ったぞ。
圧力？

これが圧力と言うものなのか。
美女だから余計に効果発揮だね。
だが、その程度で私は負けん！

「散策。ほら、部屋にずっといても楽しくないし。邪魔にならない程度に見回って帰ろうかと」

「貴女の為に軍は少なからず護衛として後を付けさせています。部屋の前、廊下、その他諸々陛下が貴女の為に心を砕いた結果です。その者達の努力を無駄にもしない為に、お部屋にお戻り下さい」
「あの男が心を砕く？ そんな訳無いじゃん。たかが玩具程度に」

ニツコリと反論すると、三人は驚いた様に瞠目した。

あ、右側の兵士書類落とした。
立ち直りが速かったのは美女。

「玩具つて、貴女は……」
「呈の良い父親を殺して手に入れた元竜の雌。これ以上面白い玩具があるの？」

息を呑む音が聞こえた。

それに、眉を顰める。

なんだ。知らないのか。

ラジスが父様を殺したことを。

ああ、そう言えば父様はいつかこの国を助けたんだっけ。

そんな父様を殺したラジス。

これが明るみになれば周辺諸国からどんな反応をされるやら。
ちよつと、面白そうだけどね。

「知らないのか、貴女は——」
「ナギ」

名前を呼ばれて振り向く。
そこには、ラジスがいた。
憎い憎い男。

ラジスは美女の言葉を遮り、私の腕を捉えた。
振り放そうと思ったが、如何せんラジスが主が為に抗えない。
くそう。

ラジスは私が反撃出来ないことを良いことに、ネコかイヌの様に
頭を撫でてきた。

玩具ではなくて、ペットか私は！

「リア」

な、に？

ラジスの後ろにはニッコリ笑ったリアの姿。
思わず後ずさる。

笑ってる。その顔がこええ！

「少々、お話を致しましょうか」

「結構です。十分です。気晴らしです！！」

高速で首を横に振るが、その後リアに引きずられて行くのは当然
か。

最近リアさん私よりも立場が上に。

いや、文句なんてありませんよ。

リアには多少なりとも信用出来る様になったし。

私の為を思ってくれているのはよく分かるし。

お母さんだったらこんな感じになって、ごめんなさい！ お姉さんですね！！

ラジスの手が、何故か嫌悪を感じなかったのは、多分気のせいだ
と思う。

暖かい手（後書き）

いつも本当にありがとうございます（m・人・m）

執務室会議

ふふふふつ。

リアに昨日十分過ぎるほど怒られました。
でも、それでめげるほど私は弱くない！

……あ、いや。リアさん睨まないで下さい。
今日は大人しくしてます。はい。

「……嫁？」

書類から顔を上げつつ、ラジスは眉を顰めた。

目の前にいるのは古狸の一人。

もつとも、温厚な方だとは思うが、宰相のロードル。

ラジスの教育係をも務め、良き先生であった。

そんなロードルが珍しくラジスの不快な言葉を漏らした。

「左様でございます。陛下も慣例に習い、妃の一人くらいは娶られ
ませんと」

「金翼に一匹いるだろう」

「人ならざる者を妃にするおつもりですか！ それに一匹とはナギ
殿があまりにも不便――」

「御義父様」

地を這う様な女の声に、ロードルはビクリと身を竦ませる。
振り返れば其処にはロードルの養女、リアがいた。

その顔には妖艶な笑みを浮かべ、養父であるロードルに向けている。

ロードルは背中に冷や汗を感じた。

リアとはかれこれ十数年のつき合いになるが（実際にはそれ以上だが）一度としてロードルはリアに頭が上がらない。

それはロードルの養女と言えども、リアが子供達の面倒やら病弱な妻の看病など熱心にし、気配に聴く、貴族のたしなみもすぐに覚え、自慢の娘には変わりないからかも知れない。

竜と人間。

その垣根を越えて生まれた友情であり親愛の良い例だとロードルは思っていた。

「元竜を妃に出来ないと、どなたが仰せになりました？」

「い、いや。そう言う訳ではないのだよ。リア……」

どうしてお前が此処にいる。

そんな質問は愚問というものだ。

ラジス以外にこの執務室へ呼ぶ者などいない。

ラジスはリアへ大様に頷いた。

「リア。ナギは？」

「お部屋で大人しくされています。さすがに三時間説教後の二時間地獄のマナーレッスンはよく効いたみたいです」

につこりと言うリア。

もはや其処には遠慮の欠片も見あたらない。

もし、リアが他の王女の侍女か女官であれば——優秀であつたに違いない。

ナギに対しての揺るぎない教育の意思がその瞳に込められていた。もっとも、ラジスが未だ野放しにする様に命令している為、それ

も出来ることはないが。

「陛下。私の友人達が騒いでいたのですが、なにやら隣がきな臭くなっているようです」

リアの言葉に、ロードルはハツとしてた。

リアは生粋の元竜。

人間との交流は少なからずあったが、本来竜は他者を拒絶する。そんな彼女が多く友人と認めるのは、少なからず人間ではないだろう。

竜は少ないとはいえ、絶滅している訳ではない。

苦肉の策として、人化する儀式を行うことが最近では増えた様だ。肉親の命と引き換えに、または何か別の対価を支払って人化する儀式。

リアは肉親ではなく、対価を支払って人間になった者だ。

年齢が上がるほど、相手が元々竜であったか否か分かる様になる。リアに寄れば一重に経験の差らしい。

ラジスは臣下としてリアをそう言う伝で使うことがある。

今回はナギにも大いに関わることであった為か、快く引き受けられた。

ロードルは目を伏せ、不快溜息を吐く。

「……私の方にも、先程内偵より報告がありました。ドルダン国の王が代替わりをし、兵力を上げ始めている様です」

「あの国の王はまだ30そこらだった筈だ」

「病気に伏しておられ、政務が出来ない状況であった為——表向きはこのようですが、恐らくは暗殺されたと思われます」

ドルダン。

この国の北に位置する国で、この国よりも春が遅く、冬が速い。

冬に国境を越え、暫くすればこの国よりも深い銀世界が待っている。

避暑地としても有名だが、最近では国境を越える人数が例年よりもおかしかった。

だからこそ、ロードルはラジスに報告して内偵を送ったのだ。

「税が上がり、物価の高騰。幼竜の誘拐が増えており、殺気立つ竜が増えているようです。その被害もまた」

竜は人間の様に多くの種を残すことは出来ない。

強き竜。

世界はバランスを考え、竜の個体数を少なくしているのは感心する。

竜が大量発生してしまえば、それこそ人間など滅んでしまうだろう。

「戦争を、仕掛けてくる気でしょうか」

冷たい沈黙。

緊張感が走った。

それは否定出来ない真実。

ガルフィオナがいればまだ状況は変わっていた。

しかし、此方側には周辺国を畏怖させてきた誇り高き銀竜は既にないない。

ラジスの命令で、その命に終止符を打ったのだから。

「まだ、様子見だな。ロードル引き続き内偵を侵入させる。それと内々的に兵力の底上げを」

「それは私がします。一応陛下から騎士の位も頂いていますしね」

リアは人間の戦い方をよく知っている。
故に人間の訓練強化を目的とするならば良き師になるだろう。

「それではお前ばかりに負担が行く。ナギはどうする」

「それぐらい両立出来ます。私は元々竜です。やりきってみせます」

リアは変わらず、笑みをたたえている。

それは武人とした空気を纏わせる。

ただの侍女ではない。

リアは、今まで普通の侍女としていることを甘んじて受け入れていた。

それは約束。

ナギがリアの元に来るまで、リアは人として生きること。

ナギが側にいる以上、リアはやっと本来の性格で、本来の立場で動き回ることが許される。

騎士として、侍女として、ただ一人の為に。

「ナギ様には平穏と安寧を。私達の願いはそれだけです」

この私達が誰を指すのか。

ラジスとロードルは分かっていたが敢えて口に出すことはしなかった。

リアは一礼する。

「それでは、これで失礼致します」

ラジスが退出許可を出すと、リアは足音一つ立てることなく出ていく。

リアは廊下の途中で窓から空を見上げた。

憎らしいぐらいの蒼。

この空を、もう一度。

そう考えたところで苦笑する。

愛しい人を守る為に。

今はラジスの感情よりも、優先すべき事がある。

そう考え、足を速めた。

そして、ナギを中心として物語は動き出す。

執務室会議（後書き）

短くてすみませんm（――）m

久々に三人称で書きました。

怪しい三人称ですが、そこはご愛嬌ということで……（；、――）
A
次は明るいといいな（希望）！

総帥の一人言（前書き）

キャラが増えてゆく……orz

総帥の一人言

生まれは農村地域で、流れの傭兵が親代わりに育てて貰った。

若い頃は騎士団に入りたかったが、あの時代は今よりも階級意識が強く、騎士団に入れるのは実力ではなく『貴族』というくくりだった。

一時期荒んだ時期もあったが、それは仕方のないことだと諦めていた。

そして、俺は出会った。

銀色の雄々しき竜。

その時、親代わりだった傭兵が病で死に、天涯孤独の身で傭兵として生きていた。

銀竜の名をガルフィオナ。

王都より国境近くの山に住んでいる気高き竜。

俺は命など惜しくもなく、ガルフィオナに戦いを挑んだ。

結果は見事惨敗。

しかし、負けることはプライドが許さなかった為、俺は何度もガルフィオナに戦いを挑んだ。

それも、数え切れないくらいだ。

それから2、3年経ち、ガルフィオナは戦いの後にすみかまで案内してくれた。

そこにはリゼリアティス——ガルフィオナの妻がいた。

それから幾年、俺はガルフィオナの紹介で王都の騎士団に入隊した。

その時まだ格差は激しかったが、根性で上り詰めた。

前陛下も、その時は御健全で、まさに実力主義の方だった。

当然、反発も多かったが、貴族の中でも気のあう奴等が出来た。

妻もその紹介で娶り、子供も出来た。

今ではもう、孫が生まれるらしい。

今度休暇を取って見にでも行くか。

俺の人生の成功した理由は根性と育った環境。

なにより、ガルフィオナのおかげだった。

分かち合うのに、戦友^{とも}になるのに、種族は関係ないと教えてくれた。

「シューバ？」

黒い双眸が俺を映す。

窓から顔を覗かせる娘は、見た目は違えど、ガルフィオナの娘だった。

いくつなのか。

まあ、俺よりは若いに決まっている。

俺は手招きをして、娘を部屋の中へと入れた。

膝を叩けば、恥ずかしがりながらも座る。

見た目は12、3歳くらいか。

俺の執務室は左翼棟にあり、最近よく来る様になった。

まあ、目的の物は分かっている。

「ありがとう！ これ、すっごくおいしい！！」

「そうか。まだあるぞ？」

娘、ナギは俺から貰った菓子を頬張りながら笑う。

今日渡したのは、シュゾッドと呼ばれる穀物に砂糖を混ぜて炒めた家庭的な菓子だった。

妻にナギのことを話したら、作ってくれたのだ。

最近が一番下の引き出しが菓子入れになっているのは、気のせいではない。

初めてあった時、たまたま客が帰った後で、応接机の上にあった菓子を食べて大層気に入った様で、次来た時に菓子を用意してみれ

ば、喜んで頬張った。

どうやら竜でも女子供はやはり菓子に目がない。

それ以来こうして此処に現れては菓子をねだってくる。

何でも部屋を抜け出すからか侍女に菓子抜きにされることが多いらしい。

いや、侍女と言つてもあのリアだからな。

すっかり母性本能に目覚めたらしい。

まあ、でもガルフィオナの娘なら、これぐらいやんちゃなうちで済むだろう。

「明日も来るからとつとくね。っと、明日も来て良い？」

「ああ、おいで」

初孫を得たジジイか、俺は。

もつとも、直に孫が生まれるが。

だが、心地良い。

種族すら違うのに。

漆黒の者だと言うのに。

我が子の様に愛おしい。

それは、この子供から感じる儚さからか、脆さからか。

虚勢を張り、誰をも寄せ付けぬ気位は、一度内に入れた者にはとことん甘い。

そして、強い。

この若さで、持て余すほどの力を身に秘めている。

とても喜ばしいことでもあり、危険なことだ。

「うーん。この国の料理って焼く、炒める、煮込むが基本だよな。

お菓子もそんなのが多いし……いや、プリンに問題がある訳じゃないんだけど、せっかく釜があるのにケーキが無いとか勿体ない」

「けーき、とは何だ？」

俺が問うと、ナギは首を傾げて見上げてくる。
こ、このアングルは可愛すぎるだろう。
妹にもこんなに可愛いと思ったことは無いぞ。

「卵、小麦粉、バニラエッセンスとか加えたうーんと、甘くてフワフワなお菓子？」

甘くてフワフワ??

そんな菓子があるのだろうか。

ナギが言う様に炒めたり冷やしたりする菓子が多い。

そんな時、たまにこうしてナギが不思議なことを言うのだ。

何処でそんな知識を手に入れているのかは分からないが、至極当然の様な自然な言い回し。

グルメな竜と交流でもあったのだろうか。

そんな考えを振り払う。

竜は本能で生きる者だ。

基本食べ物は生だしな。

ガルフィオナに聞いた時は、肉の味（生）について熱く語っていたぐらいだ。

人間になって味覚が変化でもしたか？

「ねえ、シューバ。私に料理場に入る許可を頂戴！」

「調理場？」

「うん。なんかね、作れそうな気がするの」

ちょっと待て。

まともに料理をしたことのない様な奴が作れそうだと？

「釜は使ったこと無いから、其処は手伝って貰うけど。駄目かな」

包丁を持てるのか。

むしろゲテモノ料理にしないのか。

俺の脳内にはナギが魔術師が使いそうなゲテモノ類を料理し、俺に差し出してくる情景が展開されていた。

「シューバあ？」

「あ、ああ。料理長と一緒にするならな。陛下に俺から許可を取っておこう」

俺、死なないといいなあ。

ナギが俺にそれをくれるとは限らない？

まさかそんな。

ナギはあのガルフィオナに育てられたとは思えないほど誠実で顕著だ。

自分の非を認め、相手を思いやることを知る純粋な子供。

むしろ此処まで純粋に育ってきたのが奇跡。

ごほん。

とにかく、俺が中継役として調理場の使用許可を取れば、お礼としてその菓子を俺の所にお裾分けがくるはずだ。

この数日間でナギの性格は良く分かったから、間違いないだろう。だからこそだ。

俺、死にたくない。

「ありがとうシューバ！」

ああ、もう。

笑顔が眩しい。

そんな澄んだ目で見られると、この手で数え切れないほどの命を

奪ってきた俺でも、思わず頬が緩んじまう。

「明後日ぐらいにでも正式な通達が来る様にしておく」

こんな時、自分の顔が鉄仮面で（そこまでは本当はいつてないが）良かったと思う。

妻と文官長のセガルがいれば良い笑いの種になっただろうが。不意に何かの気配がこの部屋に近づいてくる気がした。ナギはハッとして俺を見上げる。

「つて、ことで！　お願いします！！」

窓から飛び出していった。

一応此処は三階なのだが。

飛び移る木もないはずだが、見て見ると、バルコニーから一階下のバルコニーへと飛び降り、気に飛び移っていた。

さながら森の動物のようだ。

それを見ればガルフィオナの娘だと感じやすいがな。

俺の中でガルフィオナは良いやつだ。

だが、同時に意地の悪い奴だ！

今まで俺はどんなことをさせられたか。

一度鎧を付けたまま湖に落とされた時は本気で死ぬかと思ったぞ。リゼリアティスが助けてくれたから良かったもの（その後ガルフィオナはリゼリアティスに怒られていた）、奴は高みの見物で楽しんでいたのだ。

アレは根っから腐った奴だ。

それはいつも敵対しているセガルも納得してくれている。

「失礼します」

男女の声で、俺ははつとする。

許可を出せば、茶色と金糸の混じった長髪の騎士団長補佐ネオと騎士団長ドルカが入ってきた。

二人は俺に一礼し、ざつと気配を確認する様な雰囲気を出した。それに思わず苦笑する。

「あの方なら、先程出ていったぞ。リア殿が探しているのか」

俺がそう伝えたと、ネオは溜息を吐き、ドルカは前髪を掻き上げた。

「確かにそうですが、陛下が良い訓練だとそのまま兵全体に『鬼ごっこ』の司令が出ました」

『鬼ごっこ』だと……？

「俺にそんな伝達は回ってきてないぞ」

「つい先程、決まったことですので。伝える為に此処へ来ました」

女一人に対して王宮の——今、訓練中なのは50人程度か。

他の者は非番であつたり警護中であつたりとしているからな。

「それと、それを聞きつけた非番の者や手の空いている者も……」

鬼ごっこ』参加者は150人に」

「……正常な感想を言おう。前代未聞だ」

王宮は遊び場ではないんだぞ。

ナギを相手にするなら、確かにそれくらいの数は必要かも知れんが、行動範囲を絞れ！

しかもナギは知らない様子だ。

だが、陛下が言ったことだ。
そんなことを言う方ではないのに。
ネオが溜息を吐きながら、報告した。

「リアさ……殿が結界を張る予定になっておりまして。金翼棟から建物に添って訓練場までを竜姫様が入った直後に展開されるそうです」

「……なら、いいか」

「「いいんですか!？」」

おう。ダブルツツコミ。

さすが長年コンビを組んでいるだけあって息びったりだな。
俺は背もたれに体重をかけながら息をつく。

「行動範囲は外だけなんだろう？ あの方はまだ魔力の使い方を知らないから結界から外に出ることもないだろうしな。ちょうど行動範囲に仕事場がある訳でもないし、ああ見えてもあの方は天武の才がある。ああ、時間を計っておけ。ちょうど良い訓練になるだろう」

ナギはすばしっこい。

しかも木の上を平然と渡り歩く。

そう簡単には捕まらないだろう。

俺は啞然とする二人に、肩を竦めてみせた。

ただ一人の為に

月明かり。

手に触れるぬくもりは優しくて。

私を包み込んでくれて。

だから、父様だと思ってた。

死んだ父様が、私が眠っている間だけでも会いに来てくれたんだ
って。

そう思ってた。

そう、思いたかった。

「風……」

なのに何故、その名で私を呼ぶの？

父様は、私を姫と呼ぶ。

父様は、私の前世を知ることにはなかった。

その呼び方は……発音は、この世界でする者はいないはずなのに。

「風。守るから。今度こそ、傍で……」

なんで、そんな優しく風^{わたし}に語りかけるの？

その日。

私は金翼棟の森に入っていた。

この森はけっこう広い。

まだ端まで行ったことはないけど、多分半日以上かかるかも。
もしかしたら私が同じ所をぐるぐる回っているだけかも知れない
けど。

暫く歩いていると、見つけたのは一つの古びたガゼボ。
蔓が巻かれ、庭園か何かの後だったのか、ちらほら建造物のあと
が見えた。

新しい隠れ家発見か！？

飛び付いたのは当然だろう。

此処なら誰も来ないで昼寝が出来そうだと感じたからだ。

「……あ」

声が、漏れた。

この世界では見ない真つ黒な髪。

私の瞳と髪と同じ色。

夜を表す漆黒の髪。

彼が、ラジスが……其処に寝ていた。

筋の通った鼻。

引き締まった決して守られてばかりで育った訳ではないことを証
明する体付き。

身長はやっぱり高いからか、ガゼボの長いすから足がはみ出して
いる。

思わず見惚れてしまい、私は首を振った。

その首に手をかける。

暖かい体温。

この首を、このまま絞めればこの男は死ぬだろうか。

いや、この男は人間だ。

アンデッドでもないのに、死なないなど有り得ない。

このまま殺すか？

「風……」

——風……。

あの声が、聞こえた気がした。
思わず手を引っ込める。

違う。

この男が、あの声の筈がないのに。
あんなに優しく、父様みたいな暖かい手で。
父様を殺した男が、私にそんなぬくもりを与える訳がない！

「殺さないのか」

ラジスの声で私は我に返り、身を強ばらせた。
ラジスは上半身を起こし、私を見ている。

こうしていると、ラジスと私の視線は対等なような気がした。

「こ、殺すって」

「お前はガルフィオナを殺す命令を出した俺を殺すと言った。今、
手に力を込めれば殺せたんじゃないのか」

「誓約があるのに出来る訳無いでしょ」

「本当に？」

後ずさるうとした私の手を、ラジスは掴んで引き寄せた。

振り払おうと思えば振り払えるかも知れない。

そうしないのは何故か。

私は拳に力を込めた。

「……お前は父様を殺した。なら、聞くけど、何で父様を殺す必要
があった」

「ドル力が応えた理由と一緒にだ」

「それならどうして私を生かした！ お前は、父様の力を恐れたなら、私だって同じ血が流れている。殺せばいい。そうすれば、お前にとって脅威になる者はいないはずなのに！！」

手を掴む力が増した。

分らない。

何故、ラジスは私を殺さないのか。

何故、脅威と考えた父様を殺し、私を殺さないのか。

何故、父様を脅威と言うのなら、竜と盟約を結ぶドルカを――バジイを野放しにするのか。

何故、父様は殺されなければならなかったのか。

分らない。

分らないことだらけだ。

「私を、私をころ――」

「呟！」

抱き寄せられ、その腕の中に閉じこめられる。

強い腕の中。

足掻いてみても、その腕は意地でもほどかないとでも言いたげだった。

「言うな。死にたいと思うな。憎むなら俺を憎め。俺を殺せ」

私は足掻くのを止めた。

その腕は強固であるにも関わらず、その肩は震えていた。

何に怯えているのか。

何に震えているのか。

たかが化け物一匹の為に。

「おかしいよつ。意味わかんない！」

私はラジス突き飛ばす。

そのまま背を向けて走り去った。

父様を殺した癖に。

父様の死を望んだ癖に。

なんで、私の生を望むのか。

私が死ぬくらいなら、己を殺せと言うのか。

同情？

そんなの、父様を殺したあの男がする訳がない。

なら、何だつて言うのか。

私はぐちゃぐちゃな胸の中で、叫びだしたい気持ちを無理矢理抑え込んだ。

「何やってんだろ。俺……」

俺は溜息を吐きながら、長いすの背もたれに雪崩れかかる。

風が俺の側に来て、どれくらいになるだろう。

その間に、どれくらい逢えただろう。

幾ら溜息を吐いても、問題が改善される訳がない。

憎まれても仕方ないと思った。

風に殺されても構わないと思った。

だが、この手に風を抱き締めてしまえば、ただ、傍にいて欲しくて。

この手を、離したくなくて。

矛盾しているのは分かっている。

でも、待ち望んだ存在。
ガルフィオナが残した存在。

「もう、失いたくないのに、な……」

呟きが零れる。

凧をナギと呼んだのは、ほとんどつさだった。
慣れ親しんだその名以外に、呼べるものなどないと思った。
凧は俺が分からなくても、俺が凧を分かっていたら良い。

思い出すのは青い空。

無機質な病室。

そして、儚い笑顔とぬくもり。

全ての感情は、凧が俺に与えてくれたもの。

だから、あの時の二の舞にならぬ様に。

凧が生きていける様に。

憎まれても、殺されても、もう、二度と凧に触れなくても。

凧が生きてくれれば、それで良い。

「小僧」

いつの間にか俺の背後に立っていた男は、眉を顰めて俺を見下ろしていた。

俺は苦笑しながら、男を見る。

見た目は30代後半か。

筋肉質で巨大な体躯。

体に刻まれた無数の傷痕。

髪はなく、見事なスキンヘッド。

男が人間ではないことを示すように、その瞳は金だった。

「本格的に奴等は戦争を始める準備に入った」
「……分かった」

重々しい溜め息を吐き出し、俺は立ち上がる。
隣国は思ったよりも動くのが速い。

密偵のうち、帰って来たのはこの男だけ。
密偵の中では最も信用出来る男だ。

己の為、国の為、なにより愛しい家族の為に。
竜であることを棄てたのだから。

「それと……」
「？」

溜め息が聞こえ、男を見ると、背を思いつ切り叩かれた。

「……っ。何するんだ!？」

怒りに声を荒げたが、男を見て息を飲む。

そこには竜としてではなく、密偵としてでもない。

『男』自身として、男は俺の頭を荒く撫でた。

「若い癖に諦めんなよ。好きな女を自分のものにしたけりゃあ、力づくでもするもんだ」

鼻息荒く、そう力説する。

俺はそれに力なく笑って見せた。

「お前はそうやって手に入れだんだつたな。……だが、俺には許さ
れない」

「『ガルフイオナ』を殺したからか？」

「……そうだ。風は俺を許すことはないだろう」

そう言った俺に痛ましげな視線を男は送ってきた。

「それは『ガルフイオナ』の我が儘を、お前が叶えただけだ。お前は何も悪くはない。全ては『姫』に何も告げなかった『ガルフイオナ』が悪い」

「風を護る為に、俺自身憎まれ役を買って出たんだ。何も知らずに、幸せになつて欲しいというのも、俺自身が決めたことだ」

息を吐き出し、肩を竦めた。

今、こんなことを考えている暇などない。

護る為には、やらなければならぬことなど山程あるのだから。

「——全てが終わつて風を護り切れてこそ、俺はようやく土俵に入ることが出来るんだ」

そこに迷いはない。

ただ、幸せになつて欲しい。

俺や男、リア達がそう思つて真実を告げずにいる。

ただ、笑つていて欲しいから。

その為に、全力を尽くそう。

「まあ、『姫』がお前の求愛を受けたなら、一発殴らせるよ」

男と二人、笑い合う。

全てが終われば、男も風の前に出られるだろうか。

「ほどほどにしてくれよ。——『ガルフイオナ』」

数分後、男はまた、密偵として隣国へと戻っていった。

ただ一人の為に（後書き）

全ての布石はほぼ完了しました。

ハッピーエンドを目指して頑張ります！

そして、ご愛読ありがとうございます。・（つ・）・

薄れた記憶

無機質な部屋。

窓から見えるのは生まれ育った故郷ではなく、高いビルが建ち並ぶ東京。

其処に横たわる私は、窓から空を見上げていた。
狭い空間。

事故に遭ってから、この部屋から出ることは出来なくなった。
そして、もうすぐ死期が迫っていることも分かっていた。
事故の後に判明した心臓病。

隔世遺伝による病気なのかは分からないが、元々私の心臓は長くないことを家族は知っていた。

事故により、足が使えなくなつて、心臓病で毎日が苦しくて。
あの事故で、死んだも同然だった。
速く死にたい。

そう思ったのはいつからか。

私はうつろな目を、空に向けていた。

母さんも父さんも、姉妹達も毎日見舞いにやってきていた。
けれども、三年目になる今日。

時々しか、家族は来れなくなっていた。

それで良いと言ったのは私。

家族に負担をかけるくらいなら。

私など、いなくなつてしまえばいいのに。

自殺したら、どれだけ残された家族達に深い傷を刻んでしまうだろうか。

そう考えると、死ねなかった。

「いや――」

違う。

ただ、死ぬ覚悟が無いだけ。

これだけ死にたいと思っても、願っても

速く心臓を止めたくても。

死ぬことを恐れている私がいる。

なんて浅ましくて、愚かなことか。

おこがましい。

私は自嘲じみた笑みを浮かべた。

この病室に来る者など、もう、ほとんどいない。

生きているのに、死んでいるようだ。

あと、半年もつかどうか――

医師の言葉を聞いて、肩の荷が下りた。

これで家族が未来に進んでくれるのならば。

早く半年が過ぎないだろうか。

そう、考えるようになった。

そんなある日。

外出許可が下りた。

本格的に余命が迫ってきているのだろう。

私は、最後は家族と共にいたいとワガママを言って帰った。

通された私の部屋は二階ではなく、一階だった。

父さんに抱かれてベッドへと移る。

緑の庭が見える、でも、病室とあまり大差ない白が基調とされた
部屋。

無機質な、溶けて消えてしまいそうな感覚がした。

毎日甲斐甲斐しく母さんは私の世話をした。

食べたりとかは出来るし、文句も言わなかった。

私の介護で母さんの負担になりたくなくて、自分で出来ることは

全てした。

それでも、死にたいと言う欲求は、心の何処かにあった。

数日が経ち、木に一匹の鳥がいるのを見つけた。

黒くて、目が蒼い色の不思議な鳥。

カラスでは無いのに、その黒い羽は光に当てると藍色に見えた。
不思議な鳥。

私は誰も居ない昼下がりに、その鳥に話しかけていた。

「お前は良いね――」

あの鳥は、どんな種類だったのだろうか。

夢から覚め、上半身を起こした私は考える。

転生前の記憶。

思えば、私の知っている鳥の中に、そんな種類の鳥はいなかった。

いや、ただ、私が知らないだけかも知れないが。

そして、私はあの鳥になんと言っただろうか。

あの鳥の、何が羨ましかったんだろうか。

それはどうしても思い出せなかった。

いや、既に前世の記憶など、今世では不要なものだ。

ただ、ふとした拍子に思い出ただけだろう。

もう、母さんや父さんの顔さえ思い出せない。

悲しいことだが、本当なら覚えていることすらおかしいのだ。

前世の記憶があることは誰にも秘密だった。

微かな記憶を頼りにケーキを作って上手に焼けたっけ。

思えば、お菓子作りが得意でパティシエを目指していたのだから、
覚えていてもおかしくはないな。

なのに、何であんなに鳥のことが印象的だったんだろう。

むしろ、あの鳥は毎日庭に来ていたのだろうか。

「……まあ、どうでも良いことか」

「ナギ様？ 何がどうでも良いことなんですか」

近くに控えていたリアが聞いてきた。

私はリアを見て、首を横に振る。

「なんにもないよ。ただ、昨日の夕食のメニューを思い出していただけ」

「思い出せなかったのですか」

「うーん……？」

そう言えば、思い出せないかも。

お肉だったけ？

何かスープっぽいものを食べた気もするけど。

「昨日は国内産高級のローストビーフ。それからクリノッサのスープにリケバスのサラダです」

うーん、そんな感じだった気がする。

やばい。

とうとう呆けが入ってきたか？

のんびりとそんなことを考えていると、目の前でリアが私の頬を手で包んだ。

「顔色がよろしくありませんね。悪い夢でも見ましたか？」

優しいその笑顔。

本当のお母さんみたいで。

私は思わず手を伸ばしてリアに抱きついた。

一瞬リアが強張ったのは気のせいかな。
違う。

そりゃあ、そうだよな。

私は今は人間の姿をした化け物で。

リアは、真正正銘の人間で。

こんな化け物に母親の影を求められても困るよね。

私は離れようと力を緩めた。

「……リア？」

離れようと思ったのだが、今度はリアが私を抱きしめていた。
ともすれば、強い力で。

まるでぐれてしまった子供のように。

「……申し訳ありません。もう少し、このままで」

絞り出すような声だった。

何かに縋っているような、そんな声。

何かあったのだろうか。

だけど今は、拒絶されなかったことがほんの少し——いや、大分
うれしかった。

しばらくして、リアは私から身を離れた。

そこには、いつものリアがいて。

「ご迷惑をおかけしました。お茶の準備を致しますので」

そう言って、部屋を出て行った。

些か侍女として礼を欠く行為ではあるものの、先ほどの様子を見れば、何も言うことができない。

時刻を見れば午後三時。

確かに、おやつの時間だね。

リアが戻ってくるまで、部屋にいた方が良さそうだ。

「失礼致します」

って、はや！？

…… ああ、違う人か。

ハニーブラウンの髪の手使がワゴンを押して入ってくる。

「あれ、リアは？」

「用事が出来たそうで、此方をお持ちするように。」と

そこで私は首をかしげた。

リアが他人に私が口にするものを渡すだろうか。

いや、たまたま用事が出来たのかもしれない。

私は礼を言っ、手使が用意してくれた紅茶に手を伸ばす。

それが、過ちだった。

割れるカップ。

床に広がる染み。

揺れる視界。

けたたましい本能の警告音。

口に残る刺すような痛みと甘い味。

そして、手使のあざ笑う顔。

扉が開かれ、多くの兵士が入ってくる。

顔を蒼白に染めたリア。

手使を視殺さんばかりに睨み付ける兵士たち。

駆け寄ってくる人影。

思わず笑いたくなる。

己の愚鈍さに。

愚かな人間たちに。

このくらいじゃ、死なないのに。

なんで、そんなに必死になるの？

誓約がある限り死ねないようにしたのは、お前たちの王なのに。
よくお菓子をくれた女官たちが駆け寄ってくる。

医師を呼ぶ声。

ああ、でもその声は遠い。

なんだか眠たくなってきた。

私の体を、誰かが抱き上げた。

ちよっと苦しいかな。

でも、医者とか大げさすぎるよ。

暖かくて安定感のある腕の中で、私は意識を放り投げた。

今度は、いい夢を見られたらいいなあ――。

薄れた記憶（後書き）

おかげさまでお気に入り数600を超えました（＊、、）
いつも本当にありがとうございます！！

夢の果てに

ああ、また、あの鳥がいる。

私は窓の外を見ながら、そう思った。

木に留まっていた鳥は、窓の棧のところに留まっている。

どうやら、初めて会ったあの日から、いくつか日数経っているようだ。

さすがに、私一人の時にしかこないみたいだけど。

「おはよう」

朝起きて、その鳥に挨拶するのが日課になった。

しゃべりはしない。

でも、私を冷やかすわけでもない。

ただ、そこにいるだけ。

家族は不気味だといっていた。

でも、私にとって鳥は、唯一の慰めだった。

「お母さんがケーキバイキングがあるから買ってきてくれるって。

あーあ。食べるんじゃないって、ケーキ作りたいのに」

家族にいいないことも、抱え込んでいる不安も、喋れない鳥に全部ぶちまけていた。

「近所のゆーじろー兄ちゃん、結婚するんだって。お嫁さんかわいくて背のちっちゃい人だったよって、ここに来てたんだから、見たよね。可愛かったでしょ？ 早く赤ちゃん産まれないかな」

私の生きている間は無理だろうけど。

そう心の中でつぶやいて。

笑顔で話しかけていた。

時々不安で泣いたりしていたけど、それでも鳥は木の枝か、窓の
棧にいた。

それがどれほど心の支えだっただろう。

「黒って夜の色でしょ？ ほかの色を混ぜても、白以外だと黒にな
っちゃうの。普通は気味悪いって思われがちだけど、黒猫が縁起の
いいものとして扱っている地域もあるから、白も黒も、縁起のいい
色になるんだろうね」

相手が喋らないというのは、本当に気が楽だった。

哀れみも、同情の言葉も言わない。

時にはののしられることもない。

でも、私の命は、すぐそこまで寿命がきていた。

「お…… かぁ、さん……」

胸が苦しくなつて人を呼ぼうとするけど、声が出ない。

頭がうまく働かなくて。

心臓がだんだん弱まっていく。

肌が冷えてゆく感覚に恐怖する。

誰もいない。

たった独りで死ぬのか。

いやだ。死にたくない。

もっと生きたい。

もつと、もつと、もつと、もつと……。

——風！

聞こえたのは誰の声か。

私の幻聴に違いない。

開け放たれる扉から、母さんが慌てて入ってくる。

私の名を何度も呼んで。

声がかすれる。

あの鳥はもう、そばにはいなかった。

空を飛んで、仲間の元に行ったのだろうか。

私の死を見届ける前に、行ってしまったのだろうか。

今は冬だから、もしかしたら南国に旅立ったのかもしれない。

そんなありもしないことを考えて。

ああ。

生まれ変われるのなら、空を——。

目覚めたのは夜。

真っ暗で人の動く気配があまり感じられない。

おそらくは深夜だろう。

噴き出た汗を鬱陶しく感じながら、毒を盛られたことを思い出す。

どうせ誓約で死ねないのに。

誰かの手が、そっと私の頬をなでる。

もしかして、これはいつもの夢なのだろうか。

友人に聞いたことがある。

夢を見ていてそれから醒めた夢を見たことがあると。

これは夢の続きなのだろうか。

「え……？」

まぶたを開く。

そこには、漆黒の髪の方がいた。

男の瞳は、私同様に驚きに揺れる。

一瞬見えた怯えは一体何に対してなのか。
それを推し量ることは出来ない。

「風……」

呟いた後、ラジスは私の頬から手を離す。

この男の最近の行動は不可解だ。

私の名を、なぜちゃんと発音するのか。

何故、その名を私に付けたのか。

一つの仮定が首を擡げる。

「お前は、私の前世を知っているの……？」

口からするりと出た言葉に、ラジスは目を見開いた。

体を硬直させ、私を見下ろす姿はあまりにも滑稽で。

だが、笑う気など起きなかった。

傷付いたような、安心したような。

何とも言えない表情を浮かべながら、その瞳に私を映す。

「覚えて、いるのか」

「まあね。死んだ私が竜に転生したってことは分かる。でも、世界も違うのに、前世の『風』^{わたし}を覚えている人がいるはずがないから、今まで聞かなかっただけ」

偶然だと思っていた。

此処に漢字なんてものは存在しないのだから、私の名前の意味を知るものもないはず。

なのに、この男は私の名を正しく発音して私を呼ぶ。

それは、前世で私とこの男が会っているからではないのか。

「そう、か……」

溜めていた息が吐き出される。

なんか、ラジスと長く話をするのって、久し振りかも。

「言いたいことがあるならハッキリ言っ。お前はずっと私に何かを隠してる。それは……よくない。けど、それよりも前に、言いかけて止めるのはもつと嫌。この際、はっきりして貰おうじゃない」

って、威張ってみる。

そう。

いつもラジスは私に秘密をもつ。

それは一国王として、父様を殺したからか当たり前なのかも知れない。

だが、明らか私に何かを告げようとして止める。

それが無性に腹立たしい。

先程もそう。

私の質問に答えるのではなく、質問で返した。

それは肯定を意味するものだが、普通は口で告げるものだ。

「以前、私は人間は嫌いって言ったけど、全ての人間が嫌いな訳じゃ無い。化け物の私を受け入れ、温もりをくれる人だっている。でも、うじうじ悩んで後悔する馬鹿はもつと嫌い。皆の為になるのに一度やって、力ずくでも成功させる度胸がない馬鹿も嫌い！」

ラジスは本当のことを口には出して言わない。
でも、此処にいてよく分かる。

ラジスは国民の為に元老院なるものをぶちこわしたこと。
階級主義のこの国を実力主義に変えたこと。

反対勢力を握りつぶせるほど、多くの人に慕われ、信頼されていること。

大変ムカツクが、それは認めるしか無い事実だ。
もう、何も分らないのは嫌。
また、諦めるのも。

前世みたいに、当たり前が全て消えてしまったあの時のように。
生きることさえ諦めてしまった父様が死んだ時のように。

ラジスがこの国を変えたくらいの男なら、私も怯えているだけの
子供のままでいるつもりは無い。

「そついうところは、そつくりだな」
「え？」

私は首を傾げたが、ラジスをはつきりと誰とよく似ているのか言
おうとはしなかった。

首を振り、初めて優しく微笑まれる。

「待っている。今すぐは無理だが、いつか必ず全てを話す」
「……随分急に態度が軟化したわね」
「腹を割ってみないと、分からないこともあるだろ？」

ラジスはクスリと笑った。

初めて会ったとき、それからたまに会うとき。

いつも笑ったとしても、今みたいに柔らかな雰囲気では無い。

この男に一体何が起こったのか不思議になった。

「いきなりどうしたの。気持ち悪い」

「ははっ。そうか、気持ち悪いか」

ラジスは声を上げて笑う。

それが冗談では無く、本気で不気味であり、気持ち悪く感じた。

私は思わず引いてしまうのも、仕方ないと思う。

だが、嫌な笑いじゃない。

言うなれば、そう。

吹っ切れた、だ。

この男にどんな変化があったのかは分からない。

清々とした顔に、私は目を細めた。

「……まあ、期待せず待つとく」

「風も随分態度が軟化したようだが」

「気のせいよ、気のせい！　いつかぎゃふんと言わせてやるからっ」

「ぎゃふん？」

「……っ。今言わなくて良いから！」

私は知らない。

部屋の扉の隙間から、リアや侍女達が生暖かい視線を送っていたことを。

知ったのは、私が全ての真実を知った後。

絶叫を上げたのは、また、別の話。

夢の果てに（後書き）

風が軟化した理由は次回。

お気に入りが増えることに元氣頂いてます。

ありがとうございます（ノ　Ｔ）

成長する雛鳥

「お姉ちゃんは、どこから来たの？」

小さな子供が私にそう聞いた。

「遠い遠いところよ」

ちよつと困った顔をして教えてやると、子供は首を傾げる。

「遠い遠いところ？」

それに私は頷いた。

「そうよ。とてもとても遠いところ……」

そう言つて、天井を見上げる。

「きれいね」

硝子職人が作り上げたらしい色とりどりの天井のステンドグラスは、光が反射して神聖な空気を醸し出す。

「うん、きれい！」

子供は私に賛同してくれる。

此处は孤児院。

その元教会を建て替えたその場所で、凧は息を吐いた。

今日も頑張つて逃げてきた。

初めて下りる城下。

ちゃんと置き手紙は置いてきた。

夕方までに帰れば良いだろう。

城には結界が張つてあつて、空から、屏をよじ登つてとかで逃げ出すことは出来ない。

だから早朝。

献上品を渡して帰る馬車に忍び込んだ。

おかげでいつもより3時間くらい起きるのが早かったよ……。

検査とか？

まあ、隠れるとこんなでざらにあるし。

で、その後城下まで乗せていつて貰つて、途中で飛び降りたつて訳。

降り立ったのは裏路地近くの道。

寝起きだから髪の毛はぼさぼさで。

黒髪というのはこの世界では目立ちすぎる為、馬車のぼろ布を拝借した。

城で手入れされていた肌はぼろ布に全て隠されていて。

黒は目立つかなつと、フードみたいに被ってみる。

どう見ても薄汚い乞食にしか見えないだろう。

「面白い」

服一つでこうも変わるのかと、窓に映る自分の姿に感心した。

これなら仮装とか楽しそうだな。

よし、ハロウィンでもやるか。

そんな文化はこの国にはないかも知れないけど、楽しそうだし。

「貴方、どうしたの。そんな格好で」

声のかかった方をみれば、そこにはプラチナブロンドの髪をした娘が立っていた。

その手にはかごを持っていて、私に駆け寄ってくる。

「この町に新しくきた戦争孤児？ それとも親に捨てられた？ 家はある？」

「え、あの…… ちょっと」

そう詰め寄られて思わず私は後ずさる。
それを逃がすまいと娘は私の手を取った。

「家があってもその格好じゃ、碌に養ってもらってないわね。来なさい。この先に私の住んでいる孤児院があるから」

断ろうとしても断り切れず。
引きずられるようにして私は連れて行かれたのだった。

連れて行かれたのはキリスト教会みたいな建物のところ。
教会と孤児院が併設でもされているのだろうか。

「ここは教会だったのを孤児院にしてもらったのよ」

どうやら、教会としての機能はすでに果たしていないらしい。
そんなに綺麗じゃないけど、掃除は行き届いているようで、蜘蛛の巣が這っている様子もない。

教会のうしろには新しく作られたであろう住居がある。
孤児院とは貧しいイメージがつくのだが、この世界はそうでも無

いのだろうか。

いや、戦争孤児と言っていたくらいだし、街の人の様子から見て水準はそんなに高くないみたいだ。

私の視線に気付いたのか、娘は柔らかに微笑んだ。

「この孤児院は国が管理していてね。今の王様になってから寄付金もちゃんともらえるようになったし、戦争孤児を受け入れる要請を出したら、視察が来て、これでは狭いからってこうして立派な建物を建ててくれて。本当に感謝してるわ」

中に入りながら、私は説明を聞いた。

それによると、この孤児院で引き取られた子供にはきちんと教育が施されること。

この施設にいられるのは18才まで。

それまでに必要な教育を国が補助してくれるし、仕事の斡旋もしてもらえる。

中には人間不信になっている子供も多く、そう言う子供に無理矢理孤児院に入らせる義務は発生しない。

あくまで任意、という形らしい。

そう言った団体生活が出来ない子供は孤児院に登録さえしておけば国の補助が得られる為、済むところは別にしているものもいるらしい。

また、この施設に寝に帰ってくるだけの子供もいるらしい。

10才までは様々な制限があっても、それを過ぎれば特に制限はない。

孤児院、という言葉に多少の抵抗感はぬぐえないまでも、最近王都のみならず国全体にその考えが浸透してきたこと。

細かい法律や補助の制限、または思考改革など。

この国はわずか数年足らずで大分変わったらしい。

「だから、私達は王様に感謝してる。王様のおかげで、私達は『人』として認められたから」

家を持たない子供。

親がいない子供。

体が不自由な子供。

弊害は沢山あれど、少しずつ『人』として認められている。

それは大きな意識改革の一步と言えよう。

「……良いところあるんだ」

「え？」

「なんでも無い」

私は笑顔で首を振る。

王様って偉そうで（実際そうだけど）、書類にハンコ押したり、国の象徴として崇められたり、何でも意のままに思ってる。そうだったり、民の事を顧みないで政治を続けたり戦争をしたり。

そんな職業だと思ってた。

実際は違う。

庭で走り回る子供達。

木の陰で本を読む子供。

誰かが歌っている子守歌。

ラジスが王になってから、城で聞く反対勢力の下火が点く前に消した話、そもそも意識改革自体元老院から猛反発を受けていた為、重税を課していた元老院を潰して減税し、生活水準を上げた話。たかがそこら辺の若造が出来るようなことではない。

父様も、何か理由があった。

ただ、恐れただけではなくて、そうせざるおえない何かがあった。そうではなければ、これだけの笑顔を作り出した賢王が、そんな

愚かな真似をするはずもない。

今更だ。

今更、其の事実を受け入れることが出来るようになった。

あまりに私が子供だったから。

だから、受け入れられなかっただけ。

前世と合せれば精神年齢は40歳は越えてる筈なのに。

何も受け入れようとしなかったことに、笑えてくる。

だから強く、拳を握りしめた。

「フイーゼ、また何か連れてきたな？」

女の声で私達は振り向く。

其処には、女騎士がいた。

この人は知ってる。

左翼棟で会った、ボンキュッボンの人！

って、この覚え方失礼だし。

「ネオ、これには理由が……」

「そう何でもかんでも拾ってくるないつも言ってるでしょう。どうせフイーゼが四の五の言わせず連れてきたって分かってるから」

へえ、ネオって言うのか。

私は前回自己紹介さえしていなかったことを思い出す。

まあ、今日はここで帰っても良いかな。

そう思っただけを取った。

「竜姫様！？」

ネオは慌てて騎士としての礼をとる。
そんな肩苦しく無くても良いのにね。

「今日は確か非番じゃなかったよね。搜索令でも出された？」
「はい。直ちに城へお戻り下さい」

それもチョット面倒。

だけど、従うことにする。

素直に従った私に、ちよつと不審気な視線を送ってきたけど、気にしないでおこう。

今日は成長した気分なんだ。

帰ってから凄く怒られた。

リアさん恐すぎ。

外出には気を付けようとつくづく思う。

そしてこの日、私の中で気持ちが少しずつ変化していった。

真実を知る権利が、私にはある。

それをいつか、知る為に。

此処に在ろう。

成長する雛鳥（後書き）

ご愛読、ありがとうございます。
次回から物語は新展開を迎えます。
楽しみに！！

異世界人の手紙（前書き）

11/12 訂正しました

異世界人の手紙

——タスケテ

そう叫ぶのは誰か。

私は暗闇の中、耳を傾ける。

——ダレカ……

弱々しい声。

恐らく人ではない。

時々聞こえる咆吼は、竜のもの。

誰かに捕まっているのか。

それともとてつもなく弱っているのか。

助けてやりたいが、声の方向が定まらない。

そう遠くではない国からであるのは確か。

手を伸ばしたが、その声は私に気付いていないようだ。

【どうしたの？】

問い掛けるのは人の言葉ではない。

しかし、私の声も聞こえないようだ。

一方的に送られてくる思念に、私は眉を寄せた。

——タスケテ

ゾクリとした寒気に襲われる。

それはその者が感じる恐怖なのか。
私には何も出来ない。

ただ、その者の救いを求める声が夢の中で木霊した。

古書と呼ばれるものがある。

偶然、それを私は見つけた。

とは言っても、単に図書室で本を読もうとしたらそれが挟まって
いたというだけ。

本とも呼べない数枚の紙切れ。

古びたそれは虫食いがあり、いつ書かれたものなのかさえ、さだ
かではない。

司書が丁度そばに近寄ってきて、処分すると言ってきたが断った。
司書が顔をしかめてみせる。

「それは古書とも呼べない、誰かの落書きか何かだと思いますよ」

「あ、じゃあ貰っても良い？」

司書はそのままの顔で何とか了承した。

今思えば、なんでこんな紙切れが気になったのか分からない。

私は部屋に戻って借りた本を一端机に置くと、紙束を手にとって
読んでみる。

かすれた文字。

所々読みづらく、けどはやる気持ちを抑えて私はその文字を目
で追った。

「に、ほん……う」

何でそれが目に留まったのか。

何の気無しのつもりだった。

おそらくは本能が気づいたのだろうか。

前世『風』であったとき、当たり前のように見て、書いていた。
慣れ親しんだその文字の羅列に私は息を飲んだ。

【この文字を読めるものが、私が死んだ後現れることを願う。これはただ、私がこの世界に『召喚』されたことの真実を、正確に記したい】

虫食いではあったものの、何とか読めた。

紙を持つ手に力が入る。

空想か。妄想か。

違う。

これを書いた女は、『日本人』だ。

何で分かるのか。

それは文の中に答えがある。

明らかに私たち『日本人』しか分からないこと。

いや、日本の勉強をしている人なら、誰でも知っていることだった。

確信しながら、私は読み進める。

虫食いだらけだが、始めの訳はこんなものだ。

【私は日本の奈良で生まれた。小学校、中学校、高校全ては地元だ。高校の受験シーズン。私は地元の大学に行く気でいたが、こちら側に召喚された。理由はこうだ。『国を助けてほしい』。正直、どこ

の漫画だったり、小説の話だよって思った。確かにオタクだった。それは認める。だからってコレは無いんじゃないかとおもう。だって私はオタク卒業と決めてから（略）……ってことを頑張ったし】
「いや、（略）って何さ。（略）って。なんでもそれで許されると思うなよ」

ひとり突っ込む。

ってか、真剣な筈なのにそこでぼけるな。

むしろこの紹介文の内容いらねえし。

睨み付けながら読み進めていると、擦れて見えなくなり書けている文字があった。

その文字を見つけて指先が震える。

「召喚材料は……りゅ、う」

そこからの一部の文字は紙の中でも一番こすれ、見え辛い。

だが、この手紙の主が召喚自体に嫌悪を持っているのは明らか。とぎれとぎれの言葉の意味を理解する。

【私を……したのは……だから。竜を贄……したのは、そうしなければ……なんてまともに……だから。だが、それまでも犠牲に……ったのは、恐らく】

私は紙切れを机に叩き付けた。

人間の愚かしさ。

2つの人生を歩む私には、許すことが出来ない禁忌。多くの犠牲。

それは竜だけか。

同じ人間ももしかしたら……。

歯を噛み締めた。

【私は奴らの言うことを聞くつもりはなかった。真実を知って、ガルフィオナという盟友に力を貸し、奴らと闘うことを選ぶ。あれは同じ人とは思わない。どうか、同じ世界から来た憐れな犠牲者が再び現れたなら、この手紙を見てくれることを祈る。この国の人にさえ気を許さないように。世界を渡ってしまった時点で、私達が孤独だと言うことを忘れぬように】

最期はそう綴つてある。

ここにも出てくる父様の名前。

この「異世界人」は、父様と会っていたのだろつ。

「なんて、なんて……」

人間の浅ましいことが。

長き時を生きる竜にも狡猾なものはいる。

だが、私達は生きる為に縄張り争いもするのであって、ただの『遊び』の為に命を奪う事はない。

それは私が断言出来る。

尊いことを知っているから。

何にも命は代わりがないことを知るから。

孤独というものを知っているから。

人間には、何故、それが理解出来ないのか。

余りにも短命な人間。

その人間と同じ月日しか生きられなくなった私。

だが、竜であつた時、その心得を叩き込まれていたから、私には余りにも愚かに見える。

【この国の人にさえ気を許さぬように】

それは、この国もその召喚をしようとしていたのだろうか。
母様が人間に捕まったことがあるとバジィから聞いた。

それはもしかしたら、召喚の為の贄にされるところだったのかも
知れない。

憶測。

恐怖。

怒り。

本当に、人間を信じられるのか。

これを読めるのは私だけだ。

日本語で書かれた文章はこの世界の人間が読める訳がない。

これは『私』に当てられた手紙と捉えて良いのかも知れない。
手紙の内容を丸飲み出来る。

それくらいの信用性は本当に在ると思う。

何故か。

私は読み終わった中の一冊を開く。

それはこの国の戦時中の記録。

途中のページに書かれた父様と王様、そしてミオ・サクライなる
『異世界人』。

紙の最期にサインみたいに書かれた『桜井 零』。

偶然でこうも繋がる事が出来るのだろうか。

私は肩の力を抜いて息をつく。

たかが紙切れ一枚に感情移入しすぎなのかも知れない。

だが、この人の言葉は自然と胸に染みた。

【この世界に渡ってしまった時点で、私達が孤独だと言うことを忘
れぬように】

それは、真に私達を理解してくれる人間がこの世界には存在する

訳がないと言っている。

知識も、文化も、言葉さえ何もかもが違う。

家族から突然突き放された絶望、恐怖。

それがこの女にとってどれほどのものだったか。

事故で死んで転生した私とは違う。

異世界人の召喚。

異世界人であつた前世の記憶をもつ私が、二度とそれが成されないように食い止めるのが、前世の記憶をもって生まれてしまった私の使命なんじゃないのかな。

そう考えて、苦笑する。

そんなことが出来る訳がない。

私は今、ただの人間で。

何の権限も持たないただの小娘。

その私に、何が出来る。

ただ、そうならないように思いを馳せるしか出来ない癖に。

「失礼します」

ノックの後リアの声がして、私は慌てて紙を隠して入室を許可する。

ワゴンを持ってきたリアは優しい笑みを私に向ける。

リアは人間。

信用出来る人間。

一番始めに信用した人間。

それは、本当に？

本当に、信用しているの？

「ナギ様、如何なされましたか」

「……ううん。何でもない」

誤魔化すように紅茶に手を付けて。

私は一番始めに抱いたような怒りと疑問と不信を、心の中でごちゃ混ぜにして。

一気に喉に流し込んだ。

異世界人の手紙（後書き）

コメディ……（泣

章を作らせて頂きました。

こんなダメダメな作者の作品をいつも読んで下さり、また、沢山の
お気に入りありがとうございます♪（ノωノ*）

真実の欠片

——タスケテ

それは幼き我が同胞が出す叫び声。

それを感じ取り、最近竜達がざわめき出す。

否。

その叫びを一番はじめに聞いたのは、おそらく我が『姫』。

魔力を持たないその故からか、それともその素質があつたのか。

『姫』は竜達の深層心理を識り、パイプラインをつなげることが出来る。

しかも、それは無意識のうちにだ。

今回もその声を聞き、無意識のうちに竜達の意識にパイプラインを引いたのだろう。

この声はどこからか。

この声は、なぜ、叫ぶのか。

『姫』の疑問が竜達に問いかけられる。

それに答えるものはいない。

それに答えてはならない。

——タスケテ

日々、強くなる叫び。

それを聞いて夢の中であるにもかかわらずため息をつく。

昔からそうだ。

人は傲慢で、欲に忠実。

我らよりも己の欲を満たすことに長けている。

それによって多くの同胞達が犠牲になった。

この幼き竜も……。

もう一度ゆっくり息をついて、夢から覚めることにする。
『姫』の未来が、少しでも明るいことを願いながら。

薄暗い部屋の中。

ベッドのそばに佇む男に、俺は近づいた。

「戻ったのか」

安堵しつつ、男は俺にそう言った。

ベッドに横たわる娘の漆黒の髪を撫でながら。

『姫』は穏やかな吐息を漏らし、一度眠ったらなかなか起きない所は変わっていない。

「まあな。戦争よりもやばいことになりそうだ」

このまま喋っても『姫』が起きることは無いだろうと判断して、俺は喋る。

男の眉が上がり、無言で先を促した。

その間も『姫』の頭から手を離そうとしない。

それがどれだけ『姫』を想っているのか伝わってくる。

だが、この男はそれ以上をしない。

する権利はないと思っている。

俺の願いを叶えるため、時間が無かったとはいえ何の説明も無しに『姫』の目の前で殺したのだから。

あのときは、仕方なかったのだが。

今はそれについて言う必要がないだろう。

幾ら言おうとも、この男が自分自身で己を許さない限り、この男の苦しみは続くのだから。

「やつらは【召喚の儀】をしようとしている」

「……【召喚の儀】？」

俺の報告に男は首を傾げた。

知らないのも無理は無いだろう。

行われたのはミオが召喚されたあの時以来だ。

この男が生まれる何百年も前の話であるし、それ以降は未然に俺達が防いできたからな。

「なんだそれは」

「竜を媒介にして異世界人を喚び出す方法だ」

「っ!？」

男は勢いよく立ち上がる。

信じられないものを見る様な目。

王族しか見ることが許されない改ざんさえ許されない『裏歴史書』。

王となるものは必ず読み、覚える。

特に異世界人に関しての記録はこの国は他の国よりも細かく記しており、いつ如何なるものであるかと喚び出す事を禁じる制約を刻み込まれる。

それをしたのは先々代。

至ってまだごく最近の出来事だろう。

「かつて隣国の王は戦に勝つ為に『勇者』と称して異世界人を召喚した。その犠牲に多量の竜が使用され、個体数が少なかった竜が更に激減した。まさかその事を知った竜の謀反に対して異世界人やこ

の国が協力関係を結ぶとも知らずに」

「知っている。ミオ・サクライを筆頭に、数名の異世界人と多くの竜、そして先々代とガルフィオナが終結させたと。あの時の痛手は深いものだったのを王ならば誰しもが学ぶというのに。愚かな……」

男は目を伏せる。

本当に儀式をしたからと言って成功する確率は1億分の1にも満たない。

そう何度も出来ることなく、また周辺国に気付かれれば批判や圧力は避けられないだろう。

何故、そうするのか。

俺からしてみても、狂気に取り込まれた行動としてしか見て取れない。

それは男も同じようで、首を横に振った。

「いつぐらいに儀式の準備は済む」

「分らん。そう言う動きが在ることは確かだ。ただ……」

俺は『姫』に目を移す。

本当なら、巻き込まずに済めば良かった。

しかし、あの夢を見る限り、覚えていろいろがいなかつたが、儀式が始まれば何らかの衝撃を受けるだろう。

『姫』は人に何度も不信感や疑問を抱くのに、竜にはそれらを抱くことはない。

それは本能で俺達が『姫』を裏切れないことを知っているからだろうか。

「一つ、言っただけだ」

「なんだ」

俺は男を見る。

強き意志の籠もった瞳。

先々代を彷彿とさせる強き魂。

この男になら、『姫』を任せておけるだろうか。

「俺達は人になる時、代償が必要になる。リアや俺の様に魔力のほとんども凝縮し、人の許容出来る魔力量にまで魔力を捨て、寿命を極端に縮めるか。それとも両親、もしくは血縁の命を代償に人になるのか」

「ああ。バジイに聞いたことがある」

「不思議に思わなかったか。あの時、俺はルチアの剣で貫かれ、一度人体構築を行った。——だが、『姫』は？」

俺の言葉に、男は首を傾げた。

言葉遊びをしている訳ではない。

これが真実の鱗片。

詳しいことを人間に伝えることはしなくて良いだろう。

「『姫』は、何を代償に『人』になった？」

「それはガルフィオナの……」

「俺は、生きているだろう。それに『姫』自体は魔力を持っていなかった」

漸く、漸く男は気付いたようだ。

困惑に眉を寄せ、理解出来ないとその顔が語っている。

「『姫』が、何の代償も無しに人になれたとしたら、どうする？」

「そんなもの、理が歪んでいる。有り得る訳がない」

「異世界人の存在自体が歪みだとは思うが、まあ、それは良いだろう。とにかく、『姫』が俺達の中でも特殊だと言うことだ。このこ

とに気付くものが現れないとも限らない。……言いたいことは分かるな」

竜を使う儀式。

その餌が良ければと思う輩が現れないと限らない。

いや、恐らく真実に辿り着くものがいれば、喜々として『姫』を捉えようと手を伸ばすだろう。

『姫』は己を守る術を持っていない。

むしろ眠っていると言った方がいいだろう。

それは必然か、神の采配か。

その代わり、竜達は必ず命に替えても『姫』を守ろうとするだろう。

もし、そんなことが起こってしまえば、人間と竜の戦争でも起きかねないがな。

それをこの場で言うつもりはない。

「『姫』を頼む」

この男に頭を下げた任せること。

それが唯一父親としての、俺の役割だと思った。

「……ああ。この命にかえても」

男の中でも、既に決意は決まっているようだった。

鼻垂れ坊主が一丁前に『男』になりやがって。

俺は小さく笑う。

「ラジス、寄り道をさせて貰ってから任務に帰らせてもらう」

呼び方が変わったことに奴は片眉を上げたが、何も言わないと言

うことは了承したのだろう。

俺は背を向けて静かに部屋を出る。

静かな物音すらない夜の気配。

俺も闇に紛れて目的地へと近づく。

巡回兵など、俺にしてみればいないのも同然。

気配を無くせば余程の玄人でもないかぎり、俺に気付くことはない。

途中でバジイの気配がしたが、近づいてこないと言うことは話す気がないのだろう。

『姫』の部屋のすぐ近くの小部屋。

そこに忍び込む。

もう、寝ているのだろうか。

既に部屋は暗い。

俺は寝台に近づくが、一閃が放たれる前に距離を取った。

「誰？」

低く、殺気を飛ばす声。

ああ、この声だ。

俺は素早く背後に回り込み、女を抱き締める。

「リア……」

「っ！？」

刃を翻そうとしたその腕を掴み、動きを封じる。

明らかに女——リアが動揺しているのが手に取るように分かった。こつこつと所を見ると、竜の中でも彼女が俺より倍近く未熟なことがわかる。

幻術で俺の声をしている奴だったらどうする気なんだろう。

リアを殺そうとする前に、俺が殺すから問題ないか。

「嘘……」

「嘘じゃない。俺だ。リゼリアティス」

竜態であつた時に広まつた名。

広まりすぎてしまった為に、人間になった今はそう呼ぶことはない。

元々呼んでもいないのだから。

「ガル……？」

「そうだ。リア。リア、リア……」

俺の魔力をリアに口移しで注ぐ。

会いたかった。

今まで会えなかったのは、一重にこのからだに魔力と馴染んでいなかったから。

あのままでは、リアに俺だと分かってもらえなかっただろう。

魔力は人によって多種多様。

同じ魔力を持つ者など存在しない。

俺達にとって個人を確認する為に体液による魔力交換が手取り早い方法だ。

刃物を落とし、いつしか魔力交換ではなく、愛おしむ行為として続けていた。

正面に抱き返し、更に深く繋がる。

十八年。

リアが俺の元を去ってからそんなに月日が経っていた。

俺にとっては短いようで長い年月。

しかし、人として生きてきたリアにとっては驚くほど長い年月だっただろう。

「リア」

眦に浮かべる涙を掬い取り、強く抱き寄せる。
この年月を埋めるように。
心を近付ける。

「もう、逢えないのかと思ってた……」

「『姫』を見ていたらそう思うだろうな。でも、『姫』が俺の命を代償に人になったのではないことぐらい、魔力で分かっただろう？」

「魔力交換をしていないので」
「そうか」

俺はくすりと笑う。

姿形が変わっても、愛しいことには変わらない。

俺の妻と子供。

耳たぶを食めば、甘い鳴き声が漏れる。

やばい。

一ヶ月は蜜月として籠りてえ。

「ナギ様には……？」

「見てきたが、直接会ってはいない。リア、自分の子供を様付けするのをおかしくないか」

俺が聞けば、リアの瞳が揺れる。

色っぽいその表情に触手が動くのは仕方ない。

リアは目を伏せた。

「私は、母親だと名乗る資格なんてないもの」

「離れていたのは仕方ないだろう。人になったリアが安全に暮らす為には俺達と一緒に暮らすのは無理だ。着る服も、食い物だって人

「になったら違ってくる」

「でも……」

「子供を信じる。魔力交換すれば一発だぞ？」

冗談の様に言つと、リアは微笑んだ。

人は難しいな。

俺は素早くリアの服の中に手を入れる。

「が、ガル！」

「この国に居られるのは今夜だけだ。また隣国に行かなきゃならない。だから」

良いだろ？

問答無用でベッドに押し倒し、唇を貪る。

空が白む直前まで、リアを手放すことはなかった。

真実の欠片（後書き）

ガルフィオナは自重しましょう。

っていうことで、父様と母様生きてます。

ナギは知らず、物語は続きます。

読者の皆様、いつもありがとうございます！

ご指摘、感想、疑問勉強させて頂いてます。

頑張って完結を目指して行きたいです。

T o b e c o n t i n u e d ! !

知らぬ間の邂逅

暗い暗い冷たい部屋。

そこにいるのは小さな私の眷属。

私は石畳のその部屋に足をついた。

小さな幼き竜。

おそらく私よりも幼いだろう。

その竜は私の姿を認めると、小さく鳴いた。

【助けて】

私は竜に近づく。

その竜は可哀想なほど衰弱しており、手足には魔力抑制の掛かった枷が嵌めてある。

私は思わず眉を顰めた。

幼き竜に、これほどのことをするのは、果たして何処の誰なのか。怒りと同時に哀しみが膨らんだ。

【此処はどこ？】

【助けて助けて！ とと様、かか様！！】

幼き竜の悲しい咆吼。

私は手を伸ばして、自分の状態に気が付く。

体が不安定なのだ。

時々手が透けて床が見える。

それは私が此処にいないことを証明している。

【とと様、かか——】

【黙りなさい！！】

私は一喝した。

同時に風が吹いたのが分かった。

そこで漸く幼き竜は私に目を向ける。

【だあれ！？】

【私は気高きガルフィオナの娘。貴方を助けたいの。此処は何処】

【……人間達は、どる、なんとかって呼んでる】

「ドルダンか」

私は目を細める。

この年の竜が両親の傍を離れる訳がない。

竜という個体は繁殖能力があまりに低い。

かつて起こった召喚による犠牲。

激減した竜達が我が子供を何よりも大切にするのは本能による必

然とも言えよう。

人間達が無理矢理親子を引き離してこの竜をここへと連れてきた

ことが容易に知れた。

なんて、愚かで浅はかな。

今頃この幼き竜の両親は怒りに燃えていることだろう。

ドルダンの場所なら前に大陸地図で確認したことがある。

竜の背に乗っていけばすぐに着くような距離だ。

【貴方のご両親の縄張りはどこか分かる？】

【大きな湖が近いとこ。それから、山が近くて、花畑がいっぱいあって……】

幼き竜の言うことに、私は首を振った。

それだけでは特定出来ない。

この様子では、場所の地名など分かっていないだろう。

とりあえず、ここから連れ出すことが先決だ。

【この枷を取るからね】

そうはいっても、触れようとすればその手は通り抜ける。
幽体離脱でもしたのだろうか。

これではこの竜を逃がすことなど出来ない。
そうしていると、私の背後に影が立った。
私は思わず振り返り、息を呑む。

「ガステイ。会いに来た」

其処にいるのは、18歳ほどの青年だった。

色素の薄い金の髪は、この世界では至って珍しくはない。

だが、その青年は凹凸の在る顔ではなく。

言ってみれば、日本人のような雰囲気を出していた。

恐らく、瞳も髪の毛も黒になれば、日本人に見間違えてしまうほどに。

青年は視線を下げ、私を見る。

まるで私が見えているかのような気がした。

だが、実際は私と視線が合っていない。

青年が盲目というわけではないだろう。

私が見えていないのだと見当を付けた。

「そこに、誰か居るのか」

その言葉は私の存在を感じつつも、私が見えないことを確信させた。

「お前は誰？」

声が届くのかは分からないが、そう問い掛ける。
青年は目を細めて私を見ようとしてきた。

しかし、私が見えないようで肩を竦めてみせる。

「ドルダン国の第一王子、と言えば良いか。貴女は？」

どうやら私の声は聞こえているようだ。

名乗って良いのかどうか迷ったが、王子の強い視線を感じた。
見えてないというのに、まるで見えているような視線。
いや、相手に応える必要はないと私は押し黙った。

「名乗らないのか。まあ、良い。此処に何のようだ」
「そっちこそ。幼き我が眷属を捕らえて何を考えている」

私は王子を睨み付けた。

まるでお互いが見えているようなにらみ合い。

実際には私のみ見えているのだが。

私の問い掛けに王子は首を振った。

「――予測でしかないが、父上は【召喚】をしようと準備を進めている」
「何ですって!？」

大声に王子は眉を寄せ、私は思わず口を手で覆った。
すぐに気を取り直し、齒を食いしばる。

「許さない。そんなことはさせない」
「たかが亡霊に何か出来るとは思わんがな。思い通りにならない俺に嫌気が差して異世界から大いなる力を呼び寄せ、我がものにした

いんだろっさ」

吐き捨てるような、そんな言い方だった。

私はその言葉に思わず驚く。

異世界からの大いなる力。

それは時空を越えることで「バグ」と同じ作用が起きて、異界人が「チート」によく似た力を手に入れることなのだろうか。

それは余りにも不確かで、成功する確率は低い。

「たかだか数百年前の王も同じ事をした。確かに愚かだとは思っさ。謀反を起こしたいところだが、腐っても父親だ。穩便に済ませたい」

謀反を起こす。

起こして成功した後、王はどうなるのか。

大抵は処刑される。

この場合、謀反を起こした息子によって。

王子は鼻で笑うと、私を通り過ぎて竜に手を伸ばした。

竜も王子には素直に従うようで、素直に撫でられている。

劣るように枷をさすり、苦渋の表情を浮かべた。

「何を甘いことを言っているんだろっな。亡霊相手に」

「殿下」

部屋の入り口から、男の声がする。

見ようとすると同時に視界が黒に覆われた。

誰かに腕を取られ、視界を手で阻まれたようだ。

「……お前は何をしている」

「失礼します。殿下が話しているのは亡霊などではありませんよ」

私が見えているらしい男は、私の耳元に唇を寄せた。

「馬鹿娘。目を閉じて、戻りたいと願え。長時間体から意識を飛ばしすぎていると戻れなくなるぞ」

それは何処かで聞いたことがあるような、低い声。

暖かい、本当に何処かで知っている声だった。

戻れなくなる、と聞いて私は慌てて瞼を閉じる。

すると強い力で引っ張られるような感覚がして、その流れに身を任せる。

これはどうやら夢ではないのだろうか。

体から感覚が抜けてゆく。

闇の中に私は身を任せていった。

意識が覚醒して起きれば、ちょうど起きる時間だった。

感覚は覚えている。

本当に夢なのか。

いや、夢にしては……。

思考を阻むようにして、ノックの音が聞こえた。

許可して入ってきたのはリアではない侍女。

「リアは？」

「お昼まで陛下より暇を頂いております」

昨日は何も言ってなかったのに？

しかも昼までとは、何処か具合でも悪いのか。

もしくは何処か買物にでも行くのか。
まあ、いいや。

私は堅苦しいドレスを出してくる侍女を無視して、男物の服を着る。

アースに借りてばかりでは申し訳ないので、お古を貰って自分で加工したのだ。

相手がリアではないと、やりたい放題出来る。

侍女はあきれ顔で迫って来るも、リアではない為、恐れるに足らない。

さつさと着てしまい、部屋を出る頃には侍女はすっかり諦めているようだった。

たかが人間の女一人の力で私に敵う訳もないからね。

リアは何故か例外だけど。

私は自室を出て在る部屋に向かう。

棟を渡り、その最上階へ。

その部屋の周囲には見張りや巡回兵の他に人影はなく、重厚な扉の前で私は立ち止まった。

「竜姫様、いかがなさいましたか」

「通して。あいつに話がある」

ラジスの名前を言わない。

もしくは陛下と私は呼ばない。

それは心をまだ許していないから。

いや、もしかしたら二度と許すことはないのかも知れない。

見張りが中に伺いを立て、すぐに通される。

その部屋は執務室。

ラジスは高く積まれた書類に目を通していた。

「どうした」

「ドルダンに、竜が捕らえられているかも知れない」

軽くラジスが目を見開く。

私はラジスにこしばらくの夢の内容を伝えた。

助けに行きたいのなら一人で行けばいい。

だが、その後は？

助けたその後はどうすればいい。

竜を親元へ帰せたからと言って全てが丸く収まる訳ではない。

ドルダンに政治的な制裁と力を求める王に罰を与えなければ。

それに、私がもし入っていつて暴れてしまえばこの国とドルダンで戦争の火種になる可能性は十分にある。

そうなってしまうえば多くの犠牲が出る。

人間なんて糞食らえだけど、それで竜達に被害が出るのも目に見えている。

なにより竜を守る為に。

そもそもあの夢が現実なのか確かめなければ。

全て言い終えると、ラジスは羽ペンを置き、考え込んでいた。

「……普通なら証拠を提示して出直せ、と、言いたいところだが。密偵の報告とあまりに酷似している。無視も出来ないな」

やはりあれは夢じゃない。

私は確信すると共に、焦りが出てくる。

もし、竜達がこのことを知ればどうなるのか。

「早くしないと、二の舞になる」

「言つとおりだ。だが、今の状態では何も出来ない」

何故。

目線だけで問い掛けると、ラジスは溜息を吐いた。

「ドルダンは戦争の準備も始めている。刺激して戦争なんて起こしてみれば、結果儀式を早める事になるかも知れない」

「じゃあ、どうすれば良いのよ！」

ラジスに近寄った私は手の平を机に叩き付けた。

視線が交差し、ラジスの瞳の奥に宿る冷たい光を見つける。

それは賢王としてのラジスがいた。

どうすれば被害を最小限に抑えられるのか、考えて動いていることは明白だ。

「儀式が行われれば、国同士の戦争ではなくなる。種族間での問題に発展するんじゃないの」

「今は、相手の出方を見るしかない。それに風が出てくることはない」

「でも！」

言い募ろうとした私に、ラジスは溜息を吐く。
立ち上がり、私の前に立つと、そつと呟いた。

「眷属に対しては、やたらと肩を持つな」

「当たり前。私は人間の姿をしようとしてようと、ガルフィオナの娘であることには変わらないもの」

その誇りは捨てるつもりはない。

父様が私にくれたもの。

数少ない竜達が会いに来てくれた日のこともよく覚えてる。

人間に、それを踏み弄られるつもりは毛頭無い。

いざとなれば小さき存在の私でも身を打って助けてみせる。

ラジスは私を見つめ、暫くしてもう一度溜息を吐いた。

「……城を暫く開ける。凧は此処にいる」

「何で。私は――」

「元々ドルダンには使者を送って訪問の旨は伝えている。だが、お前を連れて行くことは出来ない。ガルフィオナとの約束だからな」

父様の名前が出て、私は目を見開く。

ラジスは目を伏せ、私を抱き寄せた。

「全て俺の身勝手だ。お前はただ、俺を憎んでいればいい」

何度も囁かれた、呪文の言葉。

そう。私はただ、ラジスを憎んでいればいい。

その、筈なのに。

揺らぐ、揺らぐ。

何が本当で、何が偽りなのか。

「人間は、愚かで浅はかなのだろうか？ 俺も、例外じゃない」

――本当に、信用しているの？

先日私が思ったこととラジスの声が重なる。

真実を、教えて欲しいのに。

私は、何も知らない。

身勝手に、考えるだけ。

「部屋に戻れ。後はなんとかする」

離れるぬくもり。

向けられる瞳は何よりも悲しく、暖かです。
思わず、思考が停止する。

私は、ラジスに護られているの？

知らぬ間の邂逅（後書き）

リアがお休みだったのは皆様のご想像におまかせします。

いつもありがとうございます（＊、ー、＊）

まだまだ頑張っていくしますので、応援よろしくお願いします！

置いてきた存在

「やっぱり……」

「駄目だ。連れて行けない」

俺がドルダン訪問に向けて出発する日。

凧は馬車の中で俺を待っていた。

一体いつ、抜け出したんだか。

首根っこを引っつかんで追い出した。

着いてこようとする凧。

其処まで同属が愛しいか。恋しいか。

苛立ちが芽生え出す。

だが、俺が言い切る言葉の意味を正しく理解したようだ。

連れて行かないのではない。

連れて行けないのだ。

ガルフィオナとの約束然り、凧を危険な目に遭わす訳にはいけな

かった。

何の為にこの世界に生まれ落ちたのか分からなくなる。

「ロードル、シューバ、リア。後は頼んだ」

「……承知致しました」

控えていた三人が頭を下げる。

これはあくまで秘密裏の訪問だ。

大々的に訪問してはならない。

警護としてドルカと精鋭騎士数名、そして上空からはバジィと竜

騎士達。

地上から見分には、一国の王として警護は余りにも手薄だ。

しかし、釣れる餌はとことん釣っておきたいところだ。

なにより俺自身が負けるとは思わない。

過信でもなく、紛れもない事実だ。

国のことにしては性格がどうであれ、他国では賢者として名高い

「ワイスマン」

仕事好きのロードル。

元竜であり、現在は侍女兼騎士のリア。

かつて戦鬼と呼ばれたシューバ、そして多くの「影」達。

そう易々と攻め込まれるようなこともない。

何かあればロードルを筆頭に恙なく問題は解決するだろう。

全ては、風を、国民を護る為に目指してきたもの。

その足がかりとなる仲間達。

不安と悔しさが混じる風を横目に、俺は出発した。

普通はドルダンに着くまで一ヶ月。

そこを強行軍で半月。

実際、それが儀式のための準備が整うまで掛かる最低の時間。

だから、半月以内にドルダンの首都、それも王に会わなければならない。

推測でしかないが、恐らく国内情勢は……。

俺は溜息と共に首を振る。

推測を遙かに超えたことになっていなければいい。

願うことしかできないが、推測よりも酷い状態であることは容易

に想像出来る。

だが、相手は俺の国の人間ではない。

情けをかけることも、悔ることもしてはならない。

どれだけ俺の国、風の為に情報と成果を搾り取れるかだ。

まあ、行ったところで儀式は止まらないだろうから、予定通りに進まなければならないな。

背もたれにもたれ、再度、俺は溜息を吐いた。

「——徐々に、暴れるか」

「むう」

私は頬を膨らまして馬車を見送った。

行きたいと言っているのに、ラジスは駄目だと言った。
連れて行けない。

それは遊びではないと諭しているのか、単に危険だからと言っているのか。

私には計りかねる。

「ナギ様、戻りましょう」

馬車が見えなくなった頃、リアが声をかけてくる。
それに私は首を振った。

「ですがナギ様。陛下について行くにはドルダンは危険すぎます」
「そうです。ドルダンは今、国内情勢が不安定。見て回る観光のようないことも恐らく出来かねますぞ」

リアに次いで宰相のロードルがいった。

このタヌキ。

私は小さく心の中で悪態を付く。

ロードルは私が観光で行こうとしている訳ではないことを分かっているのだ。

だが、敢えて観光と言った。

しかも、見て回るって。

そこを強調してくると言うことは、城の内部を見て回ることは危

険だと言いたいのだろう。

主に行きたいのは地下。

あの幼き竜は恐らく地下牢のような場所にいるのだろう。

窓一つ無い石牢、独特の湿気、そして第一王子がお忍びで来ても安全な範囲。

そこから導き出されるのは地下牢。

こっそり連れて行ってくれば、一人で探したのに。

「それでは余りにも危険です」

心を読まれたかと思ってリアを見れば、リアはニッコリとした。

「口に出ておられましたよ」

「むう……」

ロードルは仕事に戻り、私は自室に連れて行かれた。

逃げ出そうとはしたが、今回リアが私の走るスピードに平気で追いついてきた。

ちよ、今までのは何だったの!?

愕然としながらも、リアの本気を悟る。

しっかりと掴まれて、部屋に戻された。

「ナギ様。少し、お話をしましょうか」

「い、いや。遠慮したいなあ……」

「まあ、私ごときに遠慮など不要です」

貴女の視線が恐いのですが。

トクトクと私はリアにドルダンの国内情勢といかに危険かを夕食が整うまで聞かされたのだった。

夜は野宿を繰り返し、思ったよりも早くドルダンに到着した。

やはり思ったよりも情勢は良くなかった。

活気あるはずの大きな街は静まりかえり、馬車が走る音さえ響いてゆく。

頬のこけた少年少女が物陰から馬車を窺い、老婆が背を丸めて紙袋を持って歩いている。

ここは以前来た時には活気ある商業街であるはずだった。

緊張感に包まれたゴースタウン。

戦争が近づいているのがひしひしと伝わってくる。

首都がそう思わせないようなものになっているのかも知れないが、国境近くにあるこの街はドルダンの状況を伝えていた。

更に一週間半。

首都に到着した俺達は宿に泊まることにした。

活気はあるが、女子供だけで歩いている姿を見ない。

大抵歩いているのは男ばかりか、女の隣に男がいるかぐらいだ。

宿の値段も高く、俺は眉を顰めた。

女子供だけで歩けないと言うことは、それだけ治安が悪いと言うことだ。

商業街ほど酷くはないが、以前訪問した時よりも遙かに状況は悪く、王が悪政を働いていることが易々と分かる。

「よお、ラジス」

何処から嗅ぎ付けてきたのか、ガルフィオナが窓から入ってきた。大柄の癖してどうやって窓から入ってくるのか、いつも不思議で

ならない。

ガルフィオナは周囲を見回し、息をついた。

「姫は連れてきてないようだな」

「当たり前だ」

もしかしたら首都で闘うことになるかも知れないのに。
風血を見せるつもりもない。
ガルフィオナは微かに微笑み、次いで顔色を変えた。

「ドルダン王は提案を拒否した」

「だから、開戦の準備という訳か」

ため息しか出ない。

出来ることならドルダン王には夢を見たままでいて欲しかった。
俺が提案したのはドルダンが密かにに行っている竜密猟の停止。
それは周辺国にも書簡を出し、連盟国として出したものだった。
今のうちなら、後戻りできる。
出来なければ、ドルダンという国をなくすしか方法はない。

コレはただの牽制では無い。

ドルダンを今のうちに止めなければ、風が危惧するように竜と人間種族間での戦争に発展する。

その可能性が極めて高い。

だからこそ、多くの国が賛同したというのに。

「どこまで行っても、人間は愚かだな」

俺の呟きに、ガルフィオナは肩を竦めた。
愛するものを護る為に竜から人間に姿を変えたこの男。
元竜であるこの男は何を思う？

「密偵や内部者は」

「既に命令は行き届いてる」

送ったのは密偵だけではない。

ドルダンという国を、俺は内側から蝕んでいくことに決めていた。
元々怪しい動きはあった。

その準備の為に一年。

そしてもしもの時の為にもう数年。

前王から進めていた。

前王はともかく。

俺は「もしも」が無ければ起動するつもりはなかった。
このドルダンは、終わる。

「全て予定通りにしろ」

「御意に」

ガルフィオナは精練された動きで一礼し、去ってゆく。
それを見届け、俺は空を見上げた。

空に浮かぶ月は、元いた世界と同じように見える。

誰が死のうが、どうなるうが、変わらない世界。

だが、俺達はここに息づいている。

「風……」

思い浮かべるのは一人の少女。

護るのは責任か、義務か、依存か。

それとも……？

俺は肩を竦めて、窓から背を向けた。

置いてきた存在（後書き）

ラジス視点でした。

舞台の裏側のな何か。

これ読まなきゃ、多分後でよりなんで？って展開になる気がして書きました。

いつもありがとうございますゝ（ノωノ*）

寒くなってきましたので、お身体には気を付けてください。

12日にご指摘のあった一部を訂正しました。
ありがとうございます！

揺れ動く絆の間で

冷たい床に、私は再度降り立つ。

そこに見えるのは前と同じく鎖に繋がれた幼き我が同属。

いつそれを見ても胸糞悪くなる。

今すぐ城を飛び出して助けに行きたいが、ただの小娘一人に何が出来る訳もない。

今だってこの体は己の意思だけを飛ばして此処にいるのだから。

幼き竜や人と話すことは出来たとしても、人が私に触れることは出来ないだろう。

【なぎ？】

【そうよ。我が同属よ】

幼き竜が私の存在に気付く。

この竜は第一王子と契約し、ガステイという名が付けられた。

それはとても腹立たしいことだが、ガステイは王子を敵視していない。

むしろ唯一の味方だと私に説明した。

王子、エヴィ・ディ・ドルダンは王位継承者で在りながら、王の考えに沿うことはなく、独自の手腕を見せてこの国を発展させた。

廃れかけていた美術工芸を復活させ、華美な装飾ではなく、流麗な美しさを求めた美術。

王子自身その才能に恵まれ、特に銀細工加工の精密さは1000年に一人の逸材と言われている。

同時に政治には護りに力を入れ、戦争を好まず、国土を広げることよりも国の仕組みをよくすることに力を入れていた。

と、これは此処を徘徊している時に聞いた侍女達や王子の話から知っているだけだが。

もしかしたら私のことを見える者がいるかも知れないから（主に同属だと思うが）、あまり遠いところまで行くことはない。

だが、この話は過去のもの。

今、王子は王の命令によって政治の介入を封じられ、かれこれ3年強引な謹慎を受けているらしい。

王は王子とは正反対の人間と言って良いだろう。

何でも力で解決すれば良いと思っており、美術などは華美で在るほど良いと思っているらしい。

他の国に負けないように。

他の国に侮られないように。

王子の住む場所は、落ち着いた私としても好ましい雰囲気に含まれていたが、王の住居区域、もしくは城の大部分は金などの華美な装飾が施され、目が疲れてしまう。

それほど正反対の二人なのだから、言わずとも王が過激派なのが伺える。

国土を広げ、戦争を仕掛ける準備が着々と進められているそうだが、国境に近くなればなるほど貧しい人々が多くなり、王都に近づけば近づくほど羽振りの良い貴族達が闊歩する。

この国の内情は、崩壊寸前だと思う。

こんな国にラジスが向かったのかと思うと心配になるが……って、何で心配になるんだろう。

私は首を振る。

あんな奴、放って置いても死にはしない。

心配するだけ無駄だ。

【うれしい。ここは、さみしいから。なぎがくると、うれしい】

【ああ、ガステイが嬉しいと私も嬉しいよ】

それは本心からだった。

助けてあげたくても助けてあげられない。

リア達に不審がられないようにここへ来られるのも、就寝後の夜だけだ。

出来るなら、その鎖を引きちぎってあげたい。
竜態であつたのなら、それが可能なのに。

そう思うと、悔しさがこみ上げてくる。

それを慰めるように、ガステイは小さく鳴いた。

【なぎ、わらって？ ぼく、なぎがわらうとうれしい】

慰めに来たはずがガステイに慰められてしまい、私は恥ずかしくなる。

触れないが、ガステイの頭を下げて貰って優しく撫でた。

【うん、大丈夫】

そう笑えば、ガステイも笑う。

必ず助けなきゃいけない。

そう思うと同時に、私は自分の体の異変に気付いていた。

一度目の幽体離脱？より、意識すれば出来るようになったこの方法。

そして、一週間経った今では、呼吸と同じように扱うことが出来る。

かといって、始め私に触れることが出来たこちらの国の密偵が言うように、あまり長い時間する事は出来ないが。

終わった後の気怠げな体。

これは意識が体から離れていたからかも知れないけど、気になるのは、体に魔力を感じるようになったこと。

いや、元からあつたものの様に思う。

ただ、今まで何故か感じられなかっただけで。

父様は私に魔力が無いって言ってたのも、もしかしたら、その時

—。

「また、来ているのか？」

思考の途中に王子の声がして私は振り向いた。

「そっちこそ。謹慎中の癖して毎晩飽きないわね」

「俺はガステイの契約者だ」

契約者。

思わず吐き気がした。

「人間達が私達を一方的に縛っているだけの呪いを契約？ 笑わせないで。契約は双方が合意の上で行うもの。お前も、幼き我が同属に無理矢理結んだのだろう」

私は王子を睨んだ。

王子は一瞬目を見開き、すぐさま表情を戻す。

この王子も、ラジスも同じ。

望んでもいないのに、契約と言う名の呪いを私達にかけた。

私達は決して望んだ訳じゃないのに。

「君も、契約者か」

「そうよ。それと、元竜って意味、分かる？」

王子は息を呑む。

それに顔が歪んだ。

竜であることに誇りを持っていた。

父様の娘であることが誇らしかった。

父様は、もういない。

私も、竜の身体ではない。

竜であった全てが奪われたのに、【契約】は私を縛るのだ。だから、もう。

一方的な契約を、赦すつもりはない。

「この幼き我が同属を、儀式の贄になどさせない。人間の愚かな王子。儀式が執行された時、人間と竜の争いが起きると思え。きっと、幾百年前の比ではあるまい」

冗談などではない。

ラジスも恐れていること。

当事国だつのに、同じ愚行を犯すなど。

ただ、滑稽でしかない。

「……ああ。俺も、そう思う」

王子、いや。

エヴィは儚げにそう笑った。

その拳は強く握りこまれ、強い葛藤が伺える。

「俺も、父上は愚かだと思う。国を豊かにする方法を、父上は誰から見ても間違えている。大臣達は父上に賛同して、先のない戦争をするつもりだ。だが、聞きたい。竜の姫よ」

エヴィは悲しみと、苦しみと、怒りが合わさった、なんとも言えない笑みを浮かべた。

「誰も傷付かず、全てを治めるにはどうしたら良い？ あれでも、俺の父上なんだ。昔はあぁじゃなかったのに、母上が死んでから、父上はおかしくなった」

エヴィは壁にもたれ掛かり、深い溜め息を吐く。

そこにいるのは「王子」ではなく、一人の父を想う「子」。

私は、目を細めた。

何らかの事情で亡くなった妃を愛した王は狂ってしまい、全てがどうでもよくなった。

よくあるシナリオ。

だが、どうしてそれが召喚に繋がる？

自滅したいのなら、自害するなり、戦争を始めるなり幾らでも方法はあるはずだ。

そこを何故、召喚してから戦争などと回りくどいことをするのか。

「偽善、ね」

私は、エヴィにそう答えた。

「一人の人間としてなら、そう思うかも知れない。だが、己を見失い、王という立場を利用して無駄な戦争を起こすなら、王が罰せられるのは当然よ」

「ああ、そうだ。だが、俺にはもう、止められない。俺は父上を止めようとして、継承権を父上に取り上げられた。今も此処への行き来さえ、認められてない。それでも、あの人は父なんだ。昔は国民のことばかり考えてた優しい人なんだ！」

激しい、魂を揺さぶられるような叫び。

私は首を振った。

気持ちに分かる。

相手は王。

普通の親子なら、殴ったり、叫んだりしてお互いの思いを訴えることが出来るだろう。

それが出来ないのだ。

実の親子でも、死刑にすることだって王には許される。
王位継承者だったエヴィには、思いを吐露することなど許されなかったに違いない。

「では誰が王を止めるの？ 言っておくけど、他の国に任せてしまえば、必ず王は正当な罰を受けることになるわよ」

息を吐いて、ゆっくりそう伝えた。

正当な罰。

それが何かぐらい、エヴィも分かっているのだろう。
悔しげに顔を歪めている。

前世の歴史にもある様に、戦争に負けた国の王族は島流しや見せしめの為に殺されたりした。

また、それを誘発するものも厳しく断罪された事実だってある。
当然だ。

それによって一個人ではなく、多くの血が、涙が流れ、多くの命の灯火が消えるのだから。

国の為に死んだ。

そう割り切って生きていける人など、本当にいるのか。

「エヴィ。愚かな王子。お前は人でない私の言葉を聞いてどうなる。
動き出すのは、お前でしょ」

【……なぎ】

不意に、ガステイが私を呼んだ。

振り向けば、悲し気な表情を浮かべている。

【えっ い、いい人。いじめないで】

【我が同属よ。この人間がそれほど気に入ったか】

ガステイは肯定するように、嬉しそうな声を上げた。

【いいにおい。やさしい魔力】

「ガステイ、どうした？」

古語が分からないエヴィには、いきなりガステイが甲高い鳴き声を上げたように聞こえただろう。

それが可笑しくて、少し笑ってしまう。

「我が同属は、お前を気に入っている。それを私が聞いただけよ」

私が素直にそう言えば、エヴィは驚いて立ち上がった。

ガステイに向かって歩いて歩いたので、私は退けてやる。

エヴィが手を伸ばせば、ガステイは喉を鳴らしながら、届く限り首を伸ばした。

「俺は……」

エヴィは何かを堪えるように瞼を閉じ、ガステイの頭を抱き締める。

それを見ていると、私の身体が揺らぎ始めた。

今日はこれが限界のようだ。

私はもう一度、目を細める。

瞼を開けたエヴィの顔を見て、微かな光を見つけた。

人と人の狭間で揺れる愚かな人間が、ほんの少し前に進む瞬間。

私は、意識を己の身体に戻した。

揺れ動く絆の間で（後書き）

必要であって必要でない気がする話。いや、必要なんですが。携帯で書いたので、出来が非常に気になります。

何回も見直しましたが、おかしくないか凄く心配。

次はもう一週間後。

時間的にはラジスが王都に到着した頃かな。

誰視点にするかはまだ決めてません。

いつもありがとうございます！

最近、始めの一話を作った時の予想値よりお気に入りが多くてビビってます（汗

本当に、感謝です！！

始動する血の宴

ラジスがこの国を出て二週間。

私はまた意識を飛ばしていた。

エヴィによれば、もうラジスはこの国に着いているらしい。
薄暗い中、時刻は日付を越えた頃。

エヴィは既に牢へと来ていた。

「父上は、グラディエル国王の申し入れを却下した」

開口一番の言葉は、それだった。

周辺国の、ラジスの忠告を却下したこと。

グラディエル国王は、ラジスのことだ。

ラジスラジス言っているから、忘れそうになるんだけど。

あいつって、そういえば国王だったわ。

エヴィは拳を強く握る。

「父上が、儀式の時間を早めた。もう、あと数時間すれば儀式は始まる」

私は驚きと共に、何処か冷静な所で頷いた。

周辺国にばれてしまえば、必ず止めようという動きが出てくるだろう。

それが始まる前に儀式を始めてしまおうと言うことだ。

と、言うことは既に儀式の準備は出来ていることになる。

エヴィはガステイにもたれかかり、空を見る。

その視線の先に、私がいるとも言っように。

いや、実際は私はいた。

エヴィは視線だけで私の位置を掴んだのだろう。

「少し、身の上話をしよう」

そんな時間は無いというのに。

私はエヴィを睨み付ける。

そんな時間があれば、何かすべき事はあるはずだ。

ドルダン王にもう一度静止を求めるなり、ガステイを逃がす努力をするなり、なんなりと。

「大概はこの城に潜入しているグラディエルの密偵達が下準備をしている。俺はあと、それに乗っかるだけで良い」

要は、密偵が動いている今は待機と言うことなのだろう。

エヴィの瞳には、既に迷いの色はない。

決意と、哀しみの色がその瞳には宿っていた。

「前王は、兄妹はいない、ただ一人の人で、父上は前王の従兄に当たる。王位継承権は、それほど高くなかった」

ぼつりぼつりと話される身の上話。

私は床に座って、聞くことにした。

自然と顔を上げていたエヴィも、私と視線を合わせてくる。

「この国が腐敗したのは、前王の頃からだ。傀儡の王だった前王は、既に王としての責務は放棄していた。表だってはそう見えないようにしてな。だから、父上が城を制圧するのも、王に成り代わるのも簡単だった。それまで考古学者だった父上が、突然。俺も、学者の息子から一気に王子。びっくりだ」

学者の地位はそれほど高くは無いけれど、ドルダン王は伯位を持

っていたそうさだ。

成り代わった後、父と呼んでいたのを父上、ドルダン王と呼び方を変え、目に見えてドルダン王は変わっていったらしい。

また、王子になったエヴィは作法やその他諸々を数年で詰め込んだ。

もともと貴族としては自由な方だったのに、一気に状況が変わったのだ。

エヴィの戸惑いも当然のものだろう。

「父上は、人が変わってしまった。母上が死んでから、まるで、なにかに取り憑かれるように」

なにか、硬質な物が床を擦る音がした。

見て見れば、そこには剣がある。

エヴィには似合わない、人殺しの道具。

「俺は、何をしていたんだろうな。父上を、父を支えることも出来ずに、ただ、流れに身を任せて」

そこで、牢に降りてくるような音がした。

エヴィは魔法で鍵を開け、牢から出て剣を構える。

違う。

私の中の誰かが叫ぶ。

止めて。

私の中の人間が叫んだ。

エヴィの背中は大きく、命の灯が強くなる。

「俺が、あの人を止める。もう、引き返せないのなら、地獄まで付き合ってやる」

「なっ——王子！」

降りてきたのは交代の見張りであろう兵士。

そう言えば前の見張りは——既に伸びていた。

エヴィは剣を振りかざす。

その迷い無い一閃。

私は反射的に目を閉じる。

しかし、肉が切れる音ではなく、鈍い音が響く。

恐る恐る目を開ければ、兵士は血を流さずに倒れていた。

見れば剣は鞘に収まってるままだ。

「この兵士にも、ガステイにも。種族関係なく家族はある。悲しむ者がいる筈なんだ」

エヴィは瞼を閉じていた。

きつく剣を握りしめて。

走ってくる怒号と複数の足跡が階段を駆け下りてくる音がする。

逃げるのでもなく、隠れるのでもなく。

「これで俺は——反逆者だ」

エヴィは鞘から剣を抜いた。

銀色の刃がきらめく。

構えて、降りてきた兵士が反応する前にしとめていく。

相手が剣を抜く前に。

既に抜いている者には容赦してはならない。

血の一滴も流れていないことから、全員が死んでいないことが分かる。

エヴィが余程の手練れで在ることも必然的に分かった。

エヴィは兵士達の服の中を物色し、ガステイの枷を解く鍵を見つ

ける。

それで牢に入って枷を取れば、ガステイは嬉しそうに声を上げた。

「ガステイ、お前は自由だ。何処へでも行けばいい」

「エヴィはどうするの」

私は聞いた。

なよなよしい青年ではなく、立派な「王子」の顔をしたエヴィ。
ラジスと同じ雰囲気を出す、決意の瞳に気圧される。

「竜の姫。俺は、俺の為に、前へと進む」

そう言っ出てようとするエヴィを止めたのは私ではなく、ガステイ。
イ。

【心高き深い思い。我は、心から貴方に遣えよう】

人間にも聞こえるように、ゆっくりとガステイは念話で話した。
頭を垂れ、服従の意思を示す。

幼き我が眷属にそうさせるほど、今のエヴィには強い意志があった。
た。

念話に驚きながらも、エヴィはガステイを仰ぎ見る。

エヴィと同じように、ガステイはしっかりとその瞳にエヴィを映
していた。

「俺と……一緒に闘ってくれるのか？」

【我、契約に結びし盟友を護る。それだけのこと】

子供のようにゆっくりと言えなかったガステイが、はつきりと意
思を示した。

エヴィは頷く。

そこにあるのは服従と良いながらもそうではない。
尊敬、敬愛。

本来あるべき【契約】の形。

私が求めていたもの。

私がそうであつて欲しいと願ったもの。

私は眩しいものを見るように、目を細めた。

「ああ？ もう、こっちはこっちで盛り上がってやがる」

ハッとして振り向けば、大柄な男がいた。

兵士達と同じ服を着ており、その後ろにはもう一人兜を被った兵士がいる。

私は見えてもないが身構える。

すると、エヴィは一息吐いた。

「そっちの準備は」

「出来てま、いや。出来てる。王子、一丁前に男の顔をしてるじゃねえか」

その声は二週間前に聞いた——密偵の声だ。

砕けた言い方に直したのは何故か分らないが、密偵は私に視線を合かし、後ろの兵士を見やると、兵士に道を譲るように一歩下がった。

「——風」

その声に、私は驚きを隠せない。

その発音で、その声で喚ぶのは、ただ、一人。
だけどその人は今は城下にいるはずで。

ここに在るはずがない。
兜を脱ぐその仕草が長く感じられた。

「ラジス……」

私の眩き。

兜を脱いだラジスは、私に詰め寄り、抱き寄せる。
しかし、触れられない。
それに眉を顰めながら、私と視線を合わせた。

「何故、此处にいる」

「え、と。それは、その……」

「ラジス。それは後にしろ。まずはこっちだ」

Nice！ 密偵さん。

ラジスは舌打ちをしながらも、エヴィへと向き直る。
エヴィもラジスの名前を聞いて姿勢を正し、頭を垂れた。

「ラジス・ヴィオ・グラディエルだ」

「もはやこの国は終わる。ただのエヴィとお呼び下さい。グラディエル王」

正式な挨拶はせずに、頭を下げるエヴィ。

今は正式な挨拶をしている場合ではないことをよく分かっている
のだろう。

ラジスもひとつ頷き、私を見る。

「風。お前は早く戻れ。此处へは連れて行けないと言ったはずだろ
う」

「いや、それを言うならお前もだろラジス。それにこいつはまだ使

える」

密偵が割り込んでくれて、なんとか言及を逃れた私は一息吐く。出来ることならこのまま着いていきたいが、ミリットが迫っている。

それまでに何とか役に立ちたい。

「この状態だと、普通の人には見えないんですよ。なら、私が前に行って様子を見るから。そうすれば余計な戦いはせずに済むんじゃない？」

「その通りだ」

密偵も同じ事を考えていたようだ。

日が昇るまではまだ時間がある。

とは言っても二、三時間程しかないが。

それまでなら、目的地にはたどり着けるだろう。

ラジスは暫く考えた後、エヴィを見る。

「エヴィ殿。王はどこにいる」

「恐らくは、玉座かと。私が逃げ出したことで騒ぎにはなっているはずですから」

「それプラス、俺達の乱入か」

「儀式も玉座の間で執り行われることになっています。ここにもうじき多くの兵が来るはずです」

ラジスはガステイを見上げ、密偵に目線で合図する。

密偵は頷き、今後の方針は決まったようだった。

「玉座の間を目指す。風、位置は分かるか」

「ええ。探検したもの」

「――帰ったら詳しく聞かせて貰う」

あ、やべ。

思わず口が滑ってしまった。

愛想笑いしながらも、密偵とエヴィに急かされて私は前へと飛び出した。

兵士達の巡回も、灯の量も、声の大きさも。

いつもにも増して騒々しい。

そして、倒れる者や血痕をみて、喉が鳴る。

そうだ。

人の……人が人を殺す「死」を見るのは、これが初めてなんだ。

「風」

ラジスが目を細めて私を見ている。

歯が震える。

体が震える。

悲鳴を上げそうになる。

発狂しそう。

気持ち悪い。

これが、人間なのか。

初めて知った。

父様が狩りに行っていた動物と同じようで違う。

人間の命も、儚く、脆い。

知識ではない。

想像でもない。

実感した。

「大丈夫よ」

齒を食いしばる。

そうだ。

今、私には、私にしか出来ないことをしているのだから。
目をそらしてはいけない。

私は、人ではなく、この世界に、元竜として生きているのだから。
私が此処にいられる夜明^{タイムリミット}けまで、あと二時間――。

始動する血の宴（後書き）

ギリギリ予約投稿セーフー！

テンションがおいしいです。

9時には書き上げていたのですが、エヴィ視点がおかしいと思い、始めからやりなおし。

ナギ視点になりました。

そこで一つ気付いたのは、ラジスの国とラジスの本名。まだ一度も出してなかったわ……。

拙い文章ですが、読んで頂いて感謝です。

即席で書いたのでかなり粗いです。

ご指摘在れば、直せるところは直したいです。

いつも読んで頂いてありがとうございます！！

雄叫びを上げて

昔話をしましょう。

ある時、異世界から召喚された少女がいましたとさ。

その少女は沢山の、本当に沢山の命を犠牲にして、そこにいました。

浮き上がる悪魔に教えられた魔法円。床には沢山の竜と人の贄。召喚された少女は恐怖に震えました。

「帰して」

少女は叫びます。

しかし、誰にもその叫びは届きません。誰も、少女に応える者はいません。

周りで見ている貴族、王様、召喚士達は成功に喜び、少女に醜い笑みを向けます。

少女は王様の誕生日の催し物として喚ばれたのでした。

帰る術などございません。帰る術など、誰も知らぬのです。

暫くそうしていると、その部屋に、一人の娘が入ってきました。

漆黒の瞳と長い髪を持ち、黒いドレスを着た娘でした。

黒真珠のような、黒曜石のような、いいえ。

夜の闇のような妖艶な娘は、少女に近づき、王を睨みました。

「愚かな人間よ。我が同属を贄に使ったことを、身を以て悔いるがいい」

その娘は竜の姫君。

竜から人を愛し、人の姿を選んだ者だったのです。

その愛する者は、この儀式の贄にされていました。

怒り狂った竜の姫。

一夜にして、その国は跡形もなく消されました。

それから数百年。

逃げ延びた人々がおなじ国を立ち上げました。

もう二度と、同じ過ちなど起こさぬように、神殿を造りました。

もう二度と、竜の姫君を——「夜の姫」を怒らせてはならぬと。

しかし、人とは愚かな者。

同じ過ちを繰り返すのです。

そのたびにある国は滅ぼされ、ある者は異世界から召喚された者に討たれました。

その神殿も、その当時は栄えていれど、いつしか人々に忘れ去られていきました。

忘れ去られた神殿は既に人などいません。

そこには、永遠の刻に縛られた「夜の姫」と異世界から来て人を捨てた少女がいます。

ゆっくりと、変わりゆく国を見つめながら、待っています。

これは、人々に忘れ去られた遠い昔の話にございます。

子供の為のおとぎ話にもならなかった話にございます。

もはや真実を知るものは一部の古竜と、神のみにございます。

人の中で知るものは、悪魔により話をねじ曲げられて伝えられた者ぐらいでしょう。

ああ、もう時間だ。

行きなさい。

この神殿で見たり聞いたりしたことを人に話してはなりませんよ、人の子よ。

私達は待たなければならぬのですから。

次世を受け継ぐ竜の姫君を。

それまで、ゆつくりとしていたのです。

直に「夜の姫」も帰ってきます。

帰れなくなる前に、人の元へと戻りなさい。

ああ、そうだ。

もし、これ以上気になるようでしたら、グラディエルに行きなさい。

あそこには数百年前に召喚された私と同郷の者が書いたメモがあるはずですから。

ま、捨てられていなければ、ですけど。

久々に人と会ったので、つい喋りすぎました。

さようなら、人の子よ。

もう道に迷ってはいけませんよ。

「こつち！」

私は皆より先に前に出て誰かいないか確認する。

どうやら反乱まがいのものが起きているらしく、城内は混乱に包まれていた。

何人もの人間が死んでいた。

いくつもの血だまりがあった。

精神体では無理だろうけど、吐きそうになる。

発狂でもしそうな血の濃い匂い。

途中でドルカと合流し、バジイの存在も空高くに感じられた。

「王座の間は確か中心であつて！」

「っああ、そうだ！ 此処を曲がればっ」

角を曲がる前に、立ち止まる。

玉座の間の前には、見張りも多く立っていた。
そこで何かが行われていること、または主要人物が集まっている
ことなどすぐにわかる。

耳を澄ませばこちらに近づいてくる足音も複数。
迷っている暇はない。

「強行突破、致しますか」

ドルカが指示を仰ぐ。

ラジスは頷き、剣を抜いた。

「風、目を閉じて耳を塞いでいる。此処から動くな」

私も戦える。

そう言葉にしようとしたが、口を閉じた。

それは、果たして本当に人を殺せるのか。

人であった時と同じくらい竜として過ごした。

だが、竜として本来行う狩りは、私の魔力が少なすぎた為に父様が
代わりに行っていた。

そう。私は、命を己の牙で奪ったことがないのだ。

死ぬ瞬間はいくら見ている、見るのとするのは違う。

私は、ラジスを殺すと言いながら、まともに誰かを殺すことさえ
出来ない。

「お前は汚れなくて良い。このままでいろ」

私の心情を分かっているかのようにかけられたラジスの言葉。
ちよつと生意気。なんて、睨んでみる。

ラジス是不敵に笑い、私に背を向けた。

この背を、今、私の実体があれば。どうしていたんだろう。

私は眉を寄せ、首を振る。

そんなことを考えている時では無い。

ラジス達が走っていく。

怒声、悲鳴、断末魔。

上がった声に、私は言われたとおりに目を閉じ、耳を塞ごうとして――やめた。

目を見開き、拳を握る。

そして、血にまみれた廊下を一気に走り抜けた。

戦いに必死な彼らは見えない私に気づくことさえ無い。

それでいい。

私は、私のしなければならぬことがある。

「ここね」

兵士たちが護るその扉の前で、私は立ち止まった。

重厚なその扉。王に謁見する部屋には相応しい入り口である。

だが、既にその威光は輝きを失っていた。

兵士たちをすり抜け、その扉に手をかける。

今まで何も触れなかったはずなのに、その扉は簡単に開く。

中からも、そばに立っていた兵士からも、驚きの声が上がった。当たり前だ。

今、私は見えざる者なのだから。

「何者だ！」

玉座から立ち上がった男が叫んだ。

その男はエディに似ている顔立ちをしていた。
いや。エディがこの男に似たのだろう。

ドルダン王。エディの父親であり、愚かな竜の反逆者。

「私の声は、聞こえるかしら？」

私は声を張り上げるでもなしに、静かに告げた。

部屋には巨大な魔法円が描かれており、その魔法円には複雑な文字が描かれている。

何を元に描かれているなど、私が知るよしもない。

胸くそが悪い。舌打ちしたい。

だが、それをあえて押し黙る。

声は聞こえたらしく、ドルダン王がきよろきよろと視線を彷徨わせる。

こいつは違う。

ラジスの様な王の器でも、エディの様な手練れでも無い。

雰囲気からしても、何から何まで違う。

「声だけで失礼するわ。私は誇り高き銀竜・ガルフィオナの娘ナギ・ドルダン王。お前に問う」

唇を歪ませ、一礼した。

もつとも、相手には見えていないんだろうけど。

ドルダン王が微かに目を見開いたのが分かった。

何度か呼吸を整えた後、ドルダン王は王座へと座る。

それを合図に私はドルダン王を睨み付けた。

「異界の……いえ。大いなる力を、何故、欲す？」

ずっと誰しもが思っていただろうこと。

皆……ドルダン王の息子でさえ、その真意にたどり着くことは出来なかった。

愚かな反逆の王。

しかし、本当に愚かなだけなのか？

ドルダン王は、唇をつり上げる。

「下らぬ。力が欲しい。奪われる者から、奪う者へと確実にする力が。そのなにかが悪い！」

奪われる者から、奪う者へと？

それは、かつて何者かよりなにかを奪われたということか。

そこまで、狂気に向かわせるほどの何か。

それが起こったというのだろうか。

「貴様等が俺から奪っていった。それを、貴様等に味合わせる為に、此処までしてきた！」

「奪ってきた？ 私たちがお前に、一体何をしたって言うのよ！」

ドルダン王に負けじと、私は声を張り上げる。

ドルダン王の目的は、召喚などでは無い。

私たち、竜に向けられる敵意。

こいつの目的は、始めから人間と竜の戦争なのだ。

戦争が始まってしまえば誰が始まりであろうと、その始まりが死ぬのと、終わりはしない。

それどころか、竜を服従しようと考ええている。

先ほど見せられた絆を見た後では、ドルダン王への反発は更に大きかった。

「ドルダン王の妻、エネリが竜に殺された。違うか？」

ラジスの声が、王座の間に木霊した。

ラジスは既に兵士の鎧を脱ぎ、少々かすり傷は負っているものの大した怪我は無い。

そして、服には血の跡がついている。

それは誰の血なのか。考えたくも無い。

ドルダン王はラジスに笑いかけた。

「グラディエル王。久しいな」

「ドルダン王。質問に答えろ」

剣は既に抜かれていた。

血塗られた剣に、貴族や召喚士達が怯えの表情を浮かび上がらせる。

ドルダン王は頷いて嘲笑った。

「確かに。我妻は、竜に殺された。事故に見せられ、崖から落とされて！」

「父さん……」

王座の間に入ってきたエディがつぶやく。

エディは知らされていなかったのだろう。

ただ、事故で死んだとだけ伝えられたのかもしれない。

母親の死に関して、エディは素直に驚いている様だった。

「竜など、滅べば良いのだ。全て、全て全て！！」

ドルダン王の感情に呼応するかの様に、魔法円が発光した。

それに力を使ってもいない召喚士達が驚きの声を上げる。

貴族は逃げ惑い、兵士たちまで逃げ出していた。

多大な魔力放出が、目の前で行われる。

銀色の光が現れ、緊張感がふくれあがった。

媒介も無しに、何をする気なのか。

そのとき、魔法円から銀色の鎖が現れた。

「凧！」

ラジスの叫び声。

私は手を伸ばそうとしたが、ラジスに届くわけが無い。

そのまま魔法円から出てきた鎖に絡め取られ、引きずり込まれる。

「っああ！」

喉が、体の芯が、沸騰する様に熱い。

痛みを感じないはずの精神体が悲鳴を上げる。

私は思わず体を丸めた。

「密偵や裏切り者が分からぬとも思っていたのか。召喚士など、所詮飾り。この魔法円には、俺の力だけで十分だ！」

エディの背後に立っていたガスティにも銀の鎖が伸びてゆく。

それをドル力とエディが剣ではね飛ばした。

銀色の光が迸る。

精神体にも痛みはあるのが不思議だった。

いや、この魔法円は、竜を意識して狙っている。

精神体にも有効なのか。

「凧！」

「ラジス!!」

私に近づこうとしたラジスが魔法円の結界にはじき飛ばされる。ラジスを密偵さんが抱き留め、銀の鎖がその方へと伸びてゆく。

それは何故？

ラジスを追撃するためか。

そう思うと、体の芯が冷えた。

ラジスは体制を整えようとしているが、間に合うのか。
あの鎖に突き刺されてラジスが死んだら、私の望みは、達成されるのでは無いだろうか。

——それは、違うでしょ

胸の中にわき上がる思い。

その瞬間、私は咆哮を上げていた。
意思のあらん限り。

雄叫びを上げて（後書き）

いつもいつもありがとうございます！

夜中のテンションすげえってな感じです。

最近ぎりぎり多いな。そして荒いな！！

判断能力が落ちてるって果てしなくヤバイ

拙すぎるこの作品に多くの意見や感想ありがとうございます。

作品に関しての予定などは活動報告にて。

読者様に感謝して、とりあえずお休みなさい。

夜の継承者

空気が、震動する。

高く高く上がる、竜の咆哮。

それは、森に眠る動物達を起こし、世界に散らばる竜が顔を上げた瞬間。

そして、私の中で、何かが弾けた。

——身体中が、熱い。

焼ける様な熱さが、私の身を焦がす。
同時に感じられるのは、竜達と同調。

ある竜は咆哮を返し。

ある竜は産声を上げ。

ある竜は羽ばたき。

ある竜は見えぬはずの此方を見る。

目を開ければ、城ではなく、高い空の上に立っていた。

それは一時的な錯覚で、私は魔法円の中央に立っている。

銀の鎖は蠢き、私を捕らえようとするが、肌に触れることは既がない。

また、ラジスに向かっていた銀の鎖は、砂の様に散り散りになった。

それは何故か。

知らないけれど、私がやったのだろうか。

「夜の姫……」

呻くような、王の声。

私はゆっくり振り返り、王を睨み付けた。

驚愕、恐怖、畏怖。

それらが混じりあった愚かな王の表情。

どうやら、私の姿が見えているようだった。

我が同属を贄に使うとし、いつか手を下そうと思っていた獲物を横取りしようとした王。

多くのものを奪おうとして、何を恐れる？

「くそっ」

私が歩を進めると、王は頬を引き吊らせ、隣にいる兵士が剣を抜いた。

前へ踊り出ようとした兵士を、黒い鎖が絡めとる。

そのまま力を込めれば、兵士は気絶したから、離してやった。

王の銀の鎖よりも、繊細な動きをする黒い鎖に王が驚いているのが分かった。

それもそうか。

普通なら、こんな細かい動きを意思だけで動かすことなど出来ないのだから。

「黒い魔法円……！？」

王の声き真下へ視線を移せば、黒い鎖を発現させた魔法円が、私の足下あった。

黒い、全てを多い尽くす様な漆黒の魔法円。

黒い鎖は更に勢力を伸ばし、銀の鎖に絡み付く。

銀の鎖は侵食される様に黒へと色を変え、塵と化していったのだ。さすがに、私もちよつとびっくり。

今までの苦労は、なんだったのだろう。

そして、見る間に変わる、変わる。

銀の光を放っていた魔法円が、黒へと塗り潰されて。

それは異常な光景。

あり得るはずのないことなのだ。

完成された魔法が、塗り潰されてゆくなど。

それは私の意志であり、そうではない。

私は熱に魔^{うな}された、微睡みの中にいる様な感覚だった。

まるで自分の思い通りにならなかった子供が、泣きながら力を振るう感じに似ている。

私に魔力はないはずなのに、習ってもいない魔法を何故、使えるのか分からない。

ぼんやりと不思議に思っばかり。

振り返れば、ラジス達も私を見ていた。

「風……大丈夫なのか？」

「まあね」

驚いた様な、そんな顔。

私は小首を傾げた。

皆さん、口、開きっぱなしですよ？

「っ風！」

ラジスが鋭く叫び、走り出した。

その手には抜き身の剣。

私を突き刺す気が。

え、でもそう言う展開だったわけ？

纏まらない意識の中、一人怪訝^{けげん}な顔をしながら、黒い鎖はラジスに向かう。

しかし、ラジスに届く前に、鎖は自らその軌道を反らした。
なんで？

私に辿り着いたラジスは片手で私を引き寄せ、剣を振るう。
鈍い金属音が、王座の間に響き渡った。

「つく」

「邪魔をするな！」

王が叫び、ラジスが呻く。

顔を上げれば、王が剣を私に降り下ろし、ラジスがそれを受け止めていた。

ラジスは片手で私を抱いているから、力が入らずに劣勢の様だ。
私は手を振るい、黒い鎖を展開させる。

黒い鎖は今度は素直に王を絡めとり、剣を取り上げた。
拘束された王は、憎々しそうに私を睨んでくる。

見覚えがある。

この眼は、ラジスを、大切な人を殺したラジスを睨み付けた、あの時と同じ光を宿していた。

「化け物が……っ！ エネリも、そうやって殺したんだろうっ」

何故、私にそれを言うのか。

エネリなんて女は知らない。

「……どういうこと？」

「惚けるな！ あの時もっ、あの時もそうやってお前は黒い羽を出していただろうっ！」

王は有らん限り声を張り上げて怒鳴った。

大分興奮状態なのか、顔が赤く、息が荒い。

私は背後を確認すれば、黒い……黒い羽だと？
なにこれ！？

しかも自由に動く。

背中にあつたのは、私がまだ竜の時に持っていた羽を、今の私サ
イズに直したかの様な大きさの黒い羽。

さつき迄はなかったはずなのに。

「エネリが死んだ後、確かに黒い羽を持った女が飛び去るのを見た。
お前なんだろう！？」

知らない。

人になったのだって、まだ半年も経っていない。

羽が出たのは今が初めて。

普通の元竜に羽はない。

王が言いたくなる程、私とその女が似ていても、それは私じゃない。
い。

「エネリが死んだのは、何時だ」

ラジスが声を上げる。

王は憎々し気に下唇を噛み締め、思い出している様だった。

「2年前の、冬だ」

その時、私はまだ竜だった。

父様の庇護の下でしか生きられない弱き竜。
あり得る訳がない。

「場所は、プランツエル神殿近く、か」

その言葉に、王は私から視線を外した。
紡いだのは密偵。

何故知っているとでも言いた気な王に、密偵は怒りの表情を浮かべた。

「我が君の神殿を汚したか、人間！」

今にでも王を殺さんばかりに、今まで傍観を決め込んでいた密偵は剣の柄に手をかける。

密偵がそこまで怒る理由が分からない。

我が君、とはラジスのことではないのか。

だが、この言いようでは違う様に聞こえる。
一体どういうことか。

「どうした」

「どうしたもねえぞラジス。そいつは竜を纏め上げる【夜の姫】が住まう神殿を、俺達にとって何処よりも神聖な場所を無断で踏み込んだ」

主に対して使うものではない言葉で、密偵は言った。

憤怒の形相で、密偵は王を睨み付ける。

「殺されて当たり前だ。我が君は人間を何よりも嫌う。人間が番を贄にしてから特にな」

贄と言うことは、その女は旦那さんを儀式で失ったということなのだろう。

夜の姫とは誰か。

分からないけれど、その女が殺した人の夫が儀式をしようとするなんて。

なんて、皮肉なことなんだろう。

「考古学者なら、人気のない遺跡や神殿を調べるのは当然だ。それの何が悪い！」

「それで持ち主の怒りを買って恨むなんぞ、逆恨みも良いところだ」

エネリと言う人が死んだのは当然だと言いた気に、密偵は吐き捨てる。

王はそれに歯ざしりした。

「黙れ……黙れ黙れ！」

王から魔力が溢れだし、突風が吹いた。

ラジスが咄嗟に私を抱き込んだから、私に被害は感じなかった。けれど、周りはそういう訳にはいかない。

「竜に復讐を。俺にはそれだけの力がある！」

王が高笑いを上げれば、更に強く吹き荒れる風。エヴィを見れば、壁に叩き付けられ、苦し気だ。王は己の護るべき者さえ見誤ったのか。それはとても――。

「ふ、ざ……な」

「……風？」

私は、唇を噛み締める。

確かに、王は愛していた妻を失ったかも知れない。

竜の……夜の姫に殺されたのかも知れない。

それほどまで、狂ってしまうまでに愛していたのかも知れない。

その気持ちは、痛い程分かる。

私も父様を殺されて、ラジスを、人間を恨んだ。

今だって許す気はないし、許せるものではない。

だって、私にとって父様は全てで、世界だったのだから。

でも、それでも！

「ふざけるな！！」

私の意思に反応して、黒い魔法円が発現する。
黒い風が巻き起こり、王の風を消していった。

「お前は、何で気付かない。気付けない？」

ラジスから離れて、足を踏み入れる。

長い髪が、風に遊ばれた。

王が忌々し気に私を見ている、気になりはしない。

こんな、デカイだけの餓鬼に、何を恐れる必要がある。

私とこいつは、こんなにも違うのだから。

「お前に王座も、エヴィも勿体ない」

「……エヴィだと？」

王の目線の先には、漸く立ち上がるまで回復したエヴィがいた。

ほら。今さら気付いた。

こんなにも父親思いの息子を、こいつは忘れていたのだ。

私は自分の顎に手を掛けて、一つ頷いた。

「そうだ。お前を殺して、エヴィを連れて帰ろう。どうせこの事は夜の姫に報告しなければならいんだから、そしたら、お前を此処で殺しても、エヴィがいる。代わりにエヴィが死ぬよりも辛い罰を

受けていれば、きっと夜の姫だって人間に戦争なんて仕掛けないだろうし、万々歳じゃないか」

ニツコリと、笑いかけてみる。

王は目を見開いた。

「そ、それは……」

「何？　これを誰が收拾すると思っている。お前が死に、直系のエヴィも罰を受けるのは、当然だろう。それを分かってこんなことを起こしたんじゃないの」

私は王に近づく。

王は私を睨むのを止め、ただ、ただ。

驚きに目を見開くばかり。

ああ。なんて愚かな。

「お前の一番の罪は、その、身勝手さだよ」

胸ぐらを掴んで、思いつ切り殴り付ける。

私は、人間じゃない。

ラジスはともかく、他の人間にとって、今の力は石で殴られた様なもの。

それくらい重い一撃をくれてやった。

「お前は、私とは違う。大切な家族が、まだ残っているだろうが！」

王は私のその言葉を聞いて、気絶したのだった。

夜の継承者（後書き）

中途半端で申し訳ない。
まだ続きます。

また、文章がおかしいところは追々修正したいと思います。

夜に包まれて

私は、肩で息をしていた。

身体が熱い。

私はよろめいて王から離れ、膝をつく。

気絶した王が倒れていても、最早視界に入っていなかった。

「くそつたれ！」

それは誰に向けてなのか。

王に向けてか、原因を作った夜の姫に対してか。
もしかしたら、自分に向けてなのかも知れない。

熱い。身体が、言うことを聞かない。

私は自身を抱き締め、齒を食い縛った。

下手に気を抜けば、意識を何処かに持って行かれる。
本能で分かっているながら、何も出来ない。

「風、体に戻るか」

限界だろう。と、ラジスの気遣う声が聞こえた。

大丈夫よ。人間なんかは、心配される謂れはない。

いつもの憎まれ口は叩くことが出来なかった。

王を殴り、気持ちが悪く落ちて着いてきたからか、気が抜け、身体が不調を訴えかけてくる。

確かにこのままではいけない気がして、私は戻るように念じた。
しかし、身体の熱が邪魔をする。

「——っ!？」

今までは、呼吸する様に精神体を身体に戻していた。本体に戻らなければ、不調が治せないことくらい分かる。だが、戻ることが出来ないのだ。

余りに長時間精神体でいると、身体に戻る時に拒絶反応がでる。

しかし、それは24時間以上精神体でいればの話。

リアもそう言っていた。

原因が分かれば、それを解消すれば良いが、分からない。

分からないと言うのは、一種の恐怖に繋がる。

血の気が一気に引いた。

「なんで……」

「戻れないのか？」

ラジスに私は頷く。

何故、王を殴れたのか。

何故、急に魔力が膨れ上がったのか。

そんなことはどうでも良い。

何故、元の身体に戻れない？

「……魔力が、多すぎる」

漏れ出た私ではない微かな声。

見上げると、密偵が私に近づいて見下ろしていた。

ラジスが身を引いた、私の真っ正面。

密偵は膝をつき、私の頬に触れようとする。

触れることはないその手には、濃い密度の魔力が宿っていた。

「多すぎる魔力は、精神を喰らう。だから、お前が生まれた時に全ての魔力を封じたのに」

苦しい、哀しい表情を浮かべる密偵。

魔力というものは、普通感じることは出来ない。
ぶつけられるか、譲渡されたり、相手が見せようとした時に漸く
感じる事が出来る。

だから、今まで気付くことがなかった。

触れて私の魔力を抑えようとする、優しい魔力。
その魔力を、私は知っている。

「父様……？」

まだ、半年しか経っていないのに、随分昔の様に感じた。
私の呟きに、密偵——父様はくしゃりと顔を歪める。
言葉に出さない肯定。

何より、魔力が証明していた。

「姫、姫、姫。いつだって姫は可愛い俺とリゼリアティスの愛し子。
死なせない。絶対に」

熱がほんの少し治まる。

呼吸が大分楽になり、父様に手を伸ばした。

触れることはなくても、頬に手を伸ばせば、嬉しそうに父様は眼
を細めた。

姫は可愛い。

父様の口癖だった。

母様がいない代わりに、私を愛するのは。

可愛い、愛してる、大好き、愛し子。

人間だった頃の私なら、ドン引きする様な数々の言葉を、父様は
平気で言った。

親子間でも、竜は師弟関係でいることが多い。

だから、私達は異質だったのかも知れない。

父様の友達も、よく苦笑してたし。

だが、番^{つかい}に対しては、絶対の愛情を注ぐ竜。

狂愛とも呼べる愛情を番に捧げるのだ。

父様は、母様の代わりに私を愛でた。

竜としては異質。

だからこそ、魔力がない（仮）私は生きていられた。

「ガルフィオナ、それ以上はやめろ」

「姫を残して死ぬつもりはないから安心しろ、ラジス」

ラジスは父様が父様であることに、特に驚いている訳でもなかった。

もしかして、知っていたのか。

だとしたら、多少なりとも今まで私を生かしていた意味も分かる。

妃に据えるでも無しに、野放しにしていたのは、父様が生きてい

ると知っていたから？

いつか、側を離れていくと分かっていたから？

ある程度父様と私の魔力が溶け込んで抑え込まれた後、私は体の調子が良くなっていた。

同時に眠気が襲ってくる。

魔力を注ぐことを父様がやめる。

息が多少上がっているのは、気のせいでは無い。

それほどまでに、私の魔力が大きいと言うこと。

「姫。すまない。俺が不甲斐ないばかりに……」

何に対して謝っているのか、私には分からなかった。

でも、たぶん、父様が謝っていることは、決して父様のせいなんかじゃないことだと思う。

父様が、生きていた。

それがただ、うれしくて。

頬を涙が伝う。

人間なら、魔力だけで個人を特定するのは難しいと思う。

人間は私たち竜よりも、魔力に対しての認識が繊細では無いから、分からない。

私たち竜は、人間には感じられない魔力の気質や流れを個別に認識する。

だから、魔力だけで相手が誰か分かるのだ。

竜で良かった。

本当にそう思う。

死んだと思っていた父様が、生きていたのだから。

「呟、後のことは任せて、先に元の体に戻れ」

ラジスがさういう。

素直に頷いたのは、これ以上此处にいれば、また魔力を抑えられなくなるだろうから。

父様を不安気に見上げた。

すると、父様は微笑んでいた。

「大丈夫だ。こっちが済めば、また、会える」

ラジスのその言葉を信じて、私は目を閉じる。

エヴィ達が、王の前にいた。

気絶した王に、何かを話しかけている。

決意のこもった瞳。

語りかけるのは、懺悔か、憎まれ口か。

始めてあったときよりも、男らしく見えるその姿。きつと地に足をつけて進んでいける。

だから大丈夫だろうと、私は判断した。

【甘いな】

女が、闇の中でそう言った。

足下には土と草の感触。

頬を撫でる風は優しく、冷たい。

目を開けると、空は夜。

月が見え、星が輝いており、日付が変わったであろうことが推測される。

周りを見渡しても誰もおらず、私は首を傾げた。

【我が継承者。リゼリアティスとガルフィオナの娘、凧】

見上げれば、そこには黒よりも輝いて見える夜色の長髪と瞳をもつ女が居た。

背には私が出していたような黒い羽。

体のラインがはつきりと分かる黒いドレスを着ており、華美でも無く、粗野でも無い。

そこには精錬された美しさがあった。

【……貴女は？】

背筋が震え、いつもはお前と使っている言葉を直した。
圧倒的な力の差を感じた。

魔力をぶつけられている訳でも無いのに、ひしひしと感じる魔力量。

先ほどの私の量を遙かに超えているのでは無いだろうか。

私が古語で返したのが、おかしいの？

笑っていることが、更にプレッシャーをかけられる気がするのは何故だろう。

【そう緊張するな。私は儀式によって半分の魔力を失っている。お前が魔力を制御出来るようになれば、今の私以上の魔力だろうよ】

どうやら、心の声がダダ漏れだったらしい。

正確には、先ほど……のところから、口に出していたようだ。

女は可笑しそうに笑いながら、私と同じ目線まで降りてきた。

【楽にせよ。今の私は隠居した身だ。口調もいつも通りで良い。どうせ、ずっと見てきたからな】

見てきた？

女の言葉は不可解で、その癖ヒントを多く残していた。

しかし、まとまらないヒントは、明確な答えにはたどり着かない。
私は顔をしかめ、女に先を促した。

【では、貴女は誰？】

【……そうだな。ヨル、とでも呼べ。お前と同じく魔力を多く持ち、
竜の王として定めを持つ者】

女、ヨルは私に手を差し出す。

【我が継承者。あの黒き者と会ったのが定めのように、私とこうして会ったのもまた、定め】

風が吹く。

歪で、冷たく、刺すような痛みを錯覚した。

その瞳は、冷たく、重く。

身震いしてしまうほどの冷徹さを含む。

常人ならば、失神してしまいそうなほどの――狂気。

【お前は甘すぎる。前世の意識が残り過ぎた。消せるが、そうならばお前の人格は破綻しよう】

甘すぎる。

それは、恐らく先ほどの王に対してしたことだろう。

いや、それだけではない。

父様を殺したと思っていたラジス達を、私は殺さなかった。

憎みはした。恨みもした。

しかし、いつの間にか人間を許していた。

殺すのが、惜しいと思うまでに、心をするしていたのかもしれない。

人間だったら、もっと憎んだだろう。

人間だった私なら、もっと行動に出たんだろう。

でも、そうしなかった。

私に、前世の記憶があるから？

それをどうして、ヨルが知っているのか。

【何故、私が記憶を持っているって知っているの？】

【さて、な。私は長き時を生きすぎたから、色々知っているだけだ】

あ、今話をそらされた。

むくれた私の手に、ヨルの手が添えられる。

白く、細い指先は思いの外温かい。

【時間だ。また、定めが交わりし時に相見えよう。我が継承者】

追求しようとした私をさらりとかわして、ヨルはそう言った。

夜が世界を覆う。

小さい頃は怖いと思っていた夜。

それが優しいものだと思うようになったのは、いつからか。
いつしか、手の温もりは消えていた。

夜に包まれて（後書き）

ご愛読ありがとうございます。
次回で二章は終わりです。

告げられた鎮魂歌

目が覚めると、天井が見え、心配げなリアがのぞき込んでいた。

「ナギ様、お体は大丈夫ですか」

「大丈夫。……それよりも、今は何時？」

「午前九時にございます」

私に異常が無いことを確かめたリアは、私の支度を始める。

何事も無かったかのように……って、ドレスは嫌だって。

何事も無かったかのように出すな。

それから化粧とかもいらない。

髪は一つに纏めるだけで良いから。

って、隠してた男服どこ行った？

ちょwいつの間に物色してたのリア！？

体の不調は特になく。

動いても体が軋む、嘔吐、下痢などの症状もなかった。

まるであの出来事が夢であったかのような錯覚。

だけど、私の解放された魔力がそうではないことを告げている。

明け方近くに大量の魔力放出を私から確認。

王宮は騒然となり、金翼棟周辺の立ち入りは禁止。

厳戒態勢が敷かれた。

目が覚めた後、何が起ったのかをリア達に告げた。

勝手な行動にロードルは狼狽えながらもラジスに早馬を送り、シユーバは厳戒態勢を取り下げ、リアは安堵しているようだった。

勿論、説教は甘んじて受けました。当たり前だよ。心配かけたんだもん。

その日から別に不調でもないのに部屋に隔離され、数日をすごし

た。

シューバや兵士の皆が休憩時間などの合間を見つけて面会に来てくれたり、侍女達がお菓子を作ってくれたり、以外と充実した。ラジス達が戻るには一ヶ月はかかるらしい。

ドンダンの処理や、ドルダン王の処罰などを決めるなど多く、途中で右翼棟の執務長が出立して合流する予定だ。

合流して入れ替わると同時に、ラジス達はこちらに帰って来ることになる。

一人、人数が多いことにロードルは首を傾げていたが、父様であることを知っている私は嬉しかった。

ロードルはおでぶりんだけど、有名な宰相らしく（ぶふっ）執務長の派遣は一週間前には出立していたようだ。

だから、あと一週間で合流する……かな。

執務長つて、シューバと年があんまり変わらないはずだけど、もやしだからなあ。

一ヶ月。実質三週間半。

とても長く感じられた。ラジスが出立した二週間よりももっと長く。

その間私は魔力の制御について、リアに教わっていた。

その間侍女としての任務はどうするのか聞いたけど、笑顔で

「ナギ様が最優先です」

断言された。

断言されると、何故かちょっと照れる。

でも、訓練して分かったことなんだけど、リアって魔力凄いよね。普通の人間が持つ魔力にしてはでかいというか。

あのヨルに比べると蟻のようなものだけど、竜の半分くらいの魔力はあるよね？

それは別に侍女なんてしなくても、騎士団や魔術師に十分なれるということ。

「私はナギ様と同じ元竜なのですから、同然ですよ。まあ、以前の三分の一といった位ですね」

さらりと言われた！

え、今まで人だと思っていた私はなんなの。

人間の癖に。とか、思いつきり言ってたよね？

うわああああ。ごめんなさい、ごめんなさい！！

リアは苦笑して、私の頭を撫でる。

こんな所に同族がいるなんて思わなかった。

もしかして、ロードルに養女になったのも、それが関係しているのだろうか。

聞こうと思ったけど、止めた。

知らなければならぬ時に、必然と知ることになるだろう。

「じゃあ、真名もリア？」

「いいえ。別にありますが、いずれお教えしますね」

人差し指で己の唇に当てる彼女は可愛いから、良しとする。

つと、まあ話はずれたが、こうして私の三週間は過ぎていった。

ラジスが帰って来る予定の日。

ちよつとそわそわしているのを、シューバには驚かれ、リアには窘められる。

で、ロードルにはお菓子をもたらった。

そんなに子供じゃないんだけどな……。

馬車が城門から見えた時、私は城壁から飛び降りる。

皆いつものことなのであまり気にしてはいない。

対応するようになったなあと、私を感じる程度だ。

「ラジス！」

駆け寄ると、ラジスは私の頭を軽く叩いただけで、目線を後ろにした。

最終尾にいる人物に、私は頬を綻ばせる。

「父様！！」

父様は両手を広げて私を迎えてくれた。

周辺にいる騎士達や、出迎えた人々は驚いていたけれど、気にしない。

父様は馬上に私を持ち上げ、頭を撫でてくれる。

それは父様が竜の姿でいた時に頭で撫でてくれたのと同じくらい愛しくて、あたたかい。

「姫、良い子にしてたか」

「私、そんなに子供じゃ無いですう」

親子と言うより、恋人みたい。なんて誰かが呟いたら、なんか皆びびってた。

どしたの？

ラジスが間に割って入ってきて、一端お開き。

私は夜分遅くにラジス、父様の訪問を受けることになった。

そこであの後のことを教えて貰う。

ドルダン国は四方を他国に囲まれた完全なる内陸国だ。

その囲んでいる国が大きいところがこの国をあわせて二力国。

その他二力国は小国ながらも独自の発展と武力を極めてきた強豪

国。

今回その4カ国と付属国の代表として、ラジスが赴いたことになっている。

ドルダン王に加勢し、ドルダンを腐敗させていた要因の貴族達は失脚、または処刑。ドルダン王は公開処刑——絞首——となったが、実は身代わりで密かにこの国の片隅にある洋館に移った。エヴィに対しては、積極的に復興に向けて動き出しているのと、ラジスに協力したことが認められて、処刑などにはならなかった。

ドルダン王は既に戦意や悪意は損失しており、魂が抜けたような状態らしく、元の状態に戻るには少々時間がかかる。

次のドルダン王として、エヴィが着任したものの、この事態が収拾したら退位して相応しい王位の者に譲るそうだ。

何でドルダンがこの国の属国にならなかったかと言うと、主に他の三カ国が関係している。

今まで腐敗していようと、ドルダンがあつたから、強豪4カ国の平和は守られていた。

それをこの国が取り込んだとなれば、均衡が崩れる。

戦争がいつ起きても、ドルダンに侵略が起きても可笑しくない状況になり、せっかく戦争を止めた意味が無くなってしまうから。

そして、エヴィが退位するとともに、ドルダンは国名をリアルド国へと帰るらしい。

リアルド——古語では【紡ぐ】。新しい未来を紡ぐ国と言う意味らしい。

実質、これでドルダン王家は王家としてなくなり、事実上の失脚となる。

一重に滅びなかっただけ、ましだと言うべきだろう。

「それから、半年前のことを」

父様が私に微笑みかけながら、そう言った。

「前からドルダンが姫を人質にとって俺を贄に捧げるつもりだったことを、俺は知っていた」

「父様を贄に!？」

父様は頷いて、眼を伏せる。

その目は、もう終わった事だと告げていて、私はそれ以上いえない。

「隙を疲れて姫を奪われたら、手出しする術はない。だから、俺はラジスに協力を求めた」

「言い訳に過ぎないが、ドルダンにそれらしき動きはなかった。定期的にガルフィオナと会う日……あの日に、俺が近くに行くまで」

ラジスはバジイに乗って空から向かっている途中、数百キロ前にある魔力の乱れを見て分かったらしい。

打ち合わせも出来ない中、ラジスは私を保護しに。ドル力は父様に刺客を伝えに別れた。

その時、父様はドル力に己を殺す様に言ったのだ。ラジスより決断権を委ねられていたドル力は父様を殺すことにした。

人間になれば、ある程度のカモフラージュが出来る。

また、私に関しては、ラジスが城に連れていき、保護すると分かっていた様だ。

「人間と竜では、余りにも違い過ぎる。お前に捨てられたなど思っ
て欲しくなかった」

だからこそ、人間に心を許さない様に仕向けた。

「全て俺の身勝手だ。ラジスを恨まなくて良い」

ラジスは私達を守る為に、父様を殺した様に見せ掛ける必要があった。

私を妃と呼びながらその扱いをしないのは、いつか別れることを知っていたから。

「父様……」

私は立ち上がり、父様の胸に飛び込んだ。

父様は危なげ無く私を受け止めてくれる。

ずっと会いたかった。

今はそれだけで良い。

「大好き。父様。竜も人間と同じ心を持つんだもの。矛盾していても当然。私が父様を大好きなことには代わりないわ」

ありったけの感情を込めて、微笑む。

父様は私を強く抱き締め、声を絞り出す。

「……ありがとう。必ずまた、家族で暮らそう」
「うん、父様……」

家族が揃う時

「リアが、母様……？」

「ああ、そうだ。リアも隠れてないで、ほら」

親子三人、向かい合う。

リア……ううん、母様がおずおずと私の前に出てきて。私は驚きながら、手を伸ばした。

びくりと震える母様。

それを見て、私は目を細めた。

「や、やっぱり駄目です」

漏れ出た言葉。

私と父様は黙って見守っていると、母様は首を振った。

「私、ナギ様に母親として顔向けなんて出来ないのです。だって、生まれたばかりのナギ様よりも、主様を選んだのですよ。生まれたばかりの我が子を見捨てて！ 母親、失格です」

18年前。

母様は契約していたロードルの妻が病気になった。

腹には子供がいて、どちらも助からないことは分かっていた。

数少ない人間の友人だったロードルの妻のことを知り、居ても立つてもいられず、母様は自分の魔力を分け与えた。

魔力は他者に与えすぎたり、使い過ぎたりすれば死を招くことになる。

分かっていた。分かっている、母様は選んだ。自分の死も厭わずに。

結果、母子共に回復したが、母様は竜として生きるには余りにも弱り過ぎた。

父様の魔力を分け与えられても、危険な程に。
だから、人として生きることにした。私にも、二度と会うことなく生涯を終えるつもりでいたのだ。

「ナギ様に母と呼ばれる資格も、ガルに愛されることも自ら捨てました。そんな私が、今さら母親面なんて出来ません」

否定する母様。

抱き締めずには、いらなかった。

「それでも、私の母様には変わらない。うつん。友を救おうとした母様を、私が責められると思う？ …… 誇るに決まってる。私の母様は、こんなに凄いんだって」

いつか感じたぬくもり。

あの時、母様みたいだなんて思って、本当に母様だなんて。母様は顔を歪めて、私を抱き締め返してくれる。
強く、私が此所にあることを、喜ぶ様に。

「一緒に暮らそうよ。母様」

ポロポロと流れ落ちる大粒の涙。

それを父様が唇で吸い上げる。

言葉には出なかったけれど、確かに、母様は頷いた。

こうして、家族が揃った。

話し合つて、城を出て暮らすことにした。

元々ラジスも父様も、そのつもりだったらしく、準備はあつと言
う間。

細々な書類を片付け、皆に挨拶をして。寂しいなんて言われなが
ら、心残りがないようにして。

最後ラジスに挨拶して、城から出た。
家族三人、手を繋いで。

さよなら。

いつまでもラジスが私を見ていたなんて、自惚れるつもりはない。
竜と人間。余りにも価値観が違い過ぎる。

再び会うことは無いかも知れない。

子供が出来たなら、見せに行くぐらいは許されるだろう。

私は振り返ることなく、旅立ったのだった。

家族が揃う時（後書き）

結局、短いながらももう一話。

これで本当に第二章は終了です。

ご愛読ありがとうございました（*´、`*）

また、来年も黒竜娘をよろしくお願いします（）。・ω・。（ゞ

良い御年を！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5441v/>

黒竜の娘と国王陛下

2011年12月31日17時48分発行